

盛岡市内遺跡群

—平成 11 年度発掘調査概報—

屠牛場遺跡	第 1 次発掘調査
志波城跡	第 84・86 次発掘調査
町田遺跡	第 10・11・12 次発掘調査
竹鼻遺跡	第 11 次発掘調査
百目木遺跡	第 14 次発掘調査

2000. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市には今から約 10,000 年前以上の縄文時代草創期の遺跡から、新しくは盛岡城跡に代表される江戸時代の遺跡まで、約 500 ヶ所の遺跡が確認されています。これらの遺跡は盛岡市の歴史を語る上において貴重な遺産であることはいうまでもありませんが、近年の各種開発により遺跡及びその周辺は急激な変化を遂げています。

これらの開発に伴い、かかる埋蔵文化財包蔵地の多くは破壊の危機に瀕しており、記録保存という形で実施される緊急発掘調査も年々増加する傾向にあります。

当市では文化財保護の立場から今年度は国の補助事業として、屠牛場遺跡など市内各地の遺跡において個人住宅新築に伴う事前の緊急発掘調査を実施しました。

その結果、数々の貴重な資料が発掘され、盛岡市の歴史を知る上において大変重要な成果をあげることができました。

本書は、その調査概報として資料の呈示を意図としてまとめたものですが、市民をはじめ、関係機関・研究者等の方々に活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり、指導・助言を下された文化庁記念物課並びに岩手県教育委員会文化課に対し深く感謝を申し述べると共に、御理解と御協力を頂いた地権者各位並びに地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 12 年 3 月

盛岡市教育委員会

教育長 佐々木 初 朗

例 言

1. 本書は、平成11年度国庫補助事業「盛岡市内遺跡群」の発掘調査概報である。
2. 本書は遺構および遺物の実測図など多くの資料の呈示を意図して、編集に神原雄一郎、花井正香、今野公顕、津嶋知弘、三浦陽一、千田和文、似内啓邦、室野秀文、菊池与志和、藤村茂克、平澤祐子、安井千恵子があつた。
3. 遺構の平面位置は、平面直角座標X系を座標変換した調査座標で表示した。
4. 高さは標高値をそのまま使用している。
5. 土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。
6. 各遺跡における遺構記号は次のとおりである

屠牛場遺跡・竹鼻遺跡・町田遺跡・百目木遺跡

	遺 構	記号	遺 構	記号	遺 構	記号
記 号	竪穴住居跡	RA	土 坑	RD	配石・集石	RH
	建 物 跡	RB	竪 穴	RE	井 戸 跡	RI
	柱 列 跡	RC	溝 跡	RG	遺物集中区	RP

志 波 城 跡

	遺 構	記号	遺 構	記号	遺 構	記号
記 号	柱 列 跡	SA	井 戸 跡	SE	土坑・竪穴	SK
	建 物 跡	SB	築地・土塁	SF	そ の 他	SX
		SC		竪穴住居跡		
	溝 跡	SD		SJ		

7. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市教育委員会で保管してある。
8. 調査体制

[調査主体]	盛岡市教育委員会
	教育長 佐々木 初朗
[調査総括]	課 長 大崎 琢夫
	課長補佐 菊地 誠
	文化財係長 亀山 助正
	文化財主査 千田 和文
[事 務]	事務嘱託 阿部 徳乃
	文化財調査員 野口 律子、仁杉 幸子、格矢 幸吉
[調 査]	文化財主査 似内 啓邦
	文化財主任 室野 秀文、菊池 与志和
	文化財主事 津嶋 知弘、三浦 陽一、神原 雄一郎、藤村 茂克
	文化財主事補 今野 公顕、花井 正香
	文化財調査員 平澤 祐子、安井 千栄子

[発掘調査および整理作業] 天沼芳子、泉山紀代子、伊藤敬子、上村百合子、内山陽子、遠藤ユキエ、大森祐子、大森サナ、大鹿ミヨ子、長内理恵、金沢達也、川村久美子、鹿野奈保美、菊池睦、北口智里、工藤則子、小林ヤヲ、小林勢子、小松愛子、斉藤 静子、佐々木紀子、佐々木ひろみ、佐々木亮二、白澤和子、鈴木賢治、田貝恵子、高橋ツヤ、館野雅之、谷藤貴子、竹花栄子、富山武史、鳥居順子、中島京子、長岡ミエ、中田美奈子、川上昌子、樋口泰子、平野 淑子、藤原美知子、藤田友子、前田敏幸、南幅洋子、村山伊津子、女鹿麗子、百岡峰子、山下摩由美、吉田貴美、米山徹

[地 権 者] 穴口昇、小畑勝、北田俊和、北田光志、北川浩一、戸塚幸男、中村哲、宮田春男

目 次

序言	
例言	
目次	
図版目次	
挿図目次	
I. 屠牛場遺跡（第1次調査）	1
1. 調査経過	1
(1). これまでの調査	1
(2). 周辺の遺跡	2
2. 調査成果	5
(1). 調査内容	5
(2). 縄文時代の遺構と遺物	6
(3). 縄文時代の遺物包含層と遺物	12
(4). 調査のまとめ	36
附章. 資料紹介－新茶屋遺跡出土の縄文時代早期土器	37
II. 志波城跡（第84・86次調査）	41
1. 遺跡の環境	41
2. 調査内容	41
III. 町田遺跡（第10・11・12次調査）	43
1. 遺跡の環境	43
2. 調査内容	45
(1). 第10次調査	45
(2). 第11次調査	50
(3). 第12次調査	51
3. 調査のまとめ	54
IV. 竹鼻遺跡（第11次調査）	55
1. 遺跡の環境	55
(1). 遺跡の地形と位置	55
(2). 歴史的環境	57
2. 調査経過	57
(1). これまでの調査	57
(2). 平成11年度の調査	61
3. 古代の遺構・遺物	62
4. 調査のまとめ	69
V. 百目木遺跡（第14次調査）	71
1. 遺跡の環境	71
(1). 遺跡の位置と地形	71
(2). 歴史的環境	73
2. 調査経過	73
(1). これまでの調査	73
(2). 平成11年度の調査	76
3. 調査内容	77
(1). 奈良時代の遺構・遺物	77
(2). 平安時代の遺構・遺物	83
4. 調査のまとめ	92
写真図版	
報告書抄録	

図 版 目 次

- 第1 図版 屠牛場遺跡第1次調査区全景、屠牛場遺跡第IV層出土土器
第2 図版 屠牛場遺跡第III層出土土器（1）・（2）・（3）
第3 図版 志波城跡全景、志波城跡第84次調査区全景
第4 図版 町田遺跡全景、町田遺跡第10次調査区全景
第5 図版 町田遺跡第12次調査区全景、竹鼻遺跡第11次調査区全景
第6 図版 百目木遺跡全景、百目木遺跡第14次調査区全景

挿 図 目 次

第1図	屠牛場遺跡の位置	1
第2図	地形分類と周辺の遺跡分布	3
第3図	屠牛場遺跡全体図	4
第4図	屠牛場遺跡第1次調査全体図	5
第5図	RE 001 竪穴跡	6
第6図	RD 001・002・003・004・005・006・007・008 土坑	7
第7図	ピット土層断面	10
第8図	RD 001・002・004 土坑・ピット出土遺物	11
第9図	遺物包含層(Ⅳ層)出土土器(1)	13
第10図	遺物包含層(Ⅲ層)出土土器(2)	14
第11図	遺物包含層(Ⅲ層)出土土器(3)	15
第12図	遺物包含層(Ⅲ層)出土土器(4)	16
第13図	遺物包含層(Ⅲ層)出土土器(5)	17
第14図	遺物包含層(Ⅲ層)出土土器(6)	18
第15図	遺物包含層(Ⅲ層)出土土器(7)	19
第16図	遺物包含層(Ⅲ～Ⅰa層)出土土器(8)	20
第17図	遺物包含層(Ⅳ～Ⅰa層)出土土製品	21
第18図	遺物包含層(Ⅳ層)出土石器(1)	26
第19図	遺物包含層(Ⅳ～Ⅲ層)出土石器(2)	27
第20図	遺物包含層(Ⅲ層)出土石器(3)	28
第21図	遺物包含層(Ⅲ層)出土石器(4)	29
第22図	遺物包含層(Ⅱ～Ⅰa層)出土石器(5)	30
第23図	遺物包含層(Ⅲ層)出土石器(6)	31
第24図	遺物包含層(Ⅲ～Ⅰa層)出土石器(7)	32
第25図	小岩末治氏採集遺物	35
第26図	新茶屋遺跡の位置	37
第27図	新茶屋遺跡出土土器(1)	38
第28図	新茶屋遺跡出土土器(2)	39
第29図	志波城全体図	42
第30図	町田遺跡の位置	43
第31図	地形分類と周辺の遺跡分布	44
第32図	町田遺跡全体図	46・47
第33図	町田遺跡第10次調査全体図	48
第34図	RA 113 竪穴住居跡	49
第35図	RA 113 竪穴住居跡出土遺物	49

第 36 図	町田遺跡第 11 次調査全体図	50
第 37 図	R A 114 竪穴住居跡	51
第 38 図	R A 114 竪穴住居跡出土遺物	51
第 39 図	町田遺跡第 12 次調査全体図	52
第 40 図	R D 001・107 土坑・ピット	53
第 41 図	遺物包含層土層断面	53
第 42 図	R D 001・107 土坑・包含層出土遺物	54
第 43 図	竹鼻遺跡の位置	55
第 44 図	地形分類と周辺の遺跡分布	56
第 45 図	竹鼻遺跡全体図	58・59
第 46 図	竹鼻遺跡第 11 次調査全体図	61
第 47 図	R A 024 竪穴住居跡	62
第 48 図	R A 024 竪穴住居跡出土遺物	62
第 49 図	R A 025 竪穴住居跡	63
第 50 図	R A 026 竪穴住居跡	64
第 51 図	R A 025・026 竪穴住居跡出土遺物	65
第 52 図	R A 027 竪穴住居跡	67
第 53 図	R A 027 竪穴住居跡出土遺物	68
第 54 図	百目木遺跡の位置	71
第 55 図	地形分類と周辺の遺跡分布	72
第 56 図	百目木遺跡全体図	74
第 57 図	百目木遺跡第 14 次調査全体図	76
第 58 図	R A 115 竪穴住居跡	78
第 59 図	R A 115 竪穴住居跡出土遺物	80
第 60 図	R A 116 竪穴住居跡・ピット	81
第 61 図	R A 116 竪穴住居跡出土遺物	82
第 62 図	R A 117 竪穴住居跡	84
第 63 図	R A 117 竪穴住居跡出土遺物 (1)	86
第 64 図	R A 117 竪穴住居跡出土遺物 (2)	87
第 65 図	R A 117 竪穴住居跡出土遺物 (3)	88
第 66 図	R A 117 竪穴住居跡出土遺物 (4)	89
第 67 図	R D 107・108 土坑・R Z 101 焼土遺構・ピット	91
第 68 図	R D 108 土坑出土遺物	91

《遺物の表現について》

1. 土器

- a. 縄文時代早期に属する土器の実測図・拓本 1/2 スケールとし、ほかは 1/3 スケールとした。
- b. 挿図の土器配列については、モチーフおよび施文技法でまとめた。
- c. 縄文時代の土器で隆線・沈線の表現は上端・下端の実線・破線で表し、陰影は表現していない。

2. 石器

- a. 剥片石器は 2/3 スケールとし、礫石器は 1/3 スケールとした。ただし、長大な礫石器は 1/6 スケールとしている。
- b. 石器の展開順序は、基本的には左に表面（本文では背面とする）、中央に右側縁、右に裏面（本文中では腹面とする－主要剥離面）を並べ、必要に応じて測縁および縦断面下に横断面を付け加えた。
- c. 挿図の配列は出土した層位順に配列し、さらに器種ごとにまとめた。
- d. 剥片石器の磨滅痕は網目スクリーンで示し、礫石器の自然面はドットで示した。

3. 土製品・石製品・木製品

- a. いずれも 2/3 スケールとした。
- b. 挿図の配列は出土した層位順とし、さらに器種ごとにまとめた。

☆なお、挿図中の記号番号は遺物の出土地点および出土層位を表している。

(例) T₈-B₁₀, B₁ ※1 遺跡全体を 50 mメッシュで区切って大グリッドを設定し北西から西-東を
↓ ↓ ↓ A・B・C…のアルファベット、北-南は 1・2・3…の数字を付し、グリ
※1 ※2 ※3 ッドの呼称名はその組み合わせとした。

※2 さらに 50 mメッシュを 2 mメッシュに分割し、小グリッドとした。北西から西-東を A~Y、北-南は 1~25 を付し、グリッドへの呼称名はその組み合わせとした。

※3 遺物の出土層位を表している。

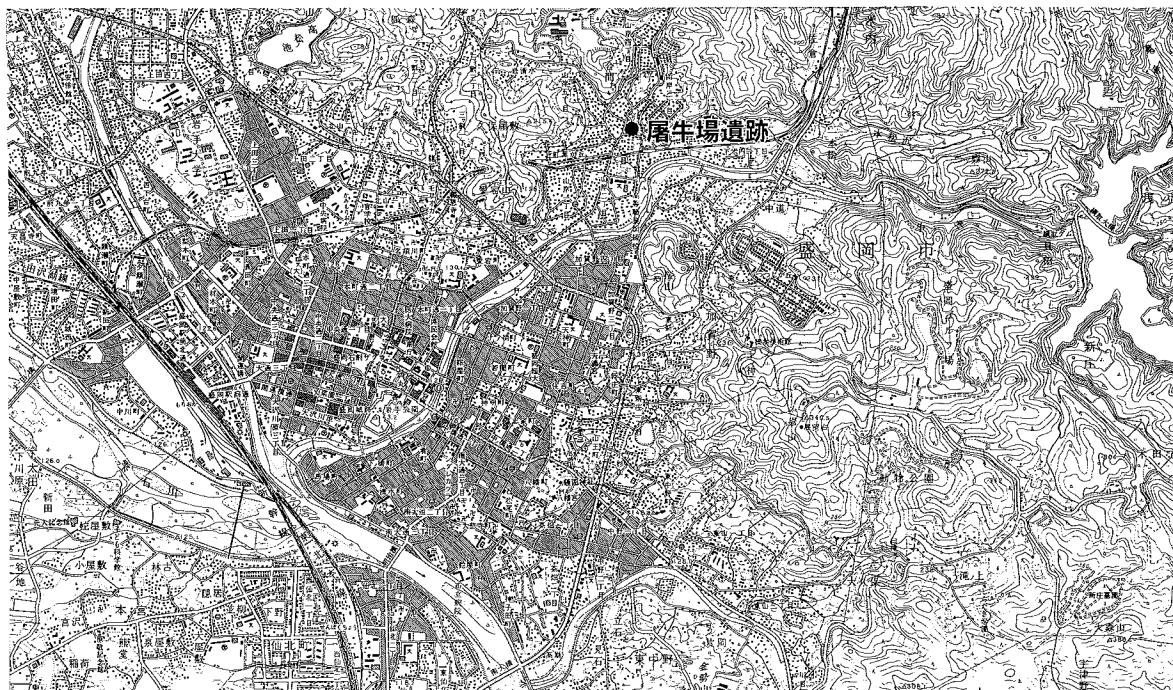
I. 屠牛場遺跡第1次発掘調査

屠牛場遺跡（第1次調査）

1. 調査経過

(1) これまでの調査

- 位置** 屠牛場遺跡は、盛岡市街地の東部、山岸3・4丁目地内に所在する(第1図)。
- 地形** 盛岡市東部は地質構造上、北上山地の主要な境界となる早池峰構造体の西縁部にあたる。盛岡東部の早池峰構造体に属する山地は、高森山(626 m)を中心とする高森山山地と、朝島山(607 m)を中心とする朝島山山地の中起伏山地、さらに西に続く大日向山山地、岩山(341 m)や大森山(381 m)を含む建石山山地などの小起伏山地および四十四田丘陵で構成される。
- 屠牛場遺跡は、前述した大日向山山地南西端の、中津川にはりだす舌状丘陵の南西裾に立地し、地形的には、中津川下流域に発達する低位段丘と小起伏山地が入り組む地域である(第2図)。
- 地質** 屠牛場遺跡は、大日向山山地・四十四田丘陵の裾に沿うように広がる崖錐性扇状地の末端に位置する。地形を構成する地質は、最下層に蛇紋岩・凝灰岩・チャートを含む角礫層があり、その上部には洪民火山灰層が約1 mの厚さで堆積し、小岩井浮石層を含む分火山灰層がさらに覆う。
- 過去の調査** 昭和30年代より縄文時代の遺物が採集され、本格的な調査は実施されなかったが、小岩末治氏、武田良夫氏による踏査により、縄文早期の沈線・貝殻文土器や続縄文時代の後北C₂式土器が採集されていた。その成果は小岩(1960年「岩手県史」上古編)、武田・吉田義昭(1970年「奥羽史談」55)、武田・高橋昭治(1982年「北奥古代文化」13)に発表されている。



第1図 屠牛場遺跡の位置 (1 : 50,000)

(2) 周辺の遺跡

屠牛場遺跡を含む中津川流域・小起伏山地末端の丘陵地には数多くの遺跡が分布している。中津川に合流する米内川は濁川とも呼ばれ、流域の大志田、畑、盲沢、上米内、中米内、豆門地区には流路に沿う小規模な沖積段丘が見られる。

米内川流域には多数の縄文～近世遺跡がある。縄文時代早期前葉の遺跡では、盲沢・向館・一本松熊ノ沢遺跡があり、少量ではあるが上記した遺跡において日計式押型文土器が出土している。一本松熊ノ沢遺跡は1967年に発掘調査が実施されており(草間、吉田、武田1968年)、押型文土器の他に白浜式・寺ノ沢式に類似する貝殻文土器が出土している。

縄文時代前期の遺跡では、米内川上流域に位置する畑遺跡で、大木2式を伴う竪穴住居跡が確認されている。

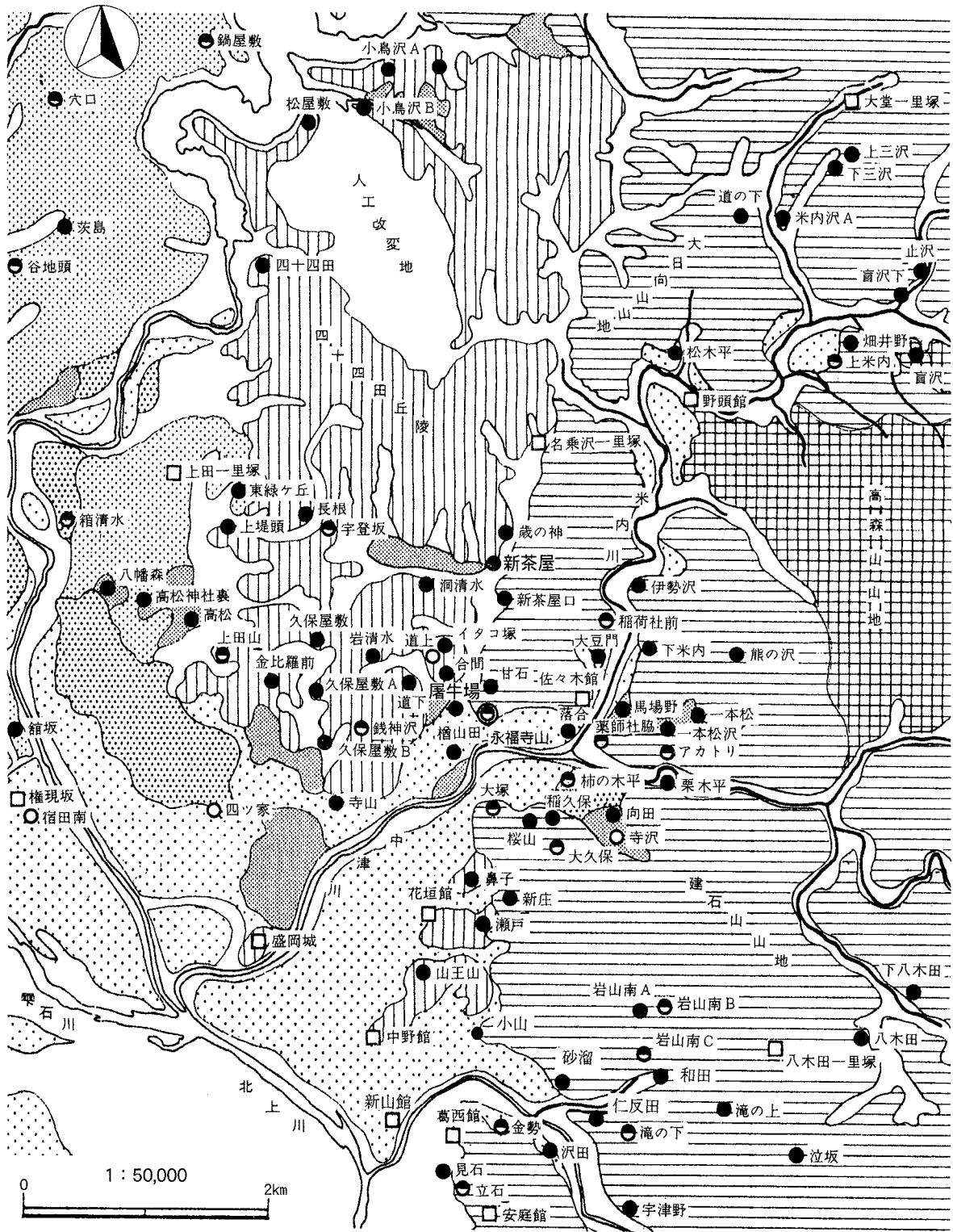
中期になると遺跡数が増加し、規模が大きくなる傾向がある。代表的な遺跡として、畑井野遺跡・上米内遺跡・盲沢遺跡・大豆門遺跡があり、中期初頭～前葉を主体とする遺跡として畑井野遺跡・大豆門遺跡があり、中葉～末葉にかけての遺跡として上米内遺跡・盲沢遺跡がある。立地の面から見て特徴的なのは、中期初頭～前葉の遺跡が丘陵頂部に立地することに対し、中葉～末葉にかけての遺跡は前述した米内川に沿う小規模な沖積段丘上に立地することが多い。


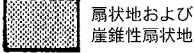


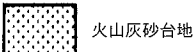


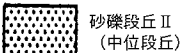
中津川は澄川と呼ばれ、米内川と合流するまで渓谷が続き、浅岸、矢倉、小貝沢、滝の沢、綱取に小規模な沖積段丘を形成するのみである。一方で、中津川上流域では激しい水流によって岩塊が浸食され、小規模な洞穴・岩陰が多数形成されている。主な洞穴・岩陰遺跡として中津川岩陰・バクチ穴洞穴があり、中津川岩陰遺跡からは縄文時代の土器片が採集されている。その他にも急崖の斜面に洞口が確認されており、未確認の洞穴・岩陰遺跡が多数存在するものと思われる。

中津川流域において遺跡が増加するのは、米内川との合流点付近からであり、主な遺跡として柿ノ木平遺跡・薬師社脇遺跡・落合遺跡・稲久保遺跡がある。

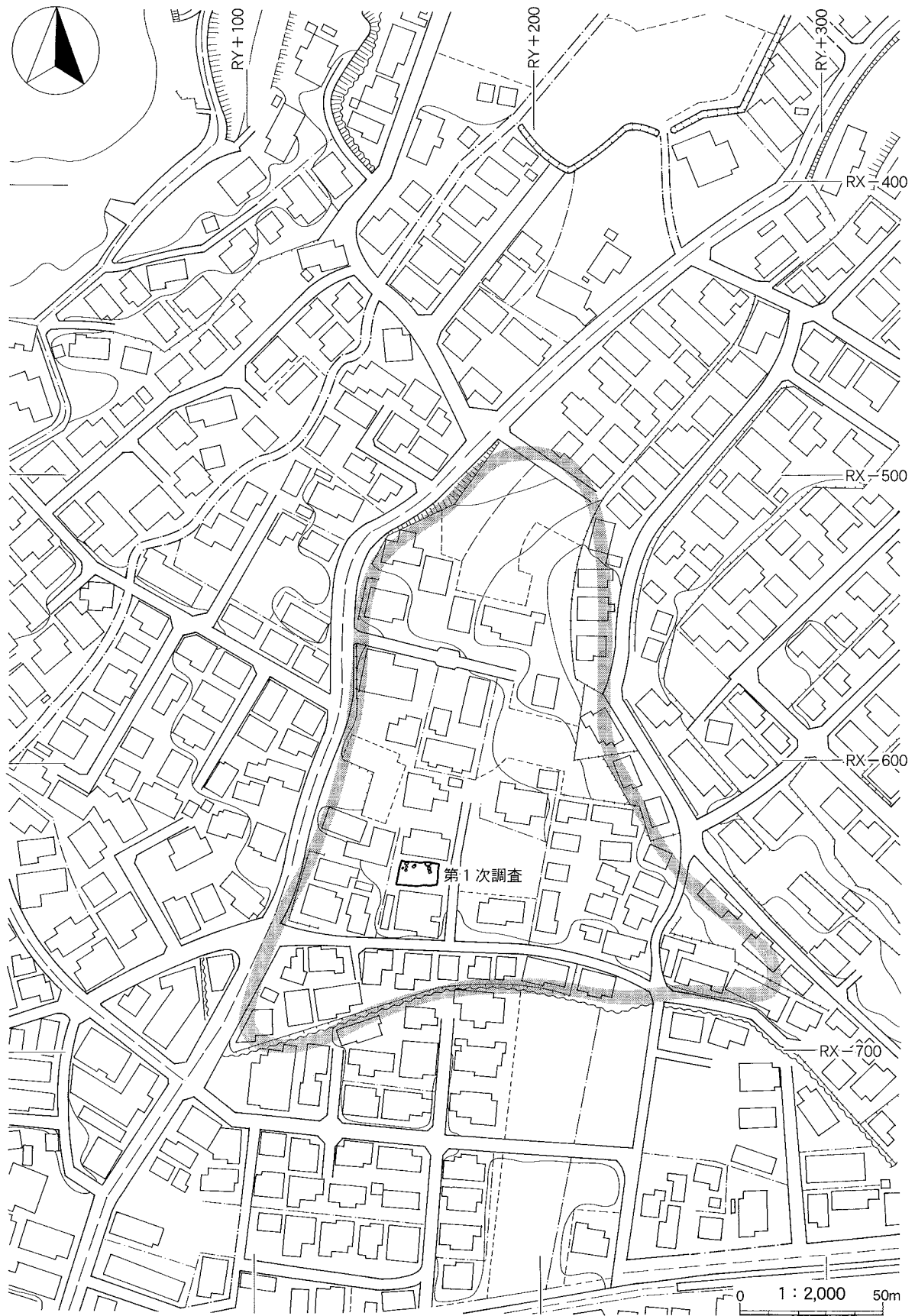
薬師社脇遺跡からは縄文時代早期～後期、平安時代の遺構・遺物が確認されており、特に下層からは多量の貝殻文土器が出土しており、今後の調査に期待される遺跡である。柿ノ木平遺跡は中津川、米内川の合流点を望む段丘上に位置し、縄文時代早期～近世にかけての大規模遺跡である。現在、区画整理事業に伴う事前の発掘調査を平成8年度以来継続して実施している。

地名である「山岸」地区とは、四十四田丘陵南端と大日向山地南端丘陵地に挟まれた谷底平野一円をさすものである。過去には名乗沢・洞清水を源流とする沢が流れ、永福寺南方で中津川と合流していたようである。合流点付近は氾濫原になっており、屠牛場遺跡・永福寺山遺跡は氾濫原を望む高位面に位置している。屠牛場遺跡より北方約1kmには新茶屋遺跡が所在する。新茶屋遺跡からは縄文時代早期各時期の遺物が多量に出土しており、縄文時代早期の土器研究上重要な資料が豊富であることから、屠牛場遺跡出土土器との関連性を考察するため、一部の資料について本報告に掲載している。その他にも才の神遺跡・合間遺跡・日向遺跡において縄文時代早期の遺物が採集されており、市内においても数少ない縄文時代早期遺跡の集中地区といえよう。



- | | | | |
|---|--|--|-----------|
|  中起伏山地 |  扇状地および崖錐性扇状地 |  砂礫段丘Ⅲ (低位段丘) | ● 縄文時代 |
|  小起伏山地 |  火山灰砂台地 |  谷底平野および氾濫平野 | ● 縄文時代～古代 |
|  丘陵地Ⅰ |  砂礫段丘Ⅱ (中位段丘) | | ○ 古代 |
| | | | □ 中世・近世 |

第2図 地形分類と周辺の遺跡分布

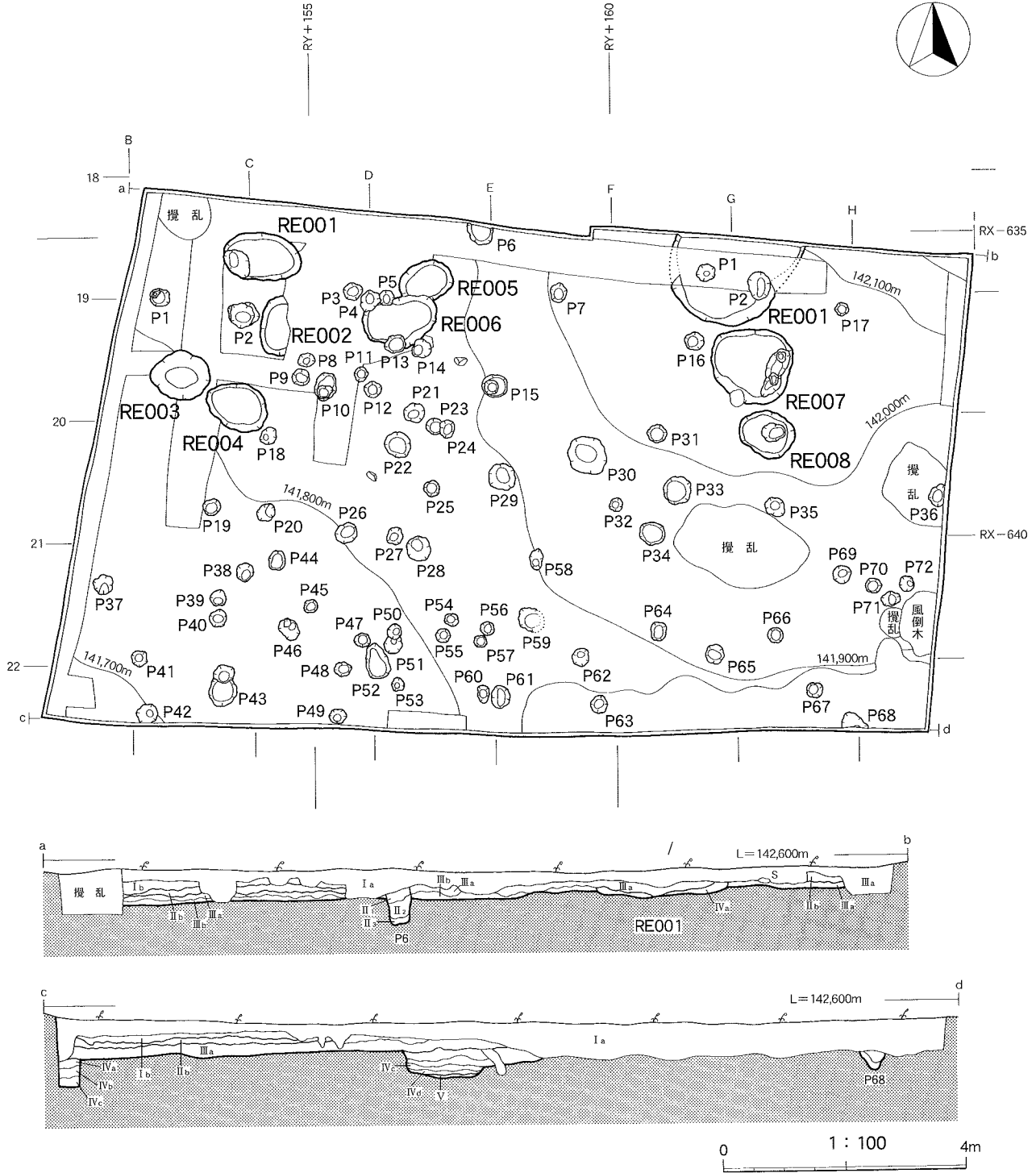


第3図 屠牛場遺跡全体図

2. 調査成果

(1) 調査内容

第1次発掘調査区は、盛岡市山岸3丁目10-23に所在する。個人住宅新築に伴う事前調査を実施したもので、発掘調査は平成11年9月7日から9月28日まで行い、調査面積は121.7㎡である。



第4図 屠牛場遺跡第一次調査全体図

第1次発掘調査区は、遺跡の南半部に位置し、調査区は東から西にかけて緩やかに傾斜し、調査最終面における標高は北東隅で142.5 m、南西隅で142.1 mをはかる。

検出遺構・遺物 今回の調査では、縄文時代早期の竪穴状遺構1基（RE001）・土坑1基（RD007）・縄文時代後期以降と考えられる土坑7基（RD001～006・008）、時期不明のピット（P1～72）・遺物包含層が確認された。遺物包含層はIV a～III a層が主体であり、多量の縄文時代早期の遺物が出土した。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

RE001 竪穴（第5図）

時期 縄文時代早期 **プラン** 楕円形 **長軸の傾き** N 32° E

規模 長軸上端 1.58 m以上・下端 1.42 m以上、短軸上端 1.92 m・下端 1.89 m、深さ 0.38 m

掘込面 IV b層上面 **検出面** IV b層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる。

埋土 自然堆積によるもので、大きくA・B層に大別され、各層はさらに2層に細別される。A層は縄文時代早期の遺物包含層であるIII b層が流入した層である。
A層—暗褐色土を主体に、スコリア粒を含む。A2層はA1層よりも堅くしまる。
B層—暗褐色土を主体に、粒状の黄褐色土を少量含む。

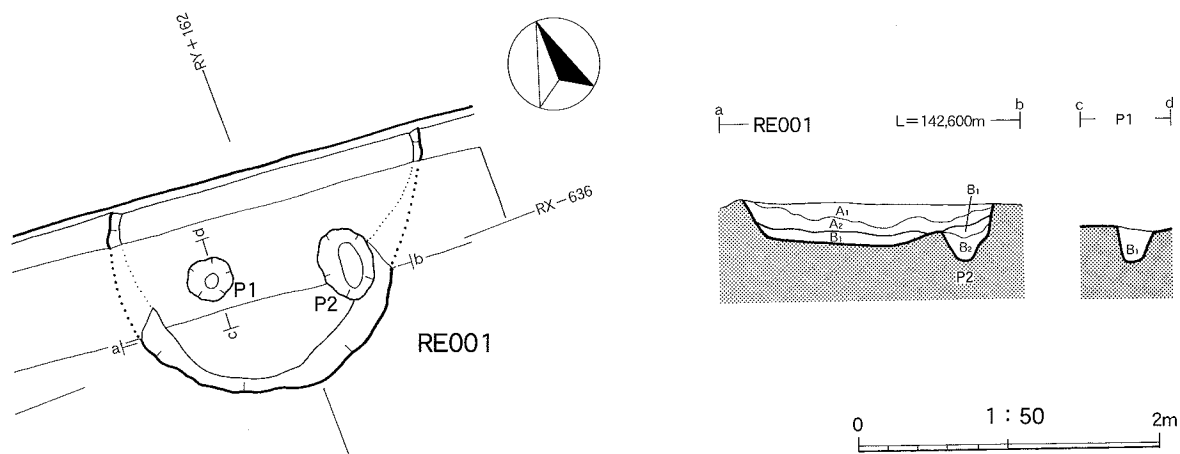
ピット P1・P2が底面を掘り込む。ピットの深さは次のとおりである。P1—0.14 m・P2—0.13 m

出土遺物 縄文時代早期の土器小片がA層より出土している。

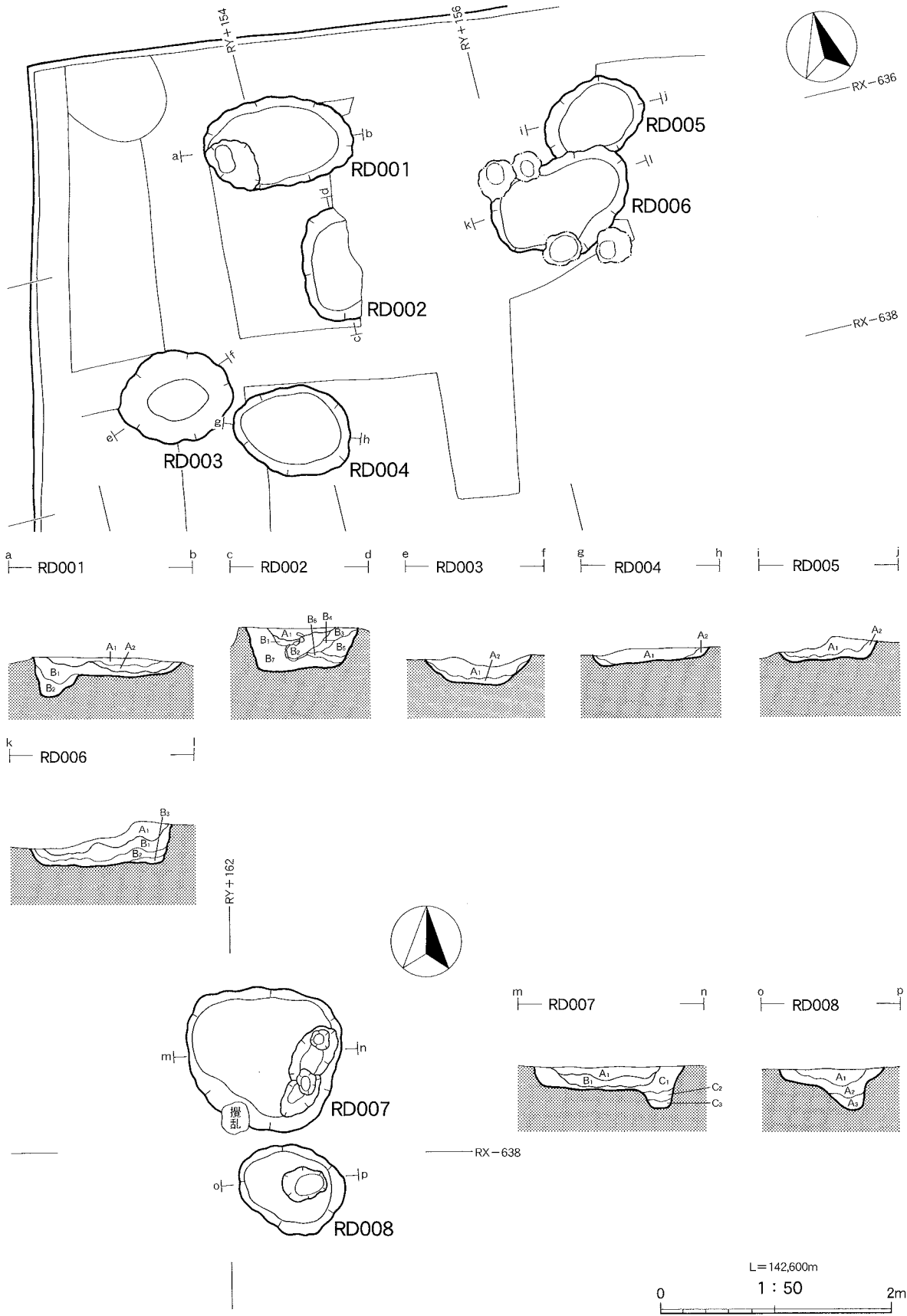
RD001 土坑（第6図）

時期 縄文時代 **プラン** 楕円形で、長軸西端にピット状の掘り込みがある。 **長軸の傾き** E 10° S

規模 長軸上端 1.31 m・下端 1.13 m、短軸上端 0.78 m・下端 0.61 m、深さ 0.19 m



第5図 RE001竪穴跡



第6图 RD001·002·003·004·005·006·007·008土坑

掘込面 削平 **検出面** III a層上面 **壁の状態** 外傾して緩やかに立ち上がる。
埋土 自然堆積によるもので、大きくA・B層に大別され、各層はさらに2層に細別される。
A層－暗褐色土を主体に、粒～塊状の黒褐色土を含む。
B層－暗褐色土を主体に、粒状の黒褐色土、炭化物を少量含む。
出土遺物 石器（第8図6） 6は石錐で、両面両側縁より剥離を施し、先端部の断面形状は三角形を呈す。

R D 002 土坑（第6図）

時期 縄文時代 **プラン** 楕円形？（東半部は攪乱される）
規模 残存部上端 0.92 m・下端 0.73 m、深さ 0.19 m
掘込面 削平 **検出面** III a層上面 **壁の状態** 直壁ぎみに外傾して立ち上がる。
埋土 人為堆積によるもので、大きくA・B層に大別され、B層はさらに7層に細別される。
A層－赤褐色土（焼土）を主体に、粒状の暗褐色土を含む。
B層－暗褐色土を主体に、粒状～塊状の黒褐色土が含まれる混合土層。
出土遺物 土器（第8図1） 1は0段多条LRが施された深鉢で、口縁部～体部上半は失われている。

R D 003 土坑（第6図）

時期 縄文時代 **プラン** 不整楕円形 **長軸の傾き** E 7° N
規模 長軸上端 1.00 m・下端 0.51 m、短軸上端 0.75 m・下端 0.32 m、深さ 0.29 m
掘込面 削平 **検出面** III a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる。
埋土 自然堆積による。A層は2層に細別され、暗褐色土を主体に、粒～塊状の黒褐色土を含む。

R D 004 土坑（第6図）

時期 縄文時代 **平面形** 不整楕円形 **長軸の傾き** E 20° N
規模 長軸上端 1.02 m・下端 0.86 m、短軸上端 0.79 m・下端 0.59 m、深さ 0.18 m **掘込面** 削平
検出面 III a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる。
埋土 自然堆積による。A層は2層に細分され暗褐色土を主体に、黒褐色土、粒状の褐色土を含む。
出土遺物（第8図7） 7は剥片下端に調整を施した搔器である

R D 005 土坑（第6図）

時期 縄文時代 **重複関係** R D 0 0 6 土坑を切る **平面形** 不整楕円形
長軸の傾き W 19° N **規模** 長軸上端 0.92 m・下端 0.78 m、短軸上端 0.64 m・下端 0.49 m
深さ 0.09 m **掘込面** 削平 **検出面** III a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる。
埋土 自然堆積による。A層は2層に細分され黒褐色土を主体に、粒状の黄褐色土を含む。

R D 006 土坑（第6図）

時期 縄文時代 **重複関係** R D 0 0 5 土坑に切られる **平面形** 不整楕円形
長軸の傾き E 11° S **規模** 長軸上端 1.28 m・下端 1.07 m、短軸上端 0.81 m・下端 0.59 m、深さ 0.33 m
掘込面 削平 **検出面** III a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる。

埋土 自然堆積による。A・B層の2層に大別され、さらに、B層は3層に細分される。

A層－黒褐色土を主体に、粒～塊状の暗褐色土とスコリア粒が多量に含まれる。

B層－暗褐色土を主体に、塊状の暗褐色土、黄褐色土を含む。

R D 007 土坑（第6図）

時期 縄文時代早期 **平面形** 不整円形、南東隅にピット状の掘り込みがある。

規模 上端 1.39 m・下端 1.27 m、深さ 0.17 m **掘込面** III b層上面？ **検出面** IV a層上面

埋土 自然堆積による。A・B・C層の3層に大別され、さらに、C層は3層に細分される。A層は縄文時代早期の包含層であるIII a層の土が流入したものである。各層とも堅くしまるものである。

A層－暗褐色土を主体に、スコリア粒を含む。

B層－褐色土を主体に、塊状の暗褐色土を含む。

C層－堅くしまる黒褐色土と暗褐色土の混合土。

壁の状態 外傾して立ち上がる。

R D 008 土坑跡（第6図）

平面形 不整円形、中央部にピット状の掘り込みがある。 **規模** 上端 0.92 m・下端 0.76 m、深さ 0.45 m **掘込面** 削平 **検出面** IV a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる。

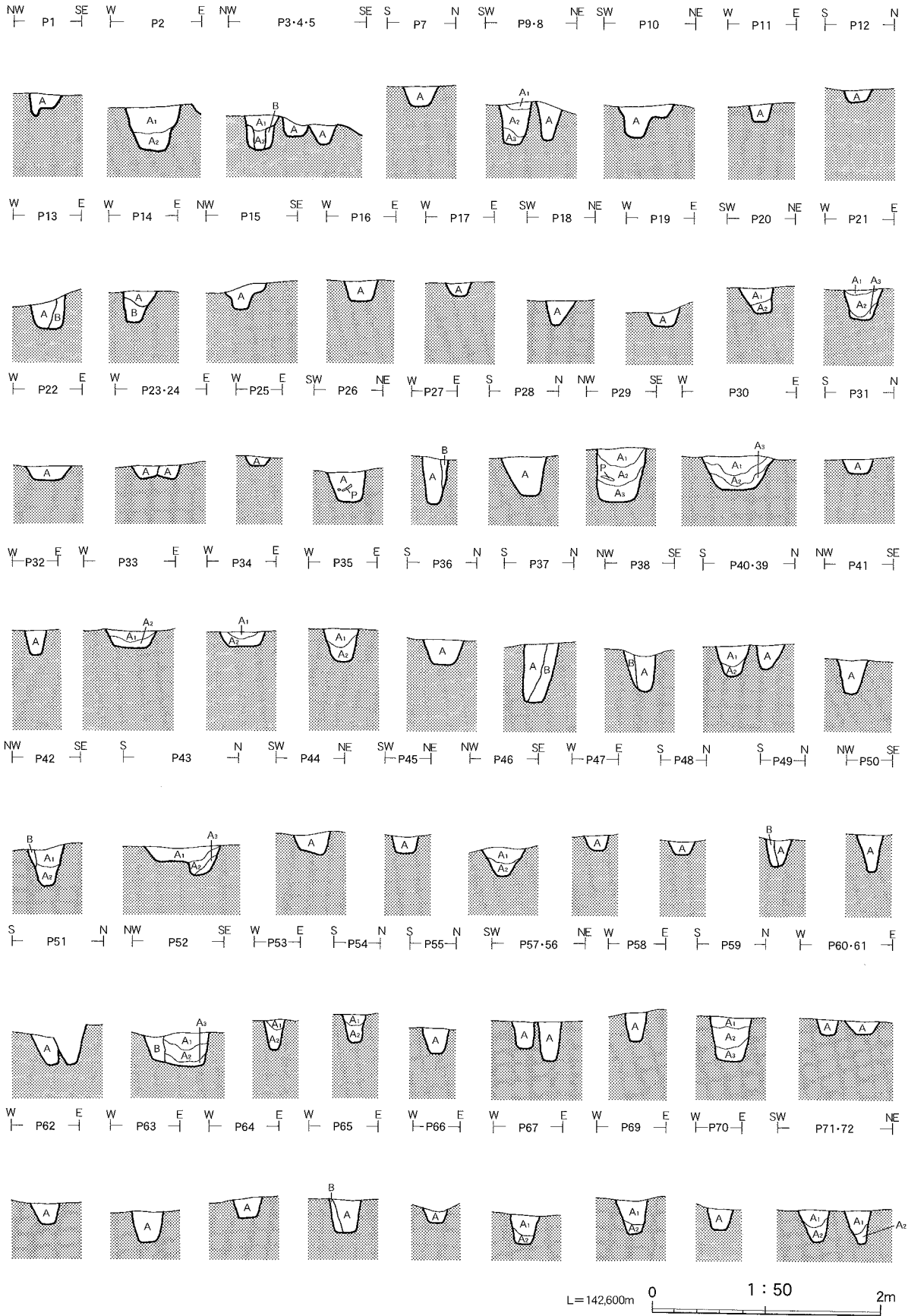
埋土 自然堆積による。A層は3層に細分され、黒褐色土を主体に、粒～塊状の暗褐色土とスコリア粒が多量に含まれる。

ピット群（第4・7図）

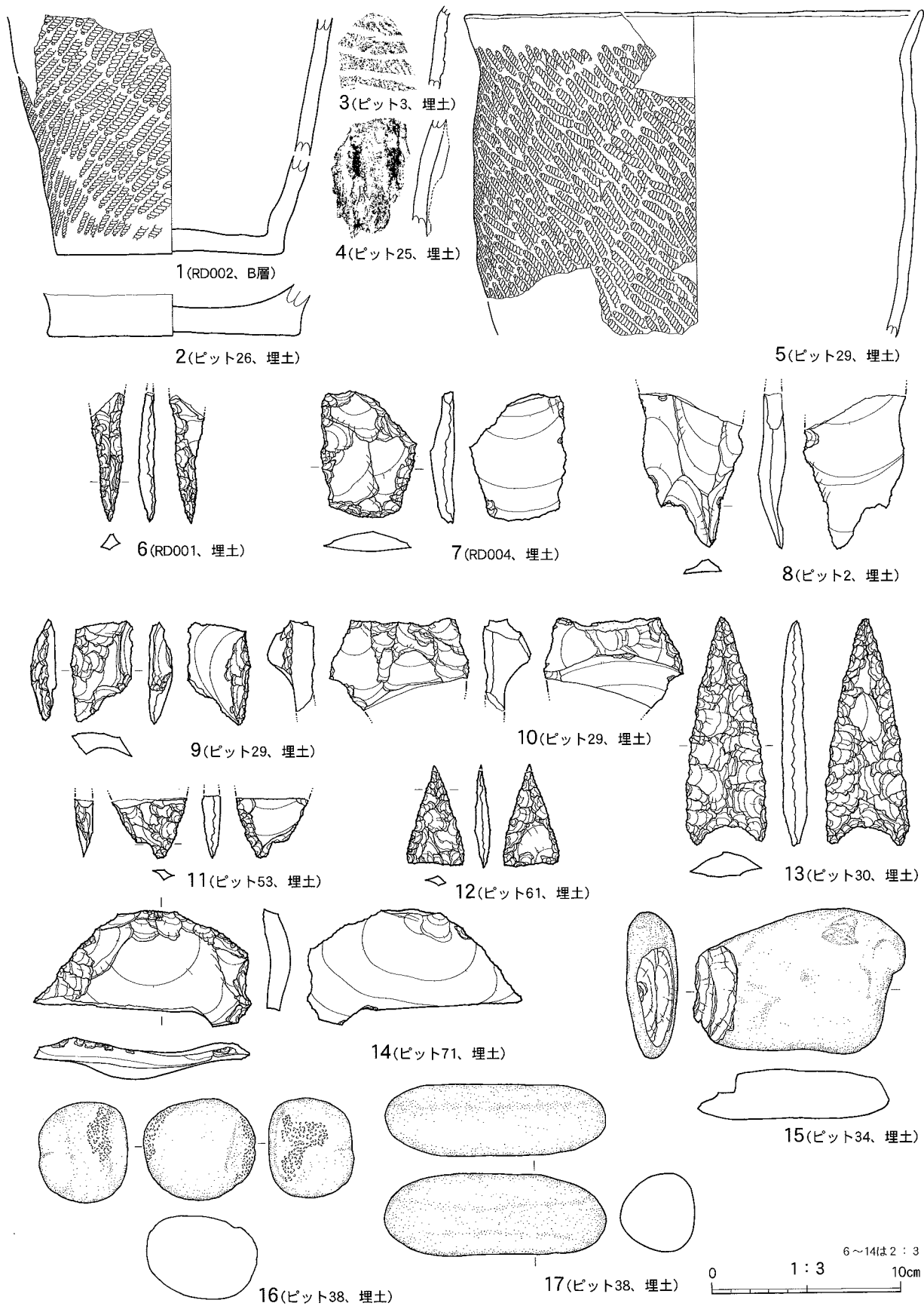
調査区のほぼ全域から72口のピット（P 1～72）が検出されている。埋土は黒褐色土が主体となるものが多い。柱痕跡が認められるピットは、P 3・13・27・37・38・42・49・52・65である。出土した遺物は全て縄文時代のものである。以下は、各ピットの深さである。

P 1－0.19 m・P 2－0.38 m・P 3－0.29 m・P 4－0.12 m・P 5－0.15 m・P 6－0.39 m・P 7－0.16 m
P 8－0.32 m・P 9－0.36 m・P 10－0.26 m・P 11－0.15 m・P 12－0.11 m・P 13－0.29 m・P 14－0.27 m
P 15－0.21 m・P 16－0.16 m・P 17－0.10 m・P 18－0.20 m・P 19－0.12 m・P 20－0.20 m・P 21－0.25 m
P 22－0.12 m・P 23－0.10 m・P 24－0.11 m・P 25－0.09 m・P 26－0.25 m・P 27－0.40 m・P 28－0.34 m
P 29－0.48 m・P 30－0.29 m・P 31－0.12 m・P 32－0.21 m・P 33－0.14 m・P 34－0.13 m・P 35－0.28 m
P 36－0.22 m・P 37－0.50 m・P 38－0.31 m・P 39－0.20 m・P 40－0.25 m・P 41－0.29 m・P 42－0.36 m
P 43－0.24 m・P 44－0.19 m・P 45－0.13 m・P 46－0.25 m・P 47－0.13 m・P 48－0.11 m・P 49－0.22 m
P 50－0.32 m・P 51－0.24 m・P 52－0.28 m・P 53－0.27 m・P 54－0.25 m・P 55－0.22 m・P 56－0.24 m
P 57－0.35 m・P 58－0.25 m・P 59－0.39 m・P 60－0.13 m・P 61－0.12 m・P 62－0.18 m・P 63－0.26 m
P 64－0.29 m・P 65－0.29 m・P 66－0.11 m・P 67－0.26 m・P 68－0.30 m・P 69－0.29 m・P 70－0.19 m
P 71－0.28 m・P 72－0.29 m

出土遺物 土器（第8図2～5） 2は、底面が張り出す深鉢底部である。3は、平行沈線が施される小形深鉢体部である。4は、口縁部付近の部位と考えられ、縦位の隆線が2条施される。5は口縁が外反する深鉢で、口縁は無文、体部には0段多条RLが斜位に施される。



第7図 柱穴及びピット土層断面



第8図 RD001・002・004土坑、ピット出土遺物

石器（第8図8～17） 8は、剥片端部を微細な剥離によって尖端部をつくりだすもので、9は剥片の縁に剥離を施したものであるが、使用による微細剥離痕が見られないことから加工途中の未製品と考えられる。10は、腹面左側縁に微細な剥離調整を施した削器である。11～13は石鏃である。11は木葉形を呈し、12は先端部が細く尖る三角鏃である。13は基部に浅い挟りのある石鏃である。14は打瘤を除去し、背面左右2側縁に調整剥離を施す削器である。15は扁平な円礫の片端が打欠き、16は敲打痕のある球形の礫。17は、全面に浅い敲打痕が見られる。

(3) 縄文時代の遺物包含層と遺物

地形 第1次調査区は北東から南西にかけて緩やかに傾斜する。地山面となる黄褐色土層（分火山灰層下部）以下は、調査区付近の露頭観察によって大きく3層に大別されることが明らかである。

最下部に蛇文岩・凝灰岩・珪岩の角礫を多量に含む角礫層が見られ、角礫層上位に火山灰層が乗る。

火山灰層 火山灰層は下位より、渋民火山灰層、分火山灰層に分けられる。渋民火山灰層下部には生出黒色帯が薄く見られ、渋民火山灰層最上部には八戸火山灰が薄く堆積する。八戸火山灰の直上には分火山灰層下位の小岩井浮石が堆積する。

第1次調査では、小岩井浮石層上部に堆積する、堅くしまるローム質黄褐色土層上部（IV層）まで検出作業を行った。

層位

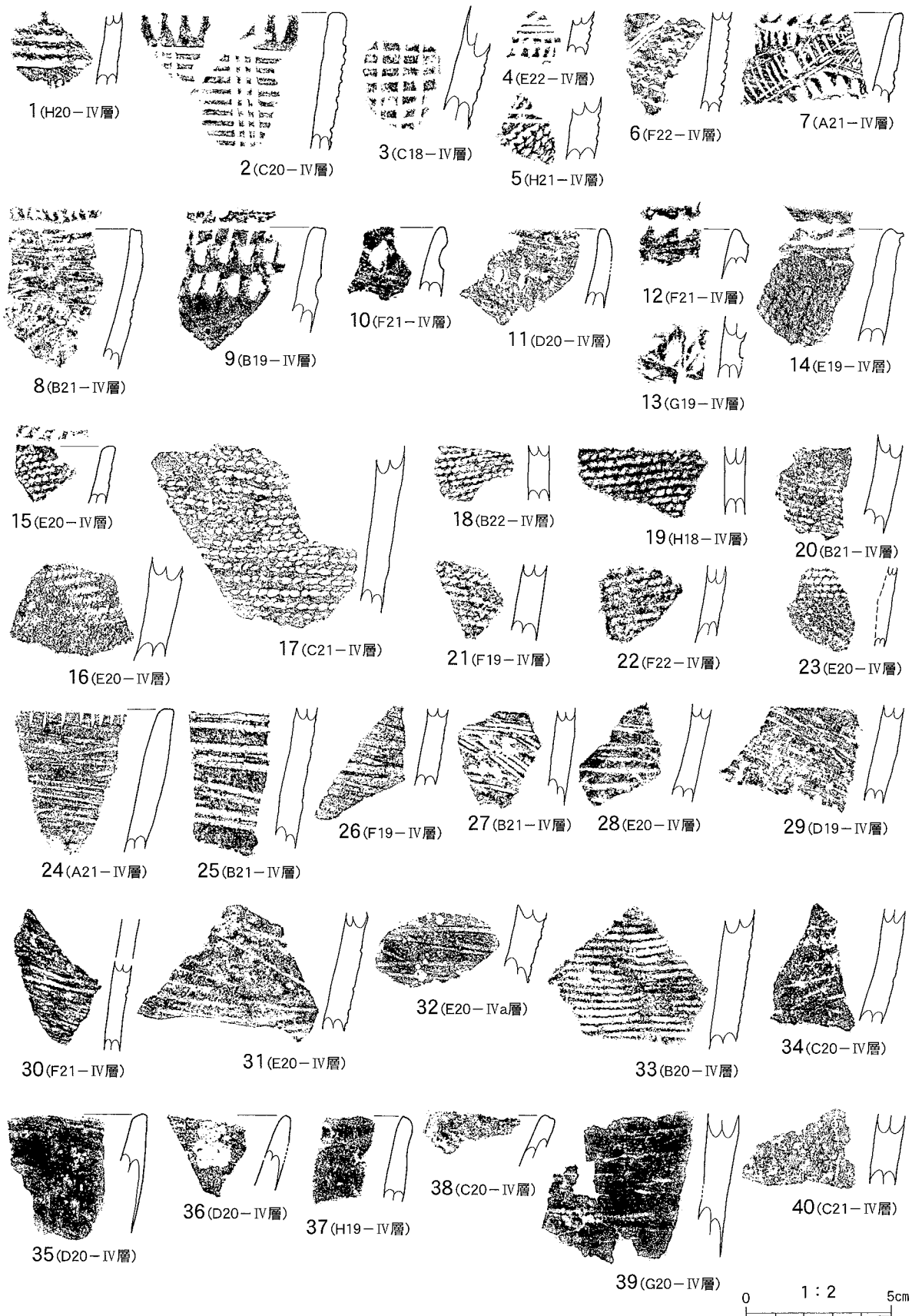
- I a・b層 コンクリート片などを含む近～現代の攪乱、旧耕作土層
- II a層 黒褐色土を主体とする土層。スコリア粒を少量含み、ややしまりのある層であるが調査区中央部付近で僅かに見られるのみであった。
- II b層 黒褐色土を主体とする土層。スコリア粒を多量に含み、ややしまりのある層である。
- III a層 暗褐色土を主体に、塊状の黒褐色土を含む。スコリア粒を多量に含む層である。
- III b層 RE 001 堅穴状遺構など早期の遺構内に堆積する層で、暗褐色土を主体に、スコリア粒を多量に含む層。堅くしまる。
- IV a～d層 褐色土と暗褐色土の混合土層。スコリア粒を多量に含み、堅くしまる層。IV b層より以下は次第に褐色が強くなり、非常に堅くしまる。

出土状況 III層より上位は削平・攪乱が激しく、I・II層より若干の遺物が出土したのみであった。III a層を主体にIV a層にかけて縄文時代早期の遺物が多量に包含される。

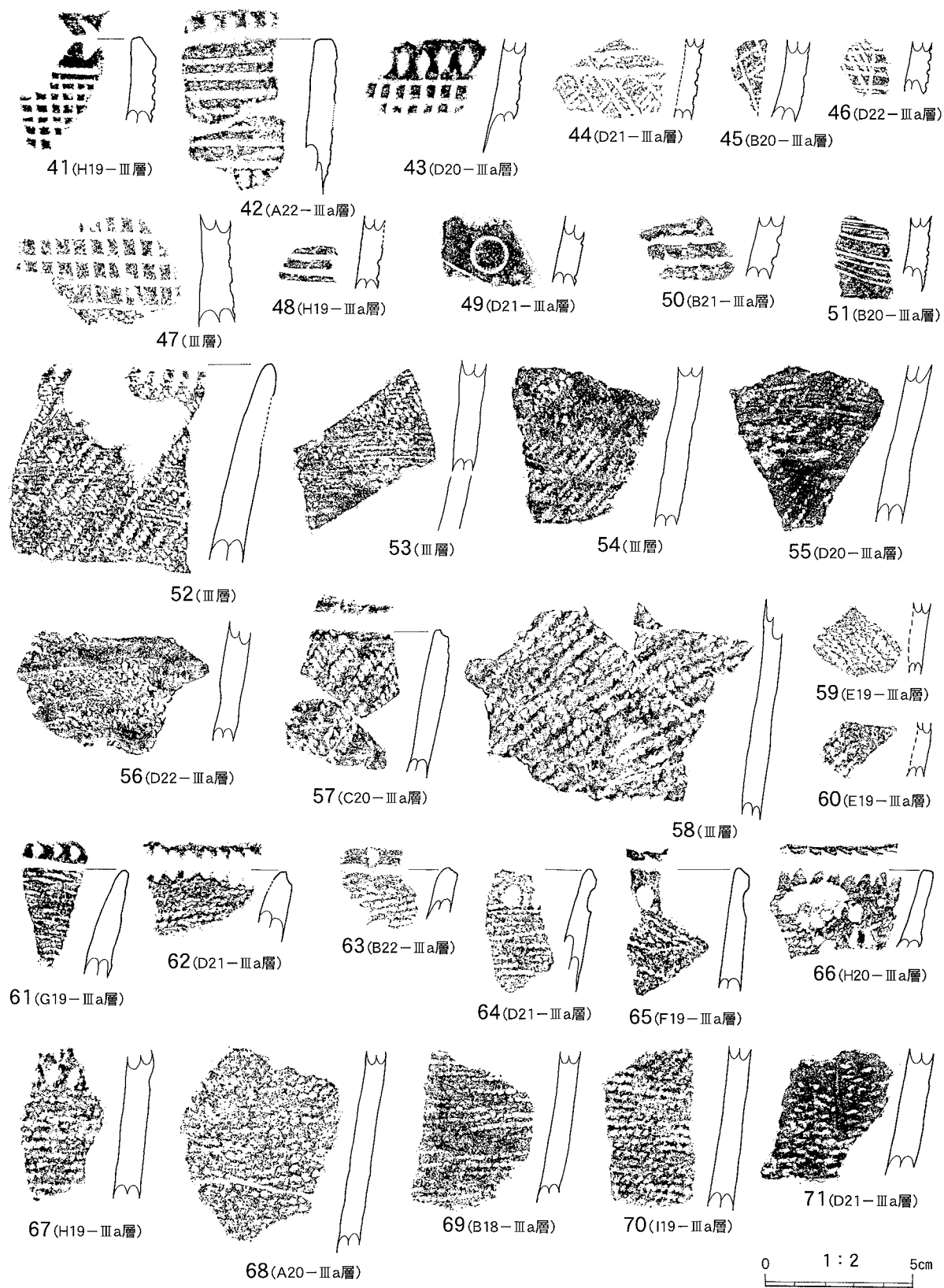
III a・IV a層より出土した土器は破片であることが多く、同一個体の土器片が集中することはなかった。石器についても器種・同一母岩による集中地点は確認されなかった。

土器（第9～16図） IV層 1は破片上部に平行線状、下部にV字状押型文が施される土器である。胎土には微量の繊維・雲母が含まれる。日計式押型文に近似するものであろう。

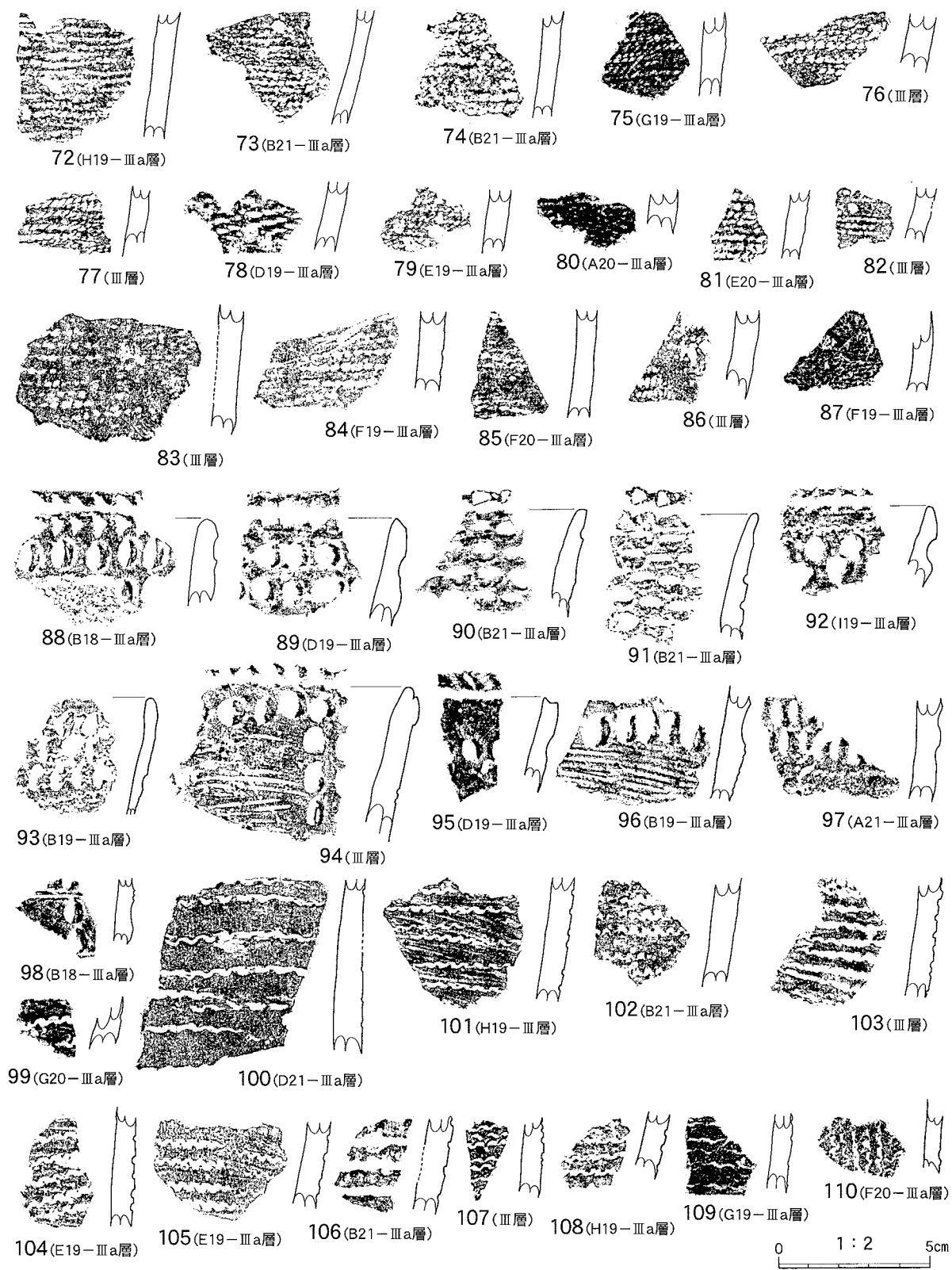
2は口唇部に刻目が施され、口唇下に沈線による平行線を横・縦位に施し、幾何学状の文様を描いたものである。3・4は沈線による格子目文が施され、4には沈線による平行線が横位に3条施される。5は沈線による幾何学文と貝殻腹縁文が、6には斜位の平行沈線と貝殻腹縁文が施される。7は平行沈線による帯状幾何学文が施され、主文様となる幾何学文内には短い平行沈線を、外には爪形状刺突を充填させて施す。8は口唇部下に横位の平行沈線を数条施し、平行沈線



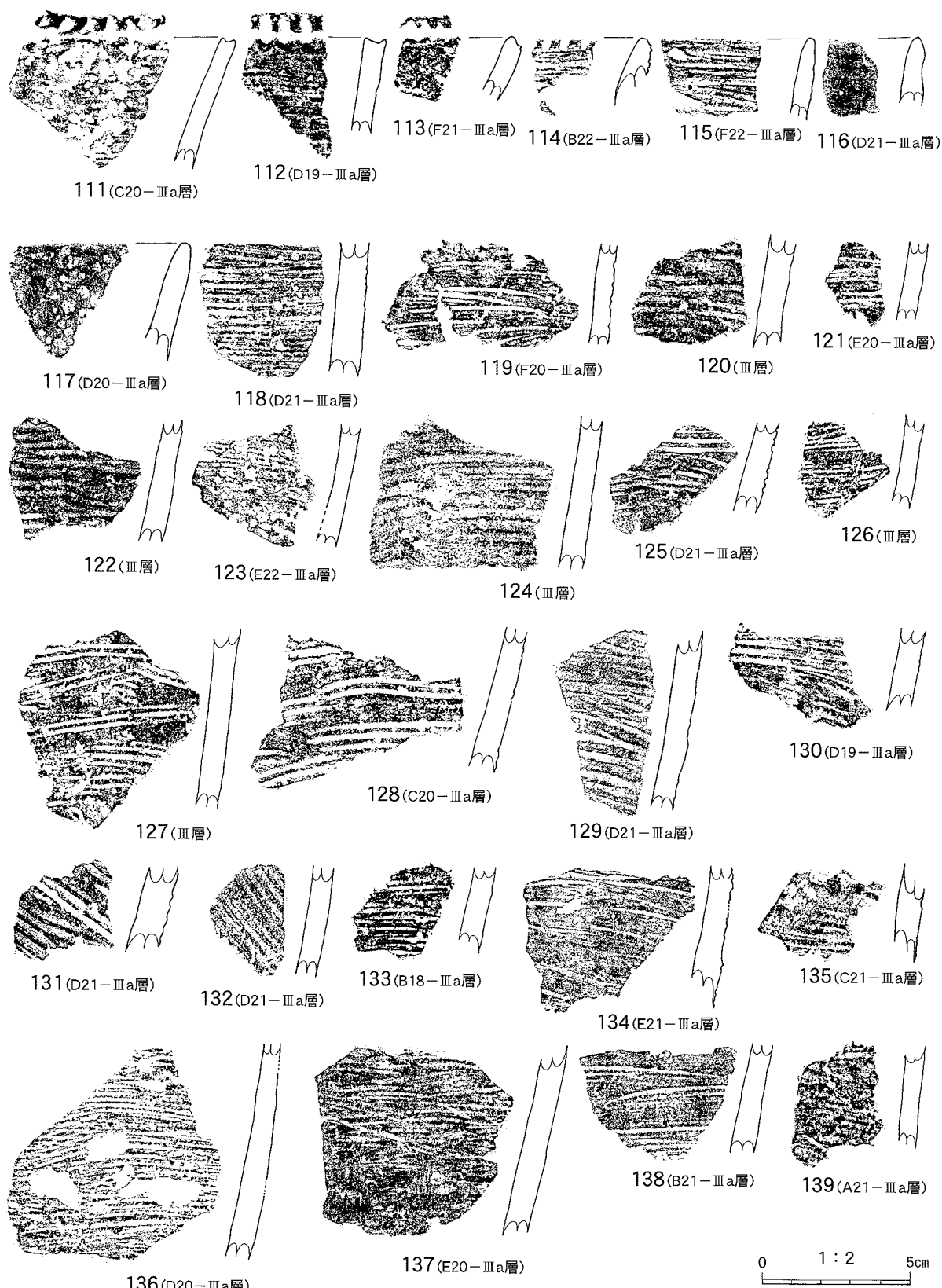
第9図 遺物包含層 (IV層) 出土土器 (1)



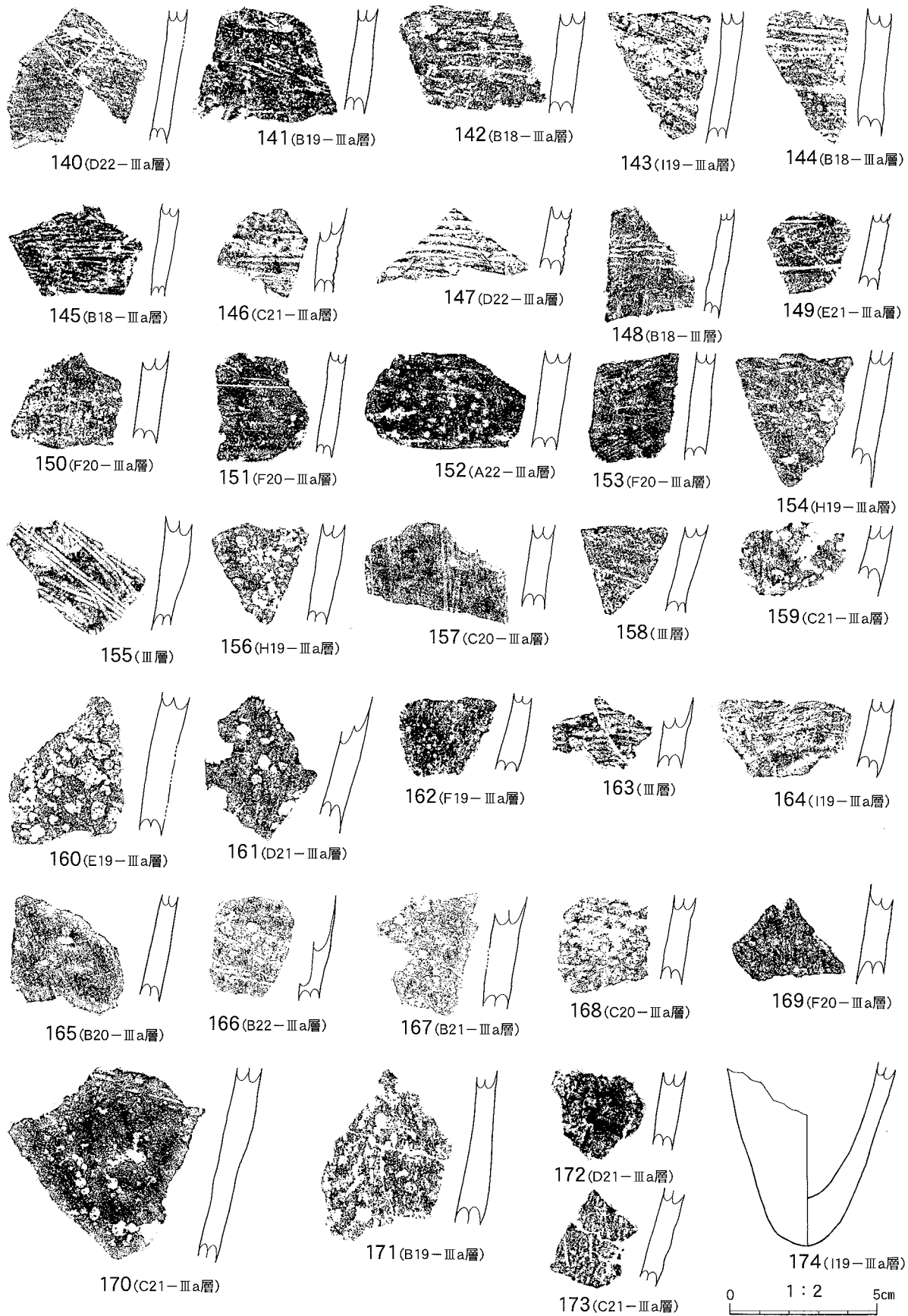
第10図 遺物包含層(III層)出土土器(2)



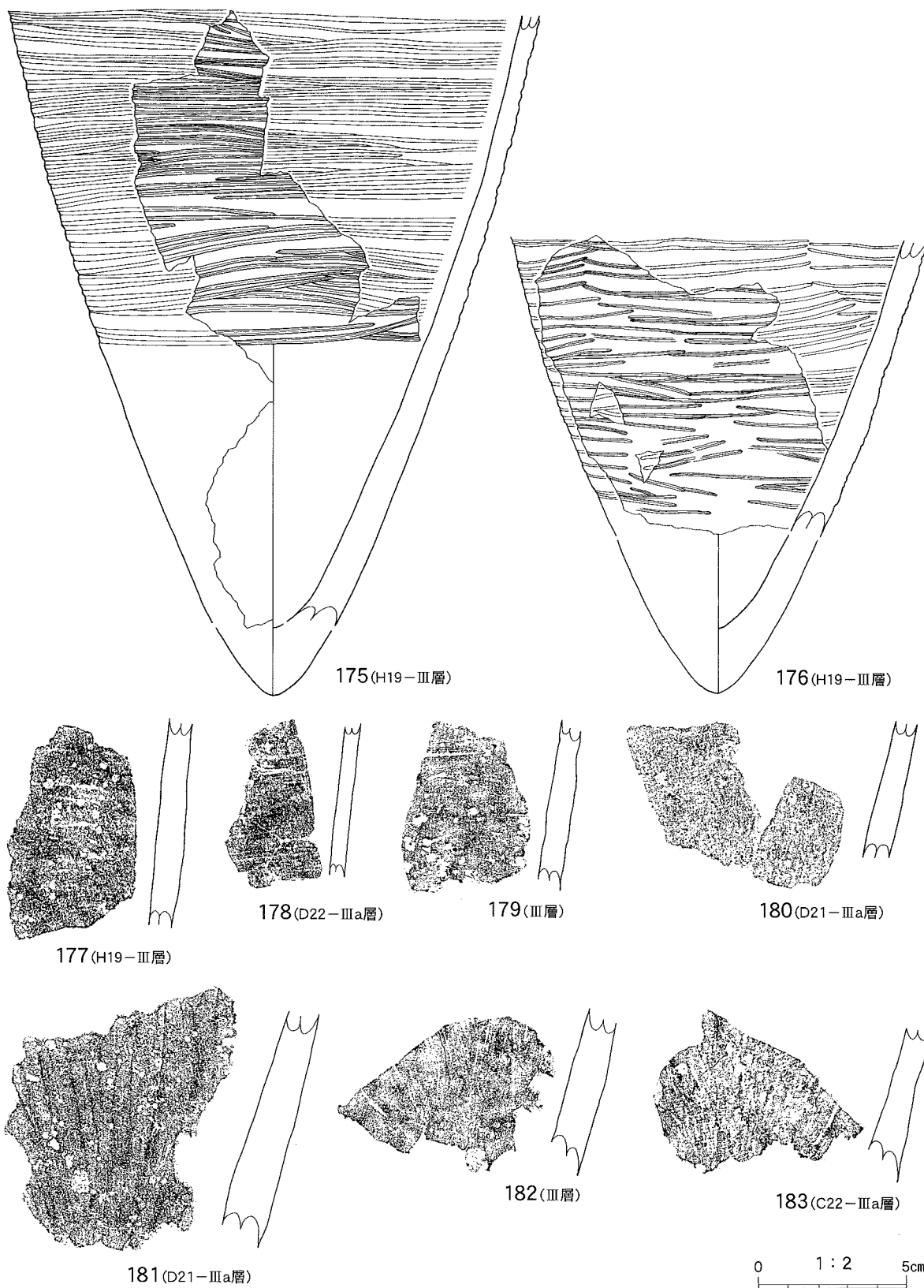
第11図 遺物包含層 (III層) 出土土器 (3)



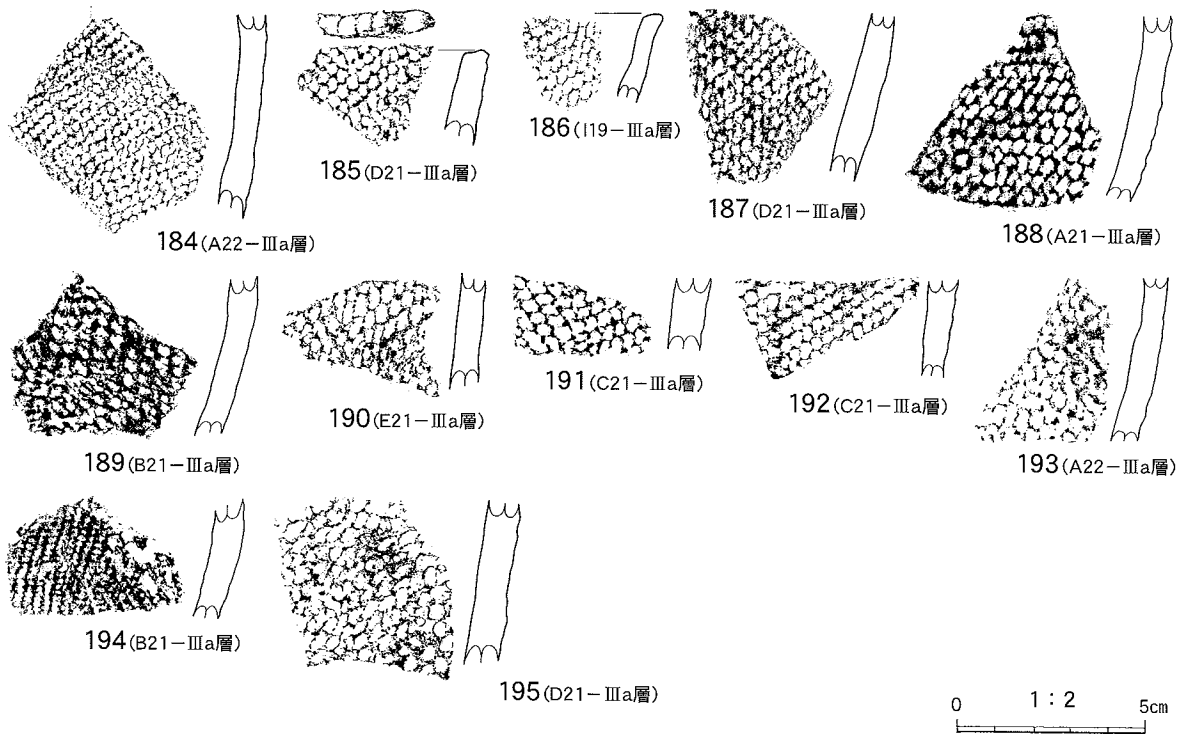
第12図 遺物包含層 (III層) 出土土器 (4)



第13図 遺物包含層(III層)出土土器(5)



第14図 遺物包含層 (III層) 出土土器 (6)



第15図 遺物包含層（Ⅲ層）出土土器（7）

下に爪形状刺突を縦位に横列施文する。

9～13は口唇部下に爪形状刺突を縦位に横列施文するものである。14は縄文LRが横位に浅く回転施文される。15～23はL・R縄による単軸絡条体を横位に回転施文するもので、条は平行して横走する。24～34は横位の条痕が施されるもので、24・25のように条に間隔を空けるものもある。

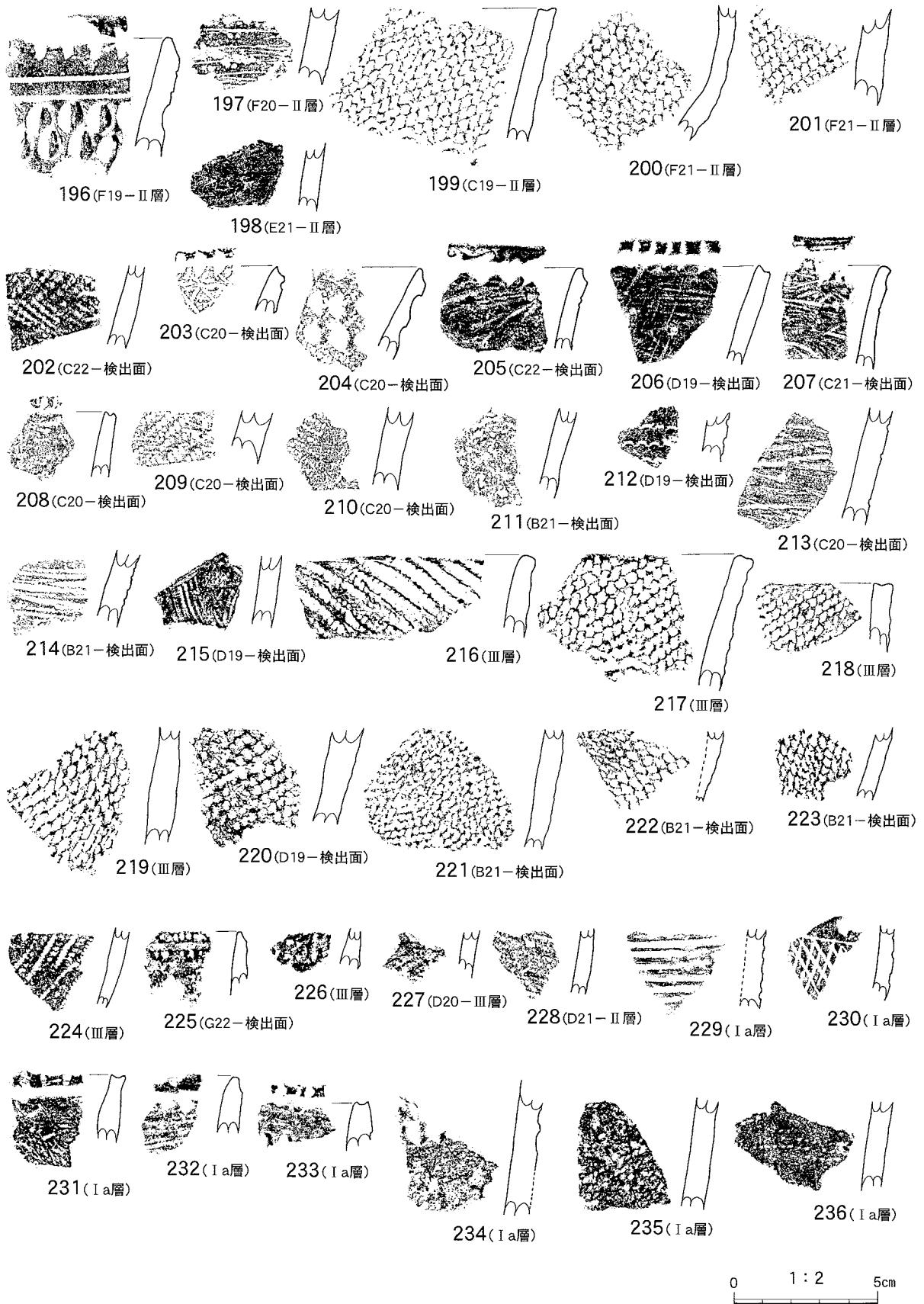
35～38は無文の口縁部で、縦位の擦痕がみられる。39・40は深鉢底部付近の無文帯と考えられ、丁寧なミガキ調整が施される。

Ⅲ層

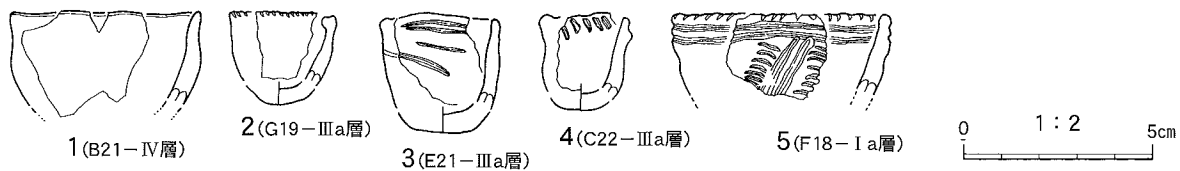
41は口唇に刻目が施される深鉢口縁部で、口唇下には沈線による格子目文が描かれる。42は口唇下に平行沈線を横走させ、沈線下に爪形状刺突を施すものである。43は沈線による格子目文と爪形状刺突が施される。44・45は同一個体の土器破片である。破片上部には横位の平行沈線が施され、横位平行沈線下には格子目文が描かれる。46は沈線による幾何学文が、47には格子目文が描かれる。48・50は深鉢底部付近の部位と考えられ、横位の平行沈線が施される。49は竹管文、斜位の平行沈線が施される。51は斜位の平行沈線を施すものである。

52～56は同一個体の土器片で、口唇部には刻目が施され、口唇下には縄文LRが横位に回転施文される。57は口唇部に刻目が施され、口唇下には縄文LRが横位に回転施文される。58～60は体部片で、58・60には縄文LRが、59には縄文RLが横位に回転施文される。

61～87はL・R縄による単軸絡条体を横位に回転施文するもので、63～67は爪形状刺突が施されるものである。縄文・撚糸文主体の土器には石英粒・微量の繊維が含まれ、器面をミガキ調整するものが少なく、ミガキ調整が顕著に見られる条痕主体の土器との差異が注意される。



第16図 遺物包含層（Ⅲ～Ia層）出土土器（8）



第17図 遺物包含層 (IV～I a層) 出土土製品

88～98は爪形状刺突が施されるものである。88～95は口唇部に刻目を持つ口縁部で、94・98のように、刺突による幾何学文を描く土器もある。99～110は貝殻腹縁文が施される深鉢体部片である。110以外は横位に文様が施され、103のように貝殻を器面に押圧したまま横位に押し引きするものもある。111～164は条痕が施される土器である。111～117は口縁部で、117はさらに縦位方向のミガキにより条痕が擦り消される。165～183は尖底部・尖底部付近の部位と考えられるものである。168は短軸絡条体による文様が縦位方向のミガキにより擦り消されるものである。174は尖底部で、縦位のケズリ状の調整痕が見られる。

175・176はキャンパスとなる器面に縦位方向のミガキを施した後、横位の条痕を多段に施文したものである。底部付近には縦位のケズリ状の調整痕が見られる。177～183は尖底部付近の部位である。184～195は胎土に繊維を多量に含む縄文土器で、185・186は口縁部である。

184～195は所謂「びっちり縄文」を含み、口唇部を平坦に整形して刻目を施すなどの特徴から、沿岸部、岩手県北部を中心に分布する千鶏Ⅱ式に類似する土器と考えられよう。

Ⅳ・Ⅲ層より出土した遺物の多くは、沈線文・爪形状刺突文・貝殻文・縄文・燃糸文を施文する土器群であった。日計式押型文、前期初頭の繊維土器が若干量出土しているが、主体となる時期は早期前葉～中葉にかけての沈線・貝殻文を特色とする時期と考えて良いものと思われる。

Ⅳ・Ⅲ層より出土した沈線・貝殻文土器は、所謂「蛇王洞Ⅱ式」、「白浜・小舟渡平式」など沈線・貝殻文土器群でも古段階に属するものであった。上記3型式の編年的位置については、現在においても結論が出ていないのが現状である。

将来的に、沈線文・縄文・燃糸文が主体となる土器群と、刺突文・貝殻文・条痕文を主体とする2つの土器群の文様組成・変遷過程を調べるのが課題となるであろう

Ⅱ層 196は口唇部に刻目を持つ深鉢口縁部で、口唇下には2条の横位平行沈線と爪形状刺突がほどこされる。197・198は横位の条痕が施される深鉢体部片である。199～201は胎土に多量の繊維を含む縄文土器で、199は口縁部、200は底部付近、201は体部片である。

I a層・不明 202はLR・RL縄文を交互多段に回転施文するもので、胎土には微量の繊維・石英粒が含まれる。203は口縁部に刻目を持ち、沈線による格子目文が施される土器である。204は口唇部に刻目を持ち、口縁部に爪形状刺突を横位多段に施す。205～207は口唇部に刻目を持ち、器面に条痕が施される土器である。208は口唇に刻目が施され、器面には浅く縄文が回転施文される。209はLR縄文が横位に回転施文されるものである。210・211は浅く縄文が施された深鉢体部片である。

212は貝殻腹縁文が横位に施されたものである。213は貝殻の側縁部を器面に押圧し、横位に押し引きしたものである。214・215は条痕が施される深鉢体部片である。216～223は胎土に多量の繊維を含む縄文土器である。216～218は口縁部、219～223は体部片である。

224 は附加条縄文が施される土器で、弥生時代終末期の赤穴式土器と考えられる。225 ～ 227 は北海道系の土器である後北C₂式土器である。225 は口縁部で口唇部に刻目が施され、口唇下には刻目が施される隆線が横位に施される。226 は帯縄文・円形刺突が施文されるものである。227 は摩耗が著しいが帯縄文が施されたものである。

228 ・ 229 は条痕が施される深鉢体部片である。230 は爪形状刺突と沈線による格子目文が施される土器である。231 ～ 233 は口唇部に刻目を持つ深鉢口縁部で、233 の口唇下には横位の爪形状刺突列が施文される。234 は横位の爪形状刺突列が施文される土器である。235 ・ 236 は単軸絡条体を横位に回転施文するものである。

土製品 (第 17 図 1 ～ 5) 1 ～ 5 は縄文時代早期前葉～中葉にかけてのミニチュア土器である。1 は口縁がやや外反する無文土器で、器面内外には整形段階の指頭圧痕が残る。2 は口唇部に刻目が施される無文土器で器形は緩やかな砲弾状を呈す。3 は口縁が外反し、底部が丸底状を呈す土器である。4 は口縁が外反し、口唇下には細かい爪形状刺突による横位の刺突列が 1 条施される。5 は口縁が緩やかに外反し、口唇部に刻目が施される土器である。口唇下には 2 条の横位平行沈線が施され、体部には 4 条 1 組の帯状平行沈線による幾何学文が描かれ、文様に沿うように爪形状刺突が施される。

石器 (第 18 図 1 ～ 第 24 図 83) 屠牛場遺跡第 1 次発掘調査において、遺物包含層より出土した石器 (剥片も含む) 総数は 449 点を数える。449 点中、2 次加工・使用を示す痕跡が認められた剥片石器は 67 点、礫石器 16 点の計 83 点である。これら 83 点の石器については全て図示した。

石鏃 各層より出土し、数量的には製品全体の 22.8 % を占める。IV 層出土の石鏃は、先端部が突出する形態の石鏃があり、III 層の凹基鏃とやや趣が異なる。凹基・有柄の 2 種類が認められるが有柄石鏃については定形的 (第 19 図 29) ではなく、未完成品と見ることもできる。

石匙 上方に柄をもち縦長の側縁に刃部をもつ石匙が III 層より 1 点出土している (第 19 図 31)。

削器 鋭角の刃部調整を施すもので、調整剥離が両面と片面のものにわかれる。両面調整は全体を形調整するもの、同一側縁を両面から調整するもの、両面調整が異なる側縁に施されるものに、片面調整は背面または腹面に調整剥離が施されるものに分類される。刃部は直線的な直刃、弧を描く凸刃と凹刃、不整で小さな凹凸の激しい鋸歯刃とがあり、複数の側縁に刃部をもつものは主体的な刃部で分類した。

両面・片面調整石器 ある一定の形態を有しないものを一括した。腹面の主要剥離面の残存によって分類され、全周調整されるもの、部分調整されるもの、小剥離調整されるものに分けられる。これらの石器は用途、形状がはっきりせず剥離調整のみが顕著なものを一括したものである。

石斧 小形の磨製石斧 (第 22 図 68)、打製石斧 (第 23 図 70) がある。

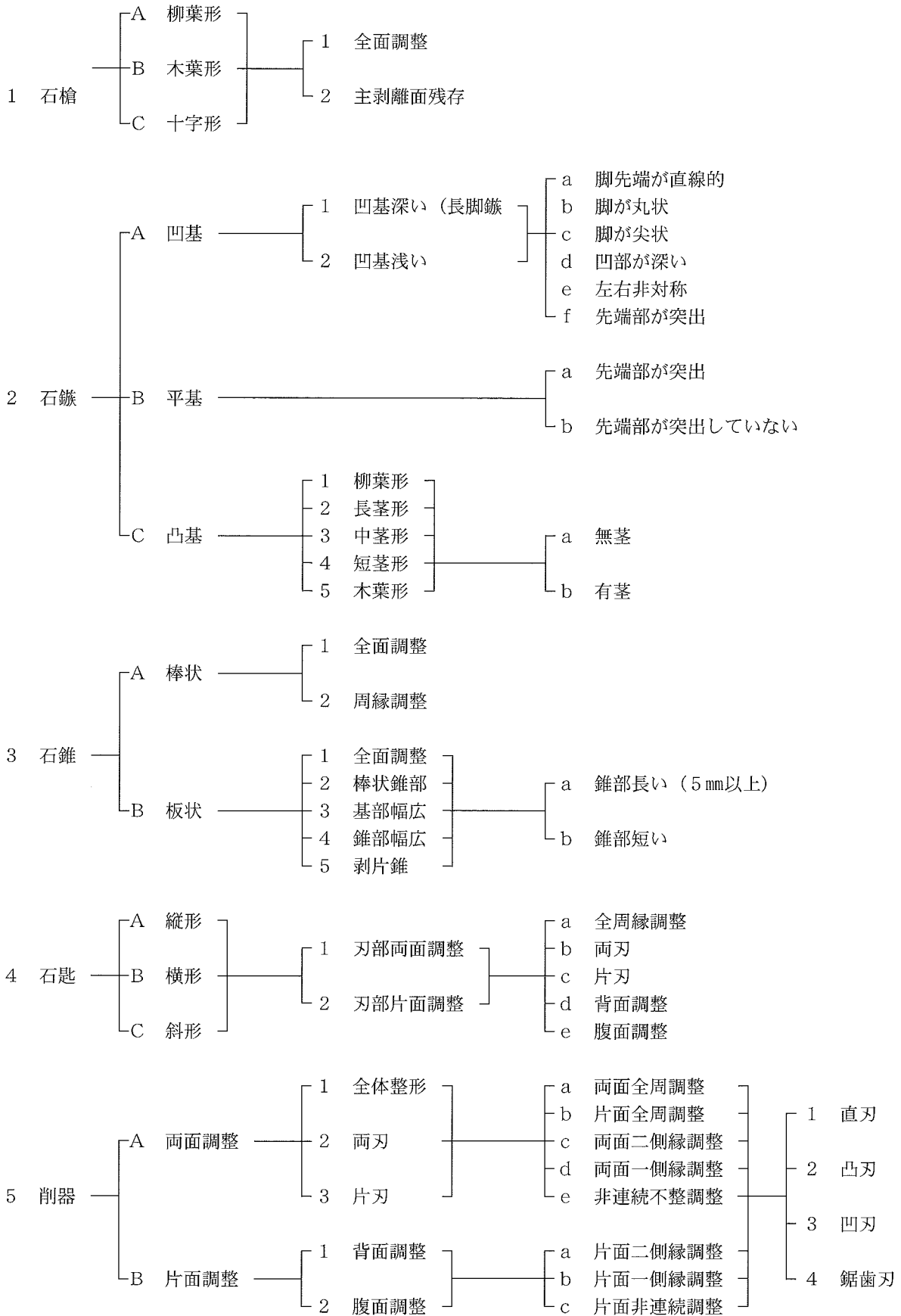
敲打磨石 断面が形状が三角形を呈すものが出土している (第 23 図 69・72)。

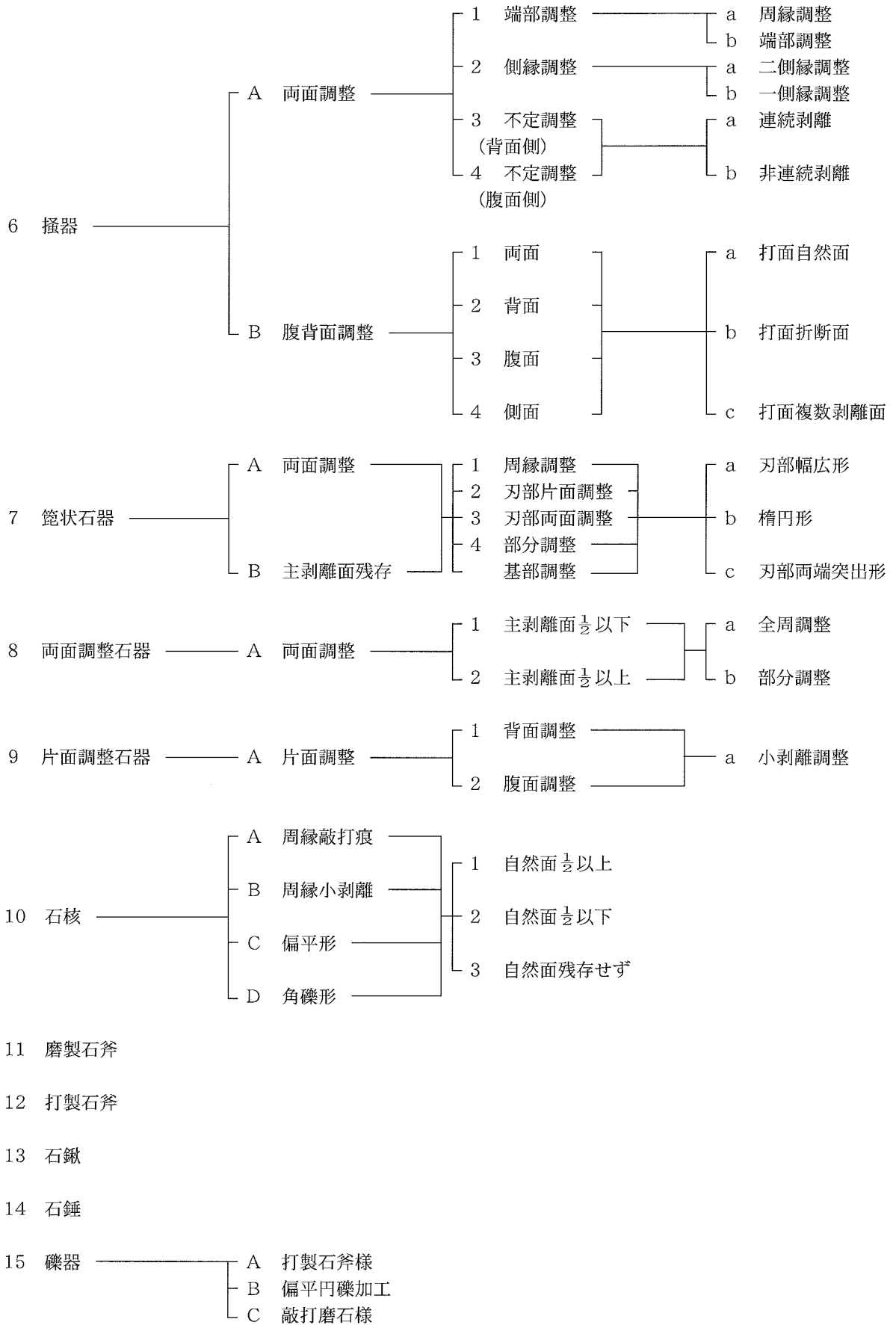
磨石類 磨石・敲石・凹石・台石は同じ石材を用いることが多く、複合してその使用痕を残すものが多い。

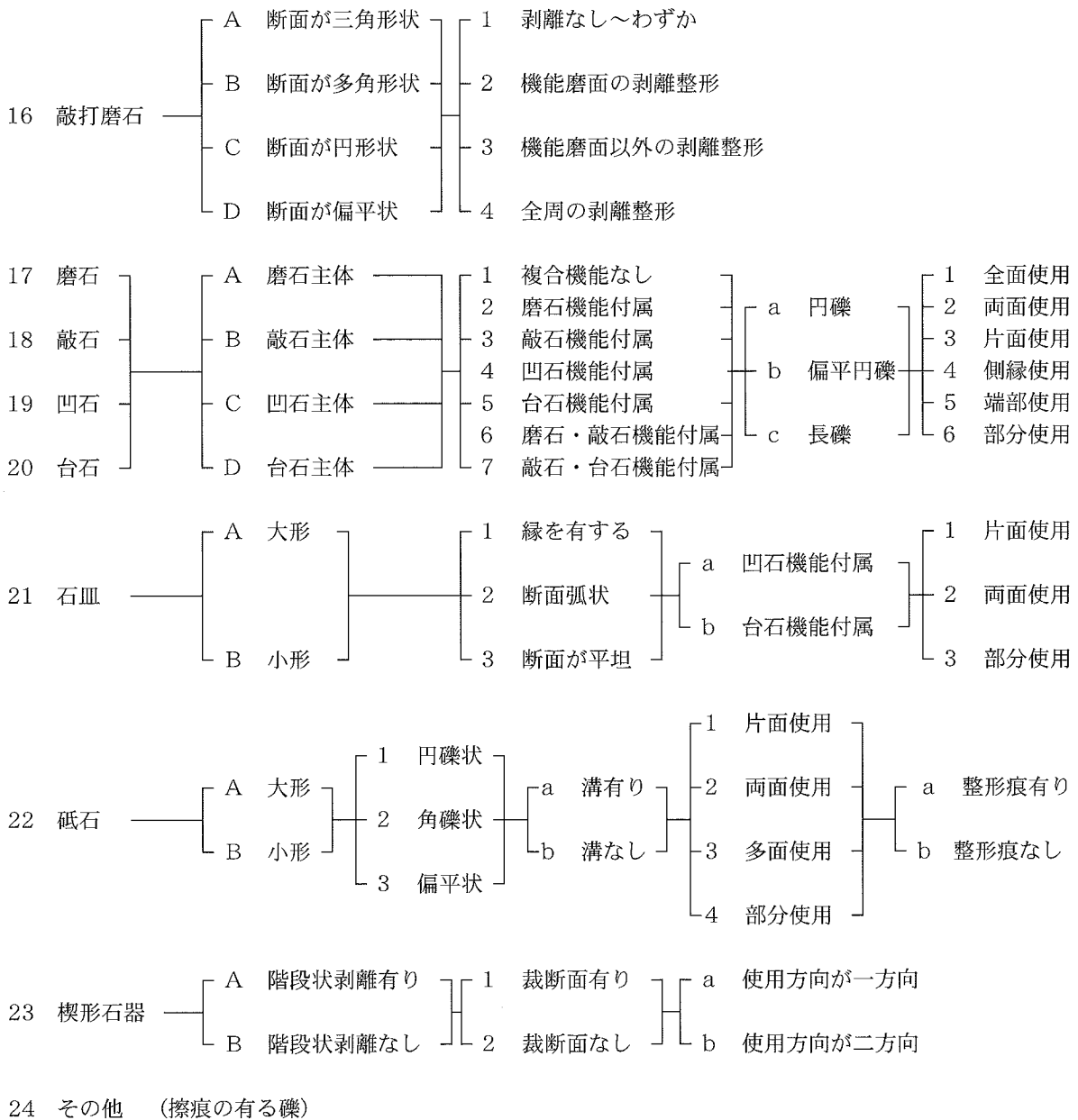
石皿 石皿は大形と小形のものに大別される。その多くは大形の石皿を分割して使用したものが多く、完形のは少ない。

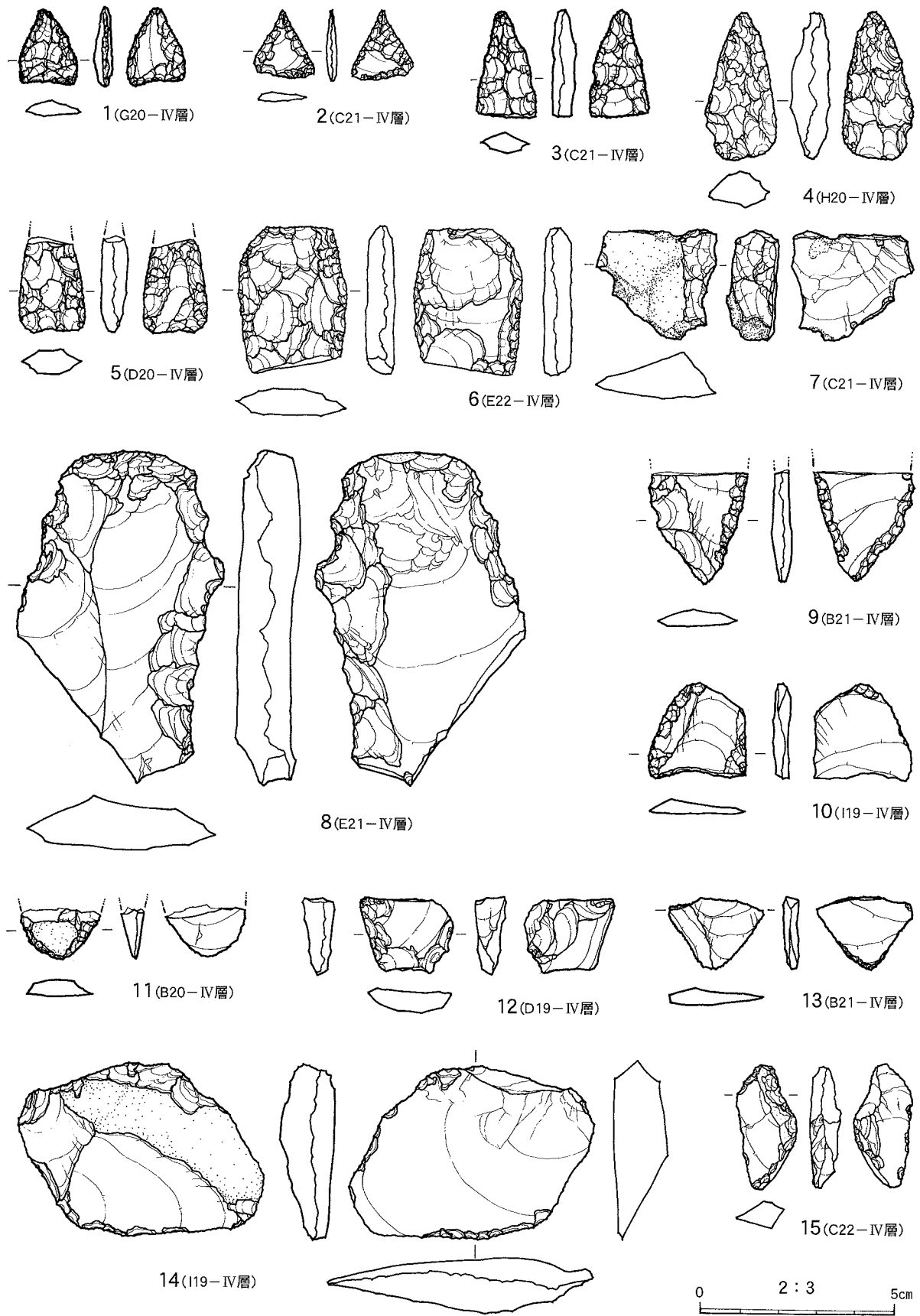
その他 用途の不明なものが含まれる。小円礫に溝を有するもの、擦痕のあるものを一括している。

◎石器の形状分類について

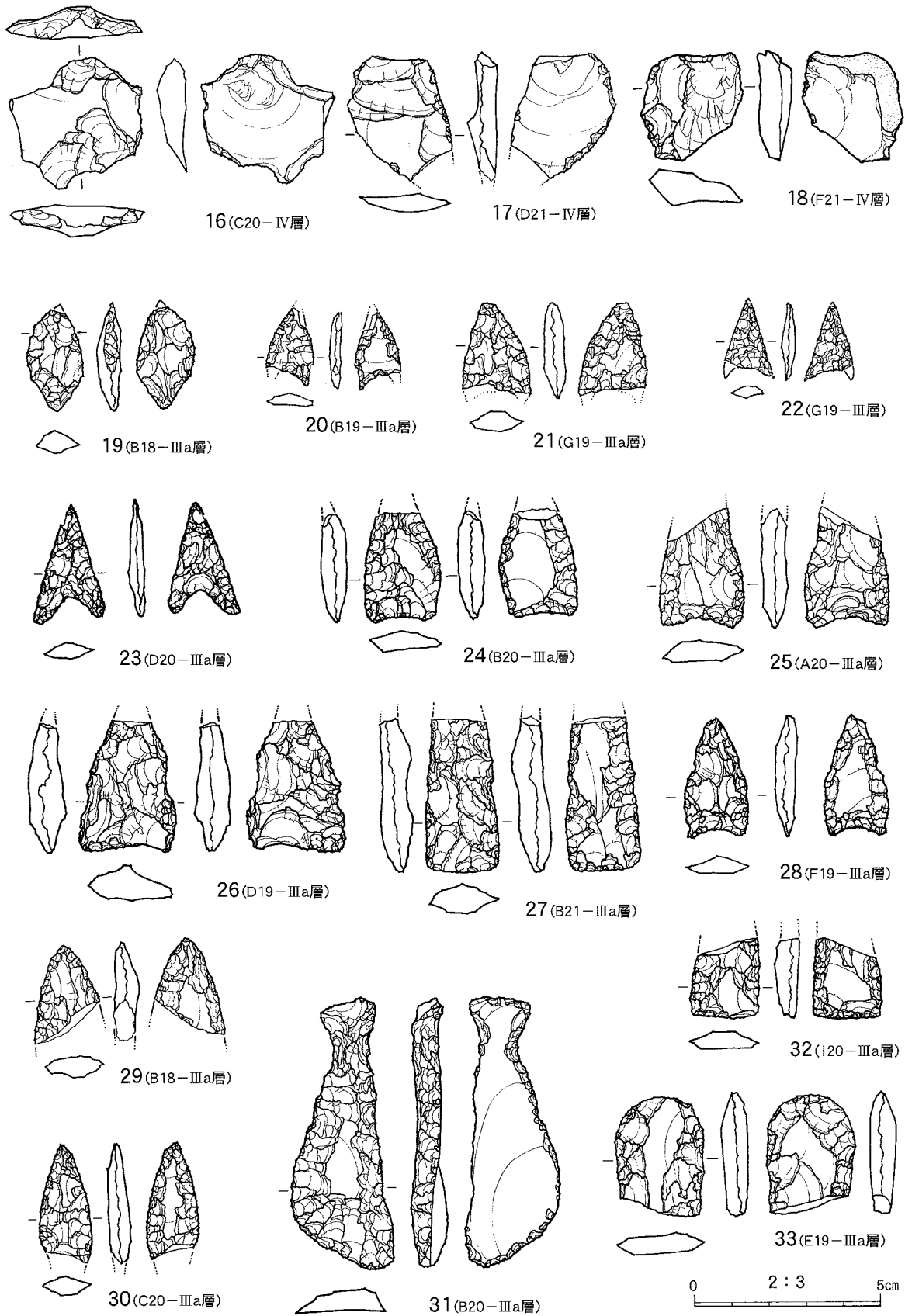




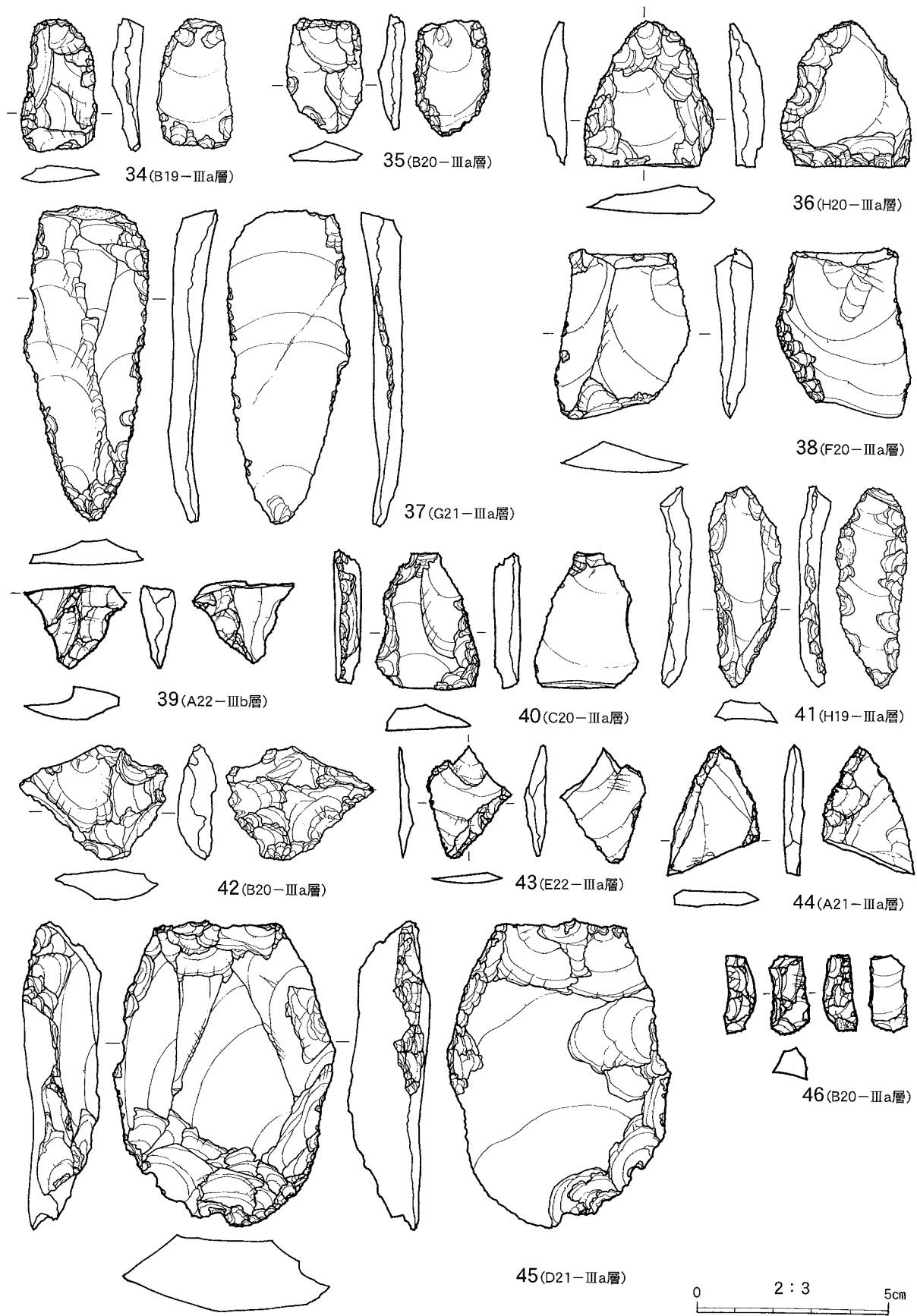




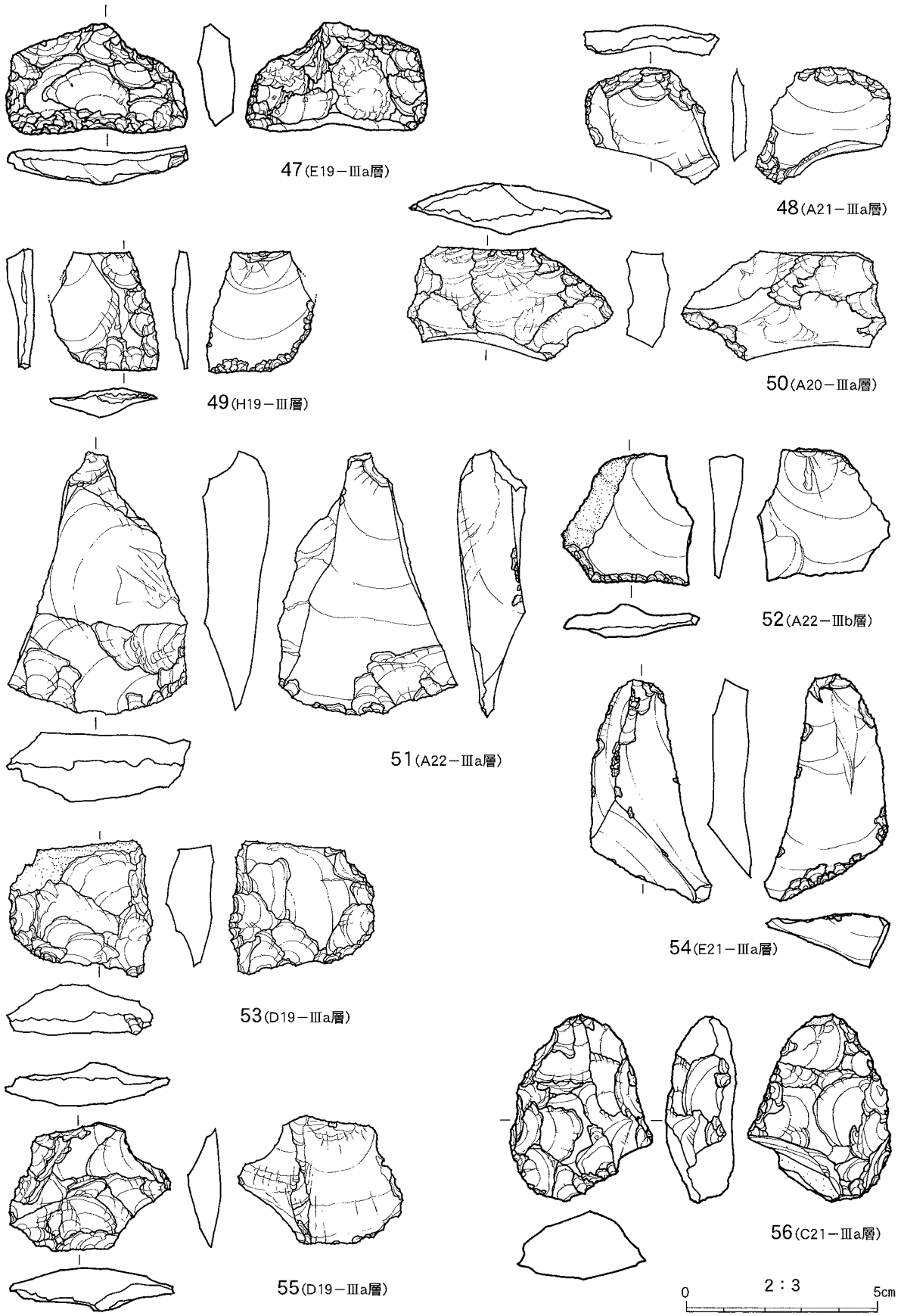
第18図 遺物包含層 (IV層) 出土石器 (1)



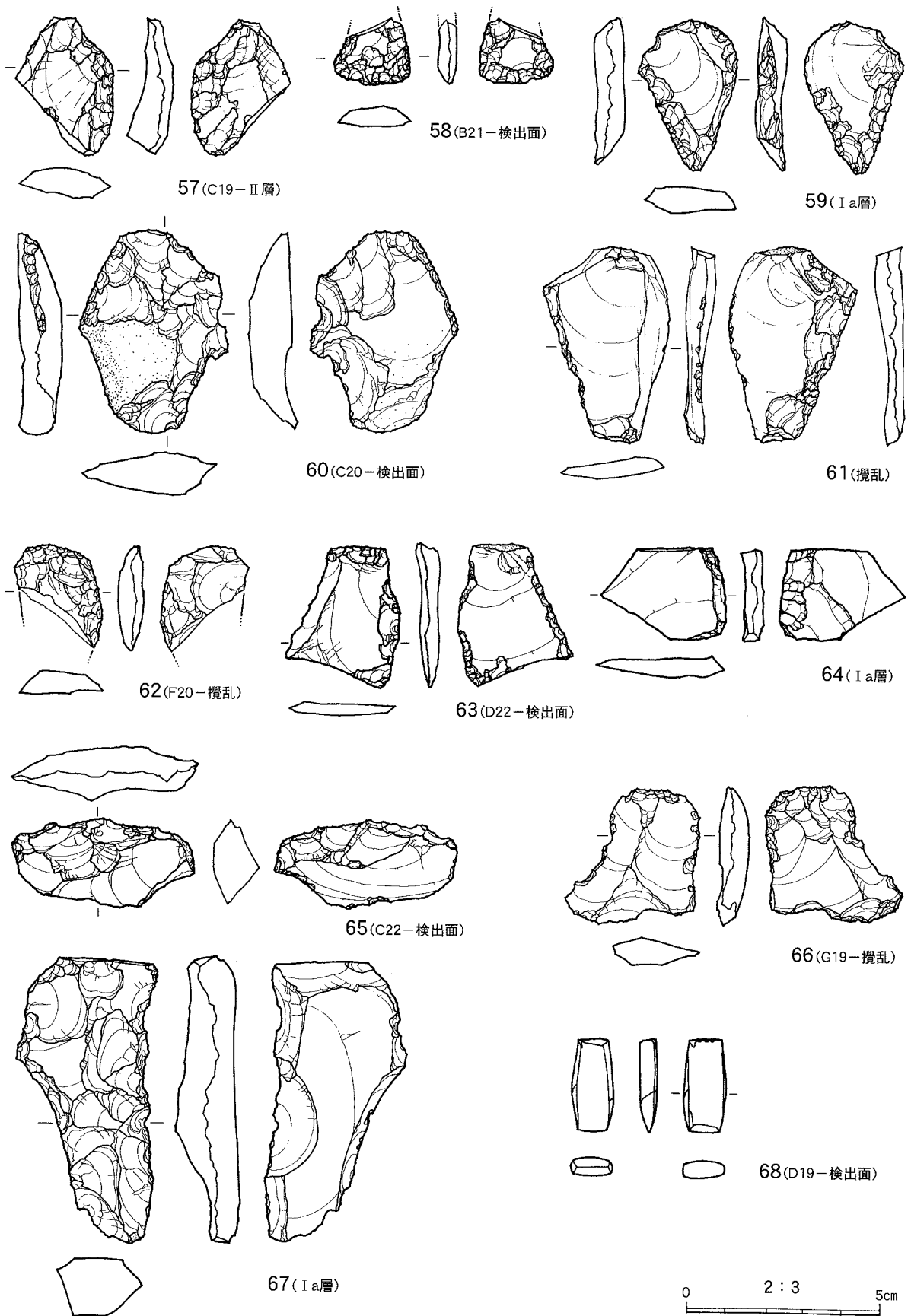
第19図 遺物包含層 (IV~III層) 出土石器 (2)



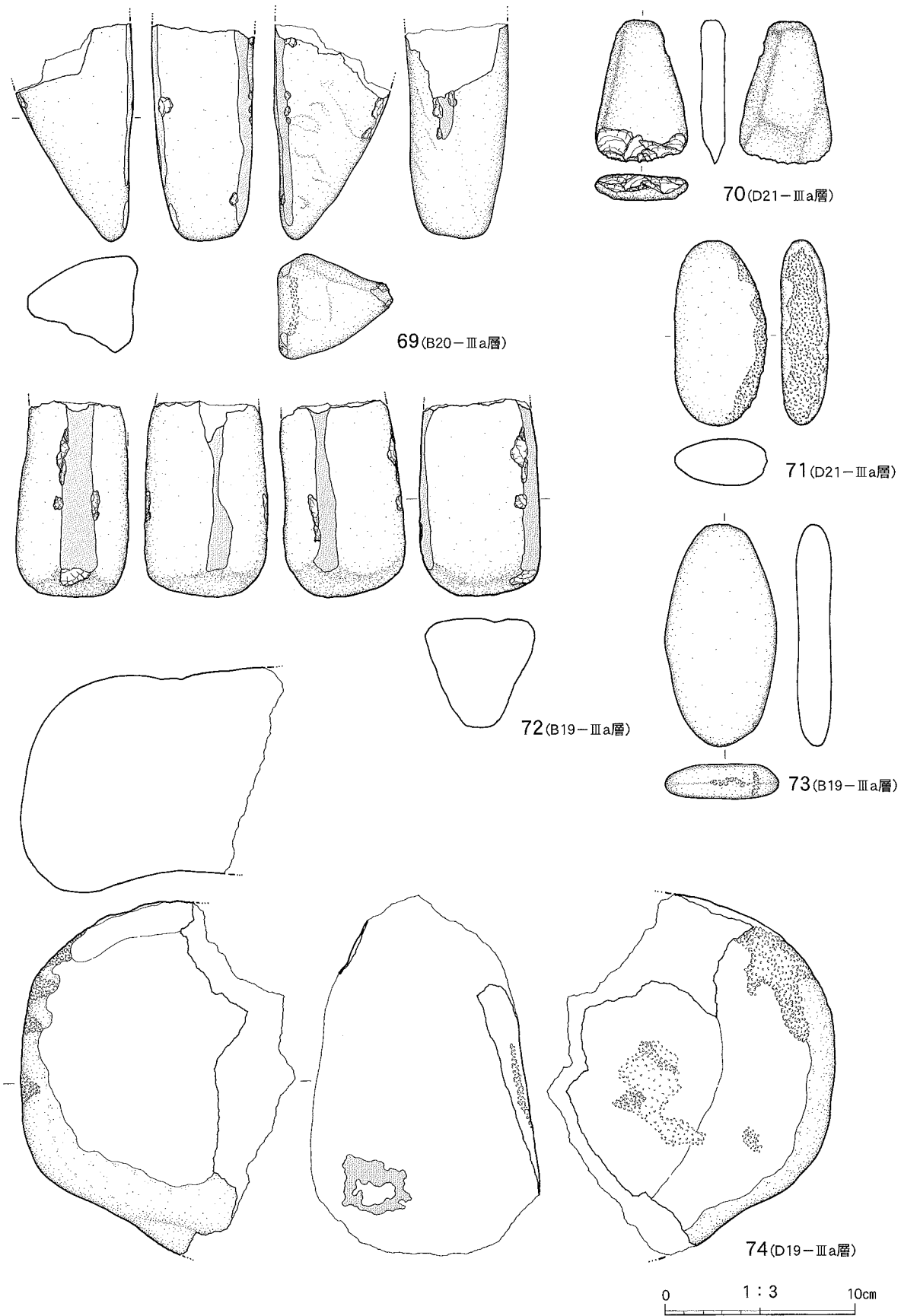
第20図 遺物包含層（III層）出土石器（3）



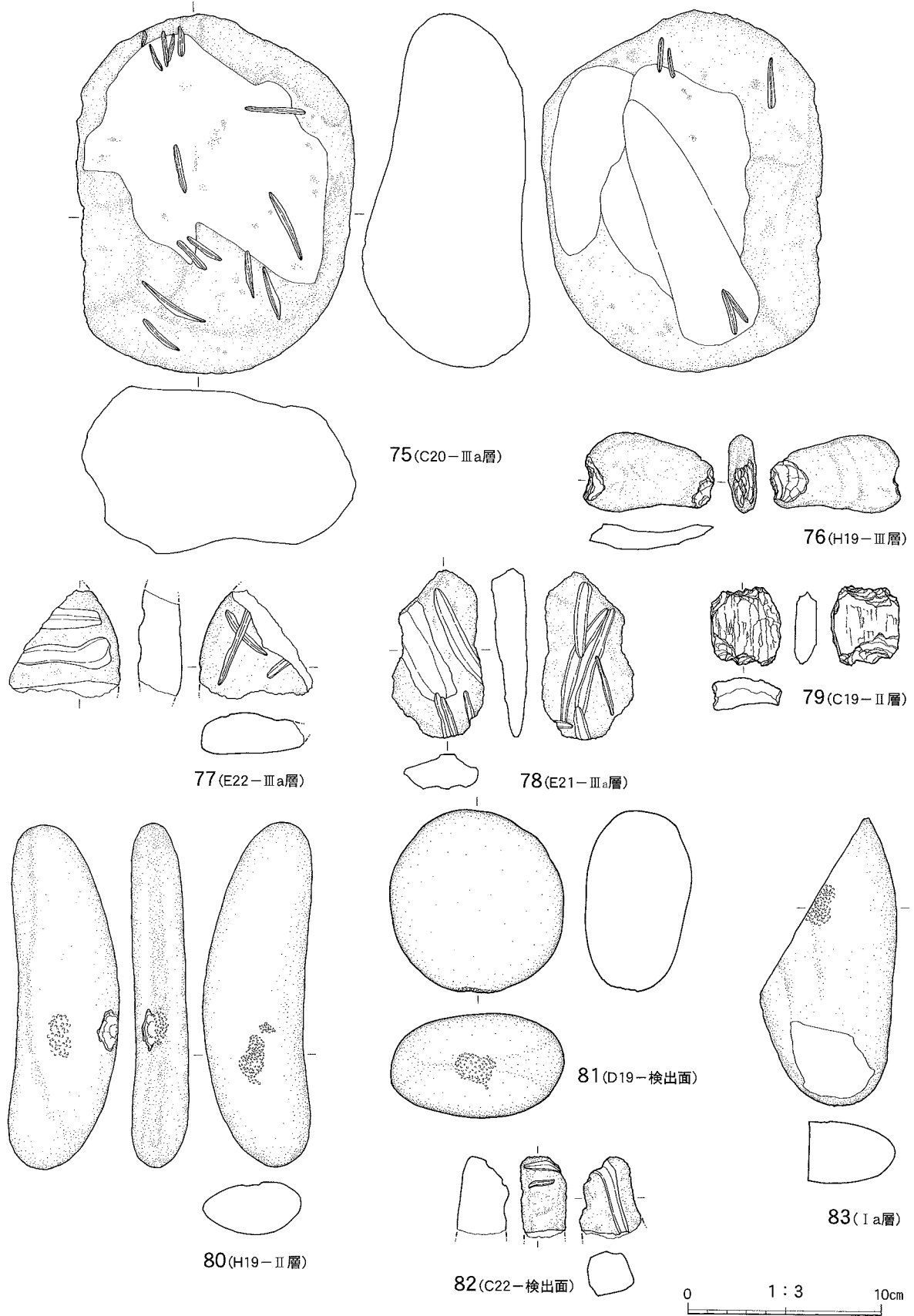
第21図 遺物包含層（III層）出土石器（4）



第22図 遺物包含層 (II~Ia層) 出土石器 (5)



第23図 遺物包含層 (III層) 出土石器 (6)



第24図 遺物包含層 (III~Ia層) 出土石器 (7)

※ () は欠損、破損を表す

挿図	遺構・グリット	層位・施設	長さ(mm)	幅 (mm)	重量(g)	器種	分類	備考
8-6	RD001	埋土	(68)	16	0.9	石錐	A1	頁岩
8-7	RD004	埋土	70	50	4.3	搔器	A1a	頁岩
8-8	ピット2	埋土	(82)	53	5.0	—	—	頁岩
8-9	ピット29	埋土	54	33	1.9	削器	A3d1	頁岩
8-10	ピット29	埋土	(48)	73	7.1	削器	A3e1	頁岩
8-11	ピット53	埋土	(33)	40	1.3	石鎌	C4	頁岩
8-12	ピット61	埋土	(51)	30	1.0	石鎌	Ba	頁岩
8-13	ピット30	埋土	118	43	6.4	石鎌	A1c	頁岩
8-14	ピット71	埋土	52	114	11.3	削器	B1b2	頁岩
8-15	ピット34	埋土	77	110	330.5	敲打磨石	D1	凝灰岩
8-16	ピット38	埋土	53	59	194.5	敲石	B1a6	凝灰岩
8-17	ピット38	埋土	117	43	280.9	敲石	B1c5	凝灰岩
18-1	G20	IV層	21	15	0.9	石鎌	2Bb	頁岩
18-2	C21	IV層	17	15	0.5	石鎌	Ba	頁岩
18-3	C21	IV層	28	16	2.2	石鎌	2Bb	頁岩
18-4	H20	IV層	38	18	5.4	石鎌	2C5a	頁岩
18-5	D20	IV層	(25)	17	2.9	石鎌	2A2b	頁岩
18-6	E22	IV層	38	28	10.4	削器	5A1a	頁岩
18-7	C21	IV層	28	31	10.7	削器	B1b1	玉髓
18-8	E21	IV層	86	49	64.9	削器	A2c4	頁岩
18-9	B21	IV層	(29)	25	3.8	削器	A2d1	頁岩
18-10	I 19	IV層	25	26	2.7	削器	B1a1	頁岩
18-11	B20	IV層	(23)	21	1.2	削器	B1b2	頁岩
18-12	D19	IV層	20	22	3.6	削器	B1b1	頁岩
18-13	B21	IV層	18	25	1.3	削器	B2b2	頁岩
18-14	I 19	IV層	25	58	33.5	削器	A2d2	頁岩
18-15	C22	IV層	33	15	2.9	削器	A3e1	頁岩
19-16	C20	IV層	31	36	8.8	削器	B1b1	頁岩
19-17	D21	IV層	(33)	26	5.2	削器	A2e2	頁岩
19-18	F21	IV層	29	27	5.9	削器	B1b1	頁岩
19-19	B18	Ⅲa層	(27)	16	2.4	石鎌	C5a	頁岩
19-20	B19	Ⅲa層	(21)	12	0.5	石鎌	A1c	黒曜石
19-21	G19	Ⅲa層	(22)	18	2.2	石鎌	A	頁岩
19-22	G19	Ⅲ層	(21)	12	0.5	石鎌	A2c	頁岩
19-23	D20	Ⅲa層	31	19	1.3	石鎌	A1d	頁岩
19-24	B20	Ⅲa層	(29)	21	3.7	石鎌	A2b	頁岩
19-25	A20	Ⅲa層	(32)	22	4.9	石鎌	A2e	頁岩
19-26	D19	Ⅲa層	(34)	26	8.2	石鎌	A2e	頁岩
19-27	B21	Ⅲa層	(42)	20	7.1	石鎌	B	頁岩
19-28	F19	Ⅲa層	32	17	2.9	石鎌	A2a	頁岩
19-29	B18	Ⅲa層	(26)	16	2.2	石鎌	—	頁岩
19-30	C20	Ⅲa層	(31)	14	2.3	石鎌	—	頁岩
19-31	B20	Ⅲa層	72	26	10.9	石匙	A2a	頁岩
19-32	I 20	Ⅲa層	(21)	18	2.5	石鎌	B	頁岩
19-33	E19	Ⅲa層	33	24	6.0	削器	A1a2	頁岩
20-34	B19	Ⅲa層	34	20	4.2	削器	A1b1	頁岩
20-35	B20	Ⅲa層	30	20	2.9	削器	A2b1	頁岩
20-36	H20	Ⅲa層	38	33	10.5	削器	A3d1	頁岩
20-37	G21	Ⅲa層	62	32	20.4	削器	B1c1	頁岩
20-38	F20	Ⅲa層	44	33	12.5	削器	B1c2	頁岩
20-39	A22	Ⅲb層	22	26	2.9	両面調整石器	A2b	

屠牛場遺跡第1次発掘調査遺物包含層出土石器一覧(1)

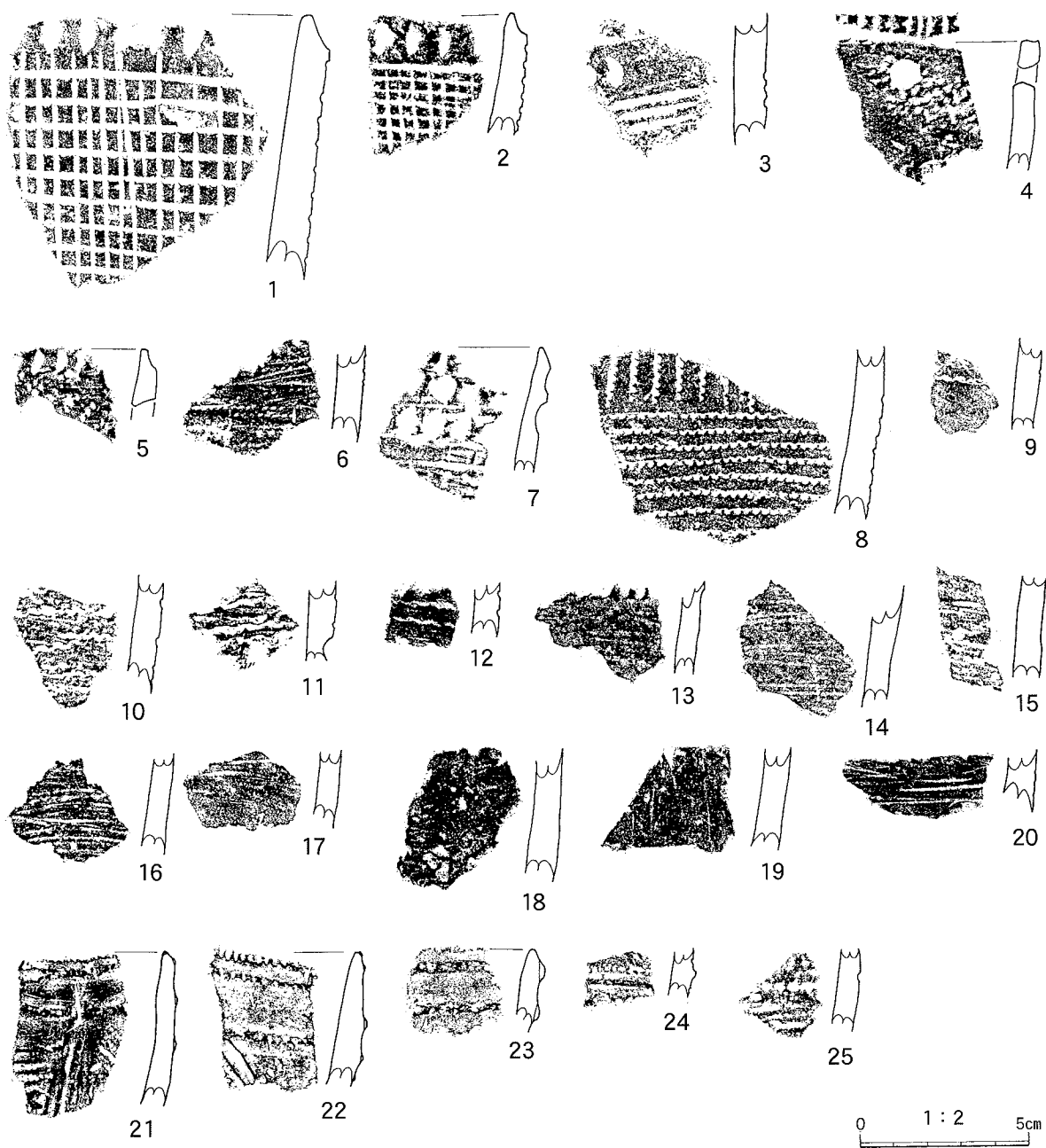
※ () は欠損、破損を表す

挿図	遺構・グリット	層位・施設	長さ(mm)	幅 (mm)	重量(g)	器種	分類	備考
20-40	C20	Ⅲ a 層	35	27	6.5	搔器	A2a	頁岩
20-41	H19	Ⅲ a 層	51	18	5.3	削器	A1e1	頁岩
20-42	B20	Ⅲ a 層	30	38	7.5	両面調整石器	A1b	頁岩
20-43	E22	Ⅲ a 層	29	21	1.7	削器	B1b1	頁岩
20-44	A21	Ⅲ a 層	30	23	3.6	削器	A3d1	頁岩
20-45	D21	Ⅲ a 層	78	57	91.7	筥状石器	B2b	頁岩
20-46	B20	Ⅲ a 層	21	10	1.8	石核	D	黒曜石
21-47	E19	Ⅲ a 層	38	48	11.2	削器	A1d1	頁岩
21-48	A21	Ⅲ a 層	26	31	5.3	削器	A3d1	頁岩
21-49	H19	Ⅲ 層	31	26	4.3	削器	A2c1	頁岩
21-50	A20	Ⅲ a 層	30	54	15.9	削器	A2c1	頁岩
21-51	A22	Ⅲ a 層	67	47	47.0	削器	A3d2	頁岩
21-52	A22	Ⅲ b 層	33	44	7.0	削器	B1b1	頁岩
21-53	D19	Ⅲ a 層	35	37	15.9	両面調整石器	A1b	頁岩
21-54	E21	Ⅲ a 層	52	27	14.9	削器	B2c1	頁岩
21-55	D19	Ⅲ a 層	33	40	11.2	両面調整石器	A2b	頁岩
21-56	C21	Ⅲ a 層	47	38	29.1	両面調整石器	A1b	頁岩
22-57	C19	Ⅱ 層	36	26	7.3	削器	A2d1	頁岩
22-58	B21	検出面	(17)	20	1.9	石鏃	B	頁岩
22-59	-	I a 層	39	25	6.5	削器	A2c1	頁岩
22-60	C20	検出面	53	38	20.2	削器	A2d1	頁岩
22-61	-	攪乱	51	31	10.6	削器	A2d1	頁岩
22-62	F20	攪乱	(24)	20	3.1	削器?	A3d2	頁岩
22-63	D22	検出面	35	28	4.9	削器	A2d1	頁岩
22-64	-	I a 層	25	32	5.0	削器	B2b1	頁岩
22-65	C22	検出面	23	47	9.9	両面調整石器	A2b	頁岩
22-66	G19	攪乱	35	34	7.6	削器	A2c1	頁岩
22-67	-	I a 層	73	35	32.5	削器	B1c1	頁岩
22-68	D19	検出面	24	11	2.5	磨製石斧	-	碧玉?
23-69	B20	Ⅲ a 層	(11)	60	410.0	敲打磨石	A1	粘板岩
23-70	D21	Ⅲ a 層	74	49	63.5	敲打磨石	D3	珪岩?
23-71	D21	Ⅲ a 層	96	48	146.0	敲石	B1b4	砂岩
23-72	B19	Ⅲ a 層	(11)	62	534.0	敲打磨石	A1	凝灰岩
23-73	B19	Ⅲ a 層	115	58	190.5	敲石	B5b5	砂岩
23-74	D19	Ⅲ a 層	(166)	(149)	3207.2	石皿	A1a2	花崗岩
24-75	C20	Ⅲ a 層	165	144	1802.0	砥石	B1a1b	溶岩質安山岩
24-76	H19	Ⅲ 層	55	40	41.5	礫石錘	-	粘板岩
24-77	E22	Ⅲ a 層	(55)	(57)	40.9	砥石	A2a2a	溶岩質安山岩
24-78	E21	Ⅲ a 層	86	48	36.4	砥石	A3a2b	溶岩質安山岩
24-79	C19	Ⅱ 層	40	36	25.5	石錘	-	蛇紋岩
24-80	H19	Ⅱ 層	176	63	365.0	敲石	B4c1	閃緑岩
24-81	D19	検出面	93	90	635.0	磨石	A4a2	凝灰岩
24-82	C22	検出面	(41)	32	15.7	砥石	A2a3b	溶岩質安山岩
24-83	-	I a 層	146	68	364.0	敲石	B4c2	凝灰岩

屠牛場遺跡第1次発掘調査遺物包含層出土石器一覧(2)

小岩末治氏採集遺物（第25図1～25） 1～25は小岩末治氏によって採集された屠牛場遺跡出土の早期・後北C₂式土器である。本資料の多くは1960年に刊行された「岩手県史—上古編—」に掲載されているが、未掲載資料を含めて紹介するものである。

1～20は縄文時代早期の沈線・貝殻文土器である。1・2は口唇部に刻目が施され口唇下には沈線による格子目文が施文される。3は3条1組の帯状平行沈線による幾何学文が施文されるもので、幾何学文間に爪形状刺突が施文される。4～6は縄文施文、7は爪形状刺突、8～12は貝殻腹縁文、13～20は条痕が施される土器である。21～25は刻目のある微隆線・三角刺突列・帯縄文が施される後北C₂式土器である。



第25図 小岩末治氏採集遺物

(4) 調査のまとめ

縄文時代の遺構

遺構 縄文時代早期と考えられる遺構 2 基 (RE 001 竪穴・RD 004 土坑)、早期以降と考えられる遺構 7 基 (RD 001 ~ 006・008 土坑) が検出されている。特に、RD 001 ~ 006 土坑は調査区北西部に集中しており、何らかの規則性を持つものと考えられる。

包含層出土遺物について

縄文早期 押型文土器 所謂「日計式」押型文土器である。第IV層より1点出土しており(第9図1)、横位平行線状文とV字状文を交互多段に施文したもので、胎土には繊維・石英粒・微量の雲母が含まれ、後述する沈線・貝殻文土器群とは時期を異にするものであろう。

沈線・貝殻文土器 屠牛場遺跡より出土した沈線・貝殻文土器群は、沈線文・爪形状刺突文・貝殻腹縁文・縄文・捺糸文・条痕などの諸文様を特徴とした土器群である。出土した土器の概観は、口唇部に刻目が施され、口縁部文様帯には沈線による格子目文・爪形状刺突による文様が描かれるものが多い。地文には縄文・捺糸文・条痕が施される。また貝殻腹縁文も併用して施文されていることがあるが主体となる文様ではない。

屠牛場遺跡出土の沈線・貝殻文土器は、単時期か極めて近接した複数の時期のものと考えられる。単時期または複数の時期と考えた場合、屠牛場遺跡出土の沈線・貝殻文土器は大きくA・Bの2群に分けることができる。

A群(第9図2~8・15~23、第10図41~第11図87) 口縁部文様帯に沈線による格子目文・幾何学文による文様を描き、主体となる文様帯の上部または下部には爪形状刺突・横位平行沈線による文様帯を巡らし、体部には地文として縄文・捺糸・条痕のいずれかが施されるもの。

B群(第9図9~13、第11図88~110) 口縁部文様帯に爪形状刺突列が施され、口縁部文様帯下には貝殻腹縁文が施されるものもある。地文には横位方向の条痕が施されることが多い。

以上のようにA・Bの2群に大別しそれぞれに類例を求めた場合、次の土器型式に類似する。A群-蛇王洞Ⅱ式、B群-白浜・小舟渡平式。これらのA・B土器群が時期差による違いか、文様組成の違いによる同一時期のものかは今後の研究に委ねることが多い。

縄文前期 第Ⅲ層及びⅡ層より出土している。胎土には多量の繊維が含まれ、口唇部は平坦に整形され刻目が施され器面には縄文が密に施される(第15図184~195)。前期初頭の千鷲Ⅱ式に類似する。

続縄文 弥生時代終末期の赤穴式、北海道系の後北C₂式土器が若干量出土している(第16図224~228)。

屠牛場遺跡の東側に位置する丘陵上には、後北C₂式・古式土師器が多量に出土した永福寺山遺跡が所在(現在壊滅)する。永福寺山遺跡からは墳墓と考えられる土坑が5基以上発見され、土坑内から後北C₂式・古式土師器の他、副葬品と思われる鉄製品も出土している。西麓に位置する屠牛場遺跡に遺物が流出したものととも考えられるが、墓域以外の空間として当地が利用されていた可能性もある。

(附章) 資料紹介—新茶屋遺跡出土の縄文時代早期土器—

遺跡の概要 紹介する土器は、平成7年度に盛岡市教育委員会によって発掘調査された、盛岡市山岸6丁目地内に所在する新茶屋遺跡出土の縄文時代早期土器である。

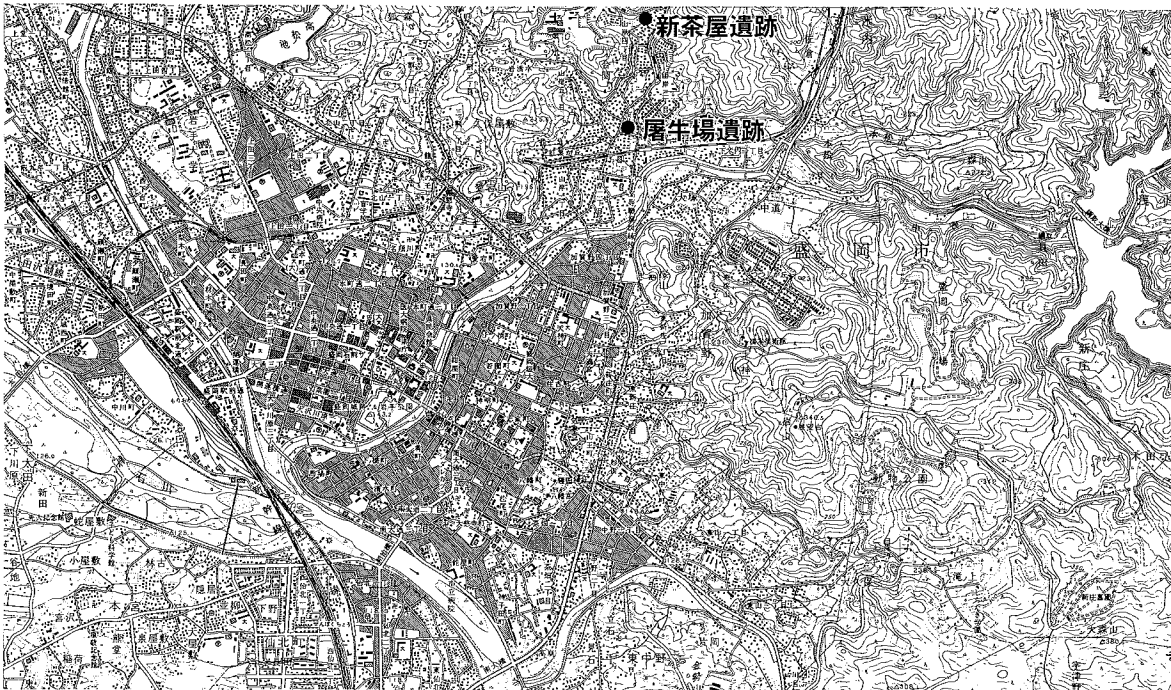
位置 (第26図) 遺跡は屠牛場遺跡より北約1kmの地点で、四十四田丘陵南東端に形成される崖錘性扇状地に立地する (第2図)。

紹介する遺物は全て包含層からの出土で、包含層からは縄文時代早期初頭から弥生時代に至る遺物が確認されている。本稿では便宜上Ⅰ～Ⅴ群に早期土器を分類したが、前項の屠牛場遺跡の分類とは合致しないことをご留意して頂きたい。

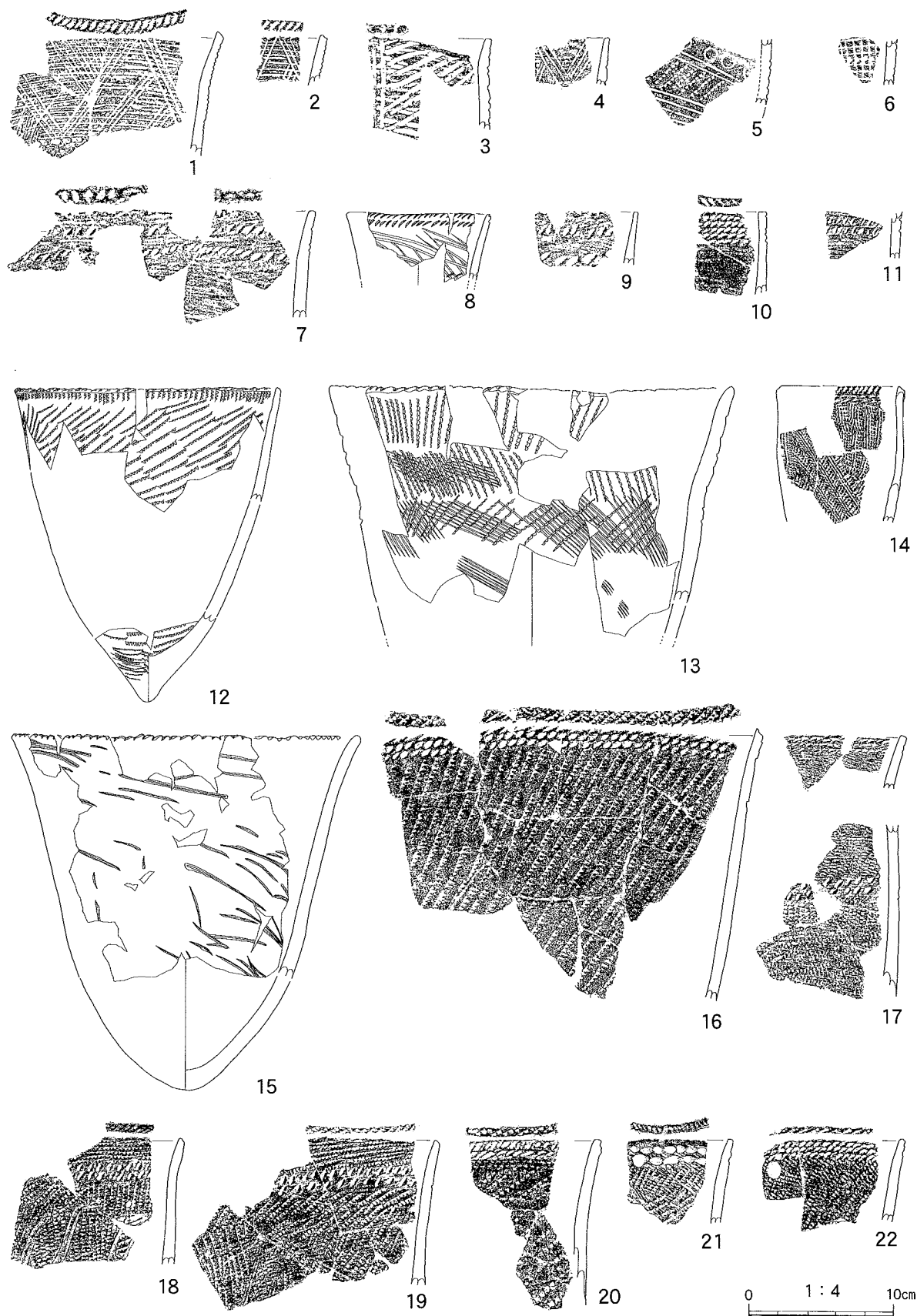
沈線・貝殻文Ⅰ群 (第27図1～6) 1～6は沈線による文様が施される土器である。外面は縦位のミガキによって器面調整される。1・2は同一個体で、口唇部形状は外削状を呈し、刻目が施される。口縁部文様帯には沈線によるy字状文が描かれる。文様帯下には1条の刺突列が廻る。

3は口縁部文様帯が縦位の平行沈線により区画されるもので、縦位の平行沈線を基準に襷状の平行沈線が描かれる。4は3条1組の平行沈線によるy字状文が描かれy字内を横位の平行沈線により充填するものである。5は平行沈線による幾何学文が描かれ、文様間に円形竹管文・貝殻腹縁文が施文される。6は沈線による格子目文が描かれ、1条の刺突列が施文される。

沈線・貝殻文Ⅱ群 (第27図7～11) 7～11は、地文に横位の条痕が施され、爪形状刺突列が横位に廻る土器である。口唇部の形状は平縁状を呈する。7～9は地文が条痕、10・11は地文の条痕で磨消される土器である。



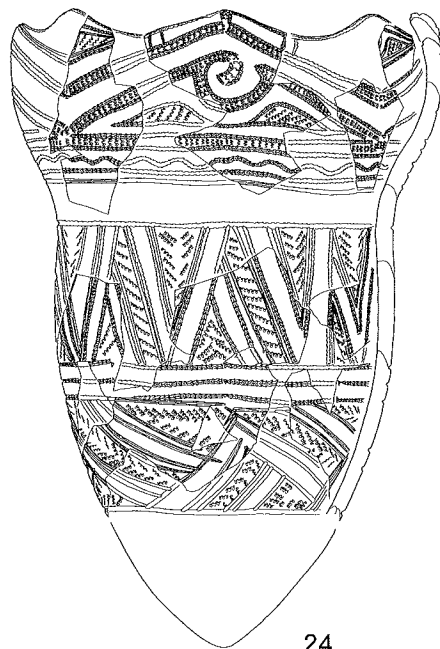
第26図 新茶屋遺跡の位置 (1:50,000)



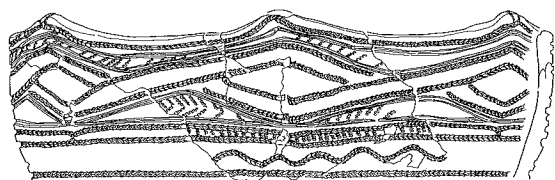
第27图 新茶屋遺跡出土土器 (1)



23



24



25



30



26



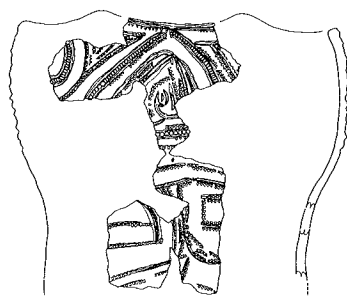
27



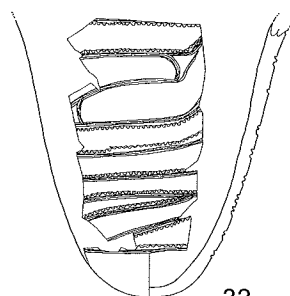
28



29



31



32



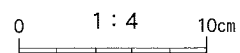
33



34



35



第28図 新茶屋遺跡出土土器(2)

沈線・貝殻文Ⅲ群（第 27 図 12～22） 12～22 は貝殻腹縁文・爪形状刺突を主体とした土器である。口唇部は外削ぎの形状を呈し、口唇の面には貝殻腹縁文などの文様が施文されることが多い。

12 は口唇部に貝殻腹縁文が施され、口唇下に縦位の短い貝殻腹縁文が口唇に沿って施文される。体部には斜位の貝殻腹縁文が密に施文され、底部は乳頭状の尖底を呈す。13 は口縁が外反し、体部がやや膨らむ深鉢である。口唇部には刻目が施され、口唇下には縦位の貝殻腹縁文、体部には羽状に貝殻腹縁文を施文するものである。14 は口唇が外削ぎ状を呈し、口唇部に貝殻腹縁文を密に施文する小形深鉢である。口唇下には 3 条の爪形状刺突列、体部には貝殻腹縁を押し引きした文様が描かれる。15 は 13 と同様の器形を呈す無文深鉢である。器面はミガキによる調整で光沢を帯びる。16・20～22 は口唇が外削ぎ状を呈し、口唇部に貝殻腹縁文を密に施文する深鉢である。口唇下には 2 条の爪形状刺突列が施され、体部には斜位の貝殻腹縁文が横位多段に施文される。

17 は口唇部が平頭状を呈し、口唇下に 2 条の爪形状刺突列が施される深鉢である。文様帯は口縁部・体部に施される刺突列により文様帯が分割される。18・19 は口唇が外削ぎ状を呈し、口唇部に貝殻腹縁文を密に施文する深鉢である。口唇下に横位平行の貝殻腹縁文を施文し、下部に 2 条の爪形状刺突列が施される。

沈線・貝殻文Ⅳ群（第 28 図 23～30） 23 は、口縁が膨らみながらやや内湾し、頸部に屈曲を持つ尖底深鉢である。体部から底部は緩やかなカーブを描き、底部は乳頭状の尖底を呈す。口唇部には 6 個の突起があり、突起頂部を基準とした縦割の文様帯が区画される。文様帯は角棒状の施文具による横位平行の押し引き文により分割され、上記した縦割区画の線を基調に文様を展開させる。主体となる文様は押し引きによる y 字状文である。y 字状文が組み合うことでその接点は、変形の菱形を描くことになり、描かれた文様内には貝殻腹縁文が文様に沿うように施文される。

24 は、23 と同様の器形を呈する尖底深鉢である。口縁部文様帯には貝殻腹縁を刺突した隆線による蕨状文が施文される。隆線の縁は押し引き文によって縁取られる。頸部には押し引き文による弧状文が廻り、下位に無文帯が設けられる。体部には沈線・押し引きによる V 字状文が施文される文様帯、沈線による y 字状文が施文される文様帯が設けられる。2 つの文様帯は押し引きによる 3 条の横位平行線により区画される。

沈線・貝殻文Ⅴ群（第 28 図 31～35） 31 は、頸部に屈曲を持つ尖底深鉢である。頸部より上部の口縁部は直線的に内傾する。主体となる文様帯は大きく口縁部・体部に設けられ、沈線・貝殻文 4 の土器群で見られる多段の文様帯は構成されない。底部は、32 で見られるように丸底を呈すものや、図示はされていないが丸底に近い尖底がある。文様は沈線文・貝殻腹縁文・刺突文・隆線により構成され、刺突文は菱形・三角形など主体となる幾何学文様の交点・角などに刺突される。

まとめ 上記のⅠ～Ⅴの土器群は、次の土器型式に該当させることができる。Ⅰ群－蛇王洞Ⅱ式、Ⅱ群－白浜・小舟渡平式、Ⅲ群－寺の沢 a・b 類、Ⅳ群－明神裏Ⅲ式、Ⅴ群－物見台式。

Ⅰ・Ⅱ群については時期差・共伴によるものかは不明である。大新町 a 式以降に発達する沈線による描線技法を持つⅠ・Ⅱ群は、描線技法が衰退し貝殻文など刺突を主体とするⅢ群よりも古く位置づけられよう。Ⅳ群は文様帯が多段構成であり、文様帯全域に文様を施すなどⅠ群以来の文様変遷から見た場合、特異な土器群であるといえよう。一方、Ⅴ群土器はⅣ群に近似しているながらも、主体となる文様が口縁部に集中する傾向にある。新茶屋遺跡の詳細については資料の検討を進め、本報告において稿を改めたい。

Ⅱ. 志波城跡第 84・86 次発掘調査

志波城跡（第84・86次調査）

1. 遺跡の環境

位置 志波城跡は、盛岡市の南西部、下太田方八丁ほかに所在する。遺跡は、北上川と雫石川のつくりだす沖積段丘面に立地し、北上川沿いには南の北上・胆沢方面と、雫石川沿いには西の秋田方面と連絡できる交通の要衝に位置する。延暦20(西暦801)年、坂上田村麻呂を征夷大將軍とする朝廷軍は蝦夷との戦いに勝利し、延暦21(802)年に胆沢城が水沢市佐倉河の地に、翌延暦22(803)年には志波城が盛岡市太田の地に造営された。しかし、志波城は雫石川の氾濫による水害を理由に約10年後には南方の矢巾町徳田の地に造営された徳丹城に主要な機能を移転している。志波城跡は、陸奥国最北の城柵遺跡であり、陸奥国府である多賀城跡(宮城県)に匹敵する規模であることから、平安時代初頭における朝廷側最前線の蝦夷支配拠点であったと言える。

2. 調査の内容

これまでの調査 志波城跡の発掘調査は、昭和51・52年度の東北縦貫自動車道建設に伴う調査(岩手県教育委員会)を契機として始まり、その後の盛岡市教育委員会による範囲確認調査によって、『日本紀略』延暦22年(西暦803年)条初見の「志波城」跡と認定され、昭和59年に国の史跡に指定されている。昭和51年度から平成10年度までの23年間に83次にわたる発掘調査を継続しているとともに、平成5年度からは史跡保存整備事業に着手し、平成5～11年度に外郭南辺部および南大路の復元整備を実施し、平成12年度以降は政庁・官衙域の復元整備を計画している。

11年度調査 平成11年度の発掘調査は、第83次～第87次の5地点を対象とした。このうち市内遺跡群発掘調査事業(国庫補助)として実施したのは史跡現状変更に伴う事前調査として行った第84次・第86次調査であるが、いずれも遺構は確認されなかった。

第83次調査(郭内北東部)

所在地 下太田宮田 16-2,4-1,20-3,20-10,10-1

調査原因 上水道管敷設(現状変更、藤原保雄・宮野貢・宮野和夫・宮野ハツエ・松本道江)

調査面積 72㎡ **調査期間** 平成11年1月27日～7月21日 **検出遺構** なし

第84次調査(郭内北西部)

所在地 中太田吉原 68-1,58-5 **調査原因** 個人住宅新築及び牛舎移築(現状変更、中村哲)

調査面積 200㎡ **調査期間** 平成11年9月1日～9月30日 **検出遺構** なし

第85次調査(政庁南東部・南西部)

所在地 下太田方八丁20外 **調査原因** 内容確認

調査面積 6,200㎡ **調査期間** 平成11年9月6日～11月17日

検出遺構 東脇殿跡、掘立柱建物跡1棟、築地塀跡、築地外溝・内溝跡、溝跡9条、土坑4基

第 86 次調査 (郭内北部)

所在地 下太田宮田 31-3 調査原因 個人住宅増改築 (現状変更、宮田春男)

調査面積 80 m² 調査期間 平成 11 年 10 月 19 日～10 月 29 日 検出遺構 なし

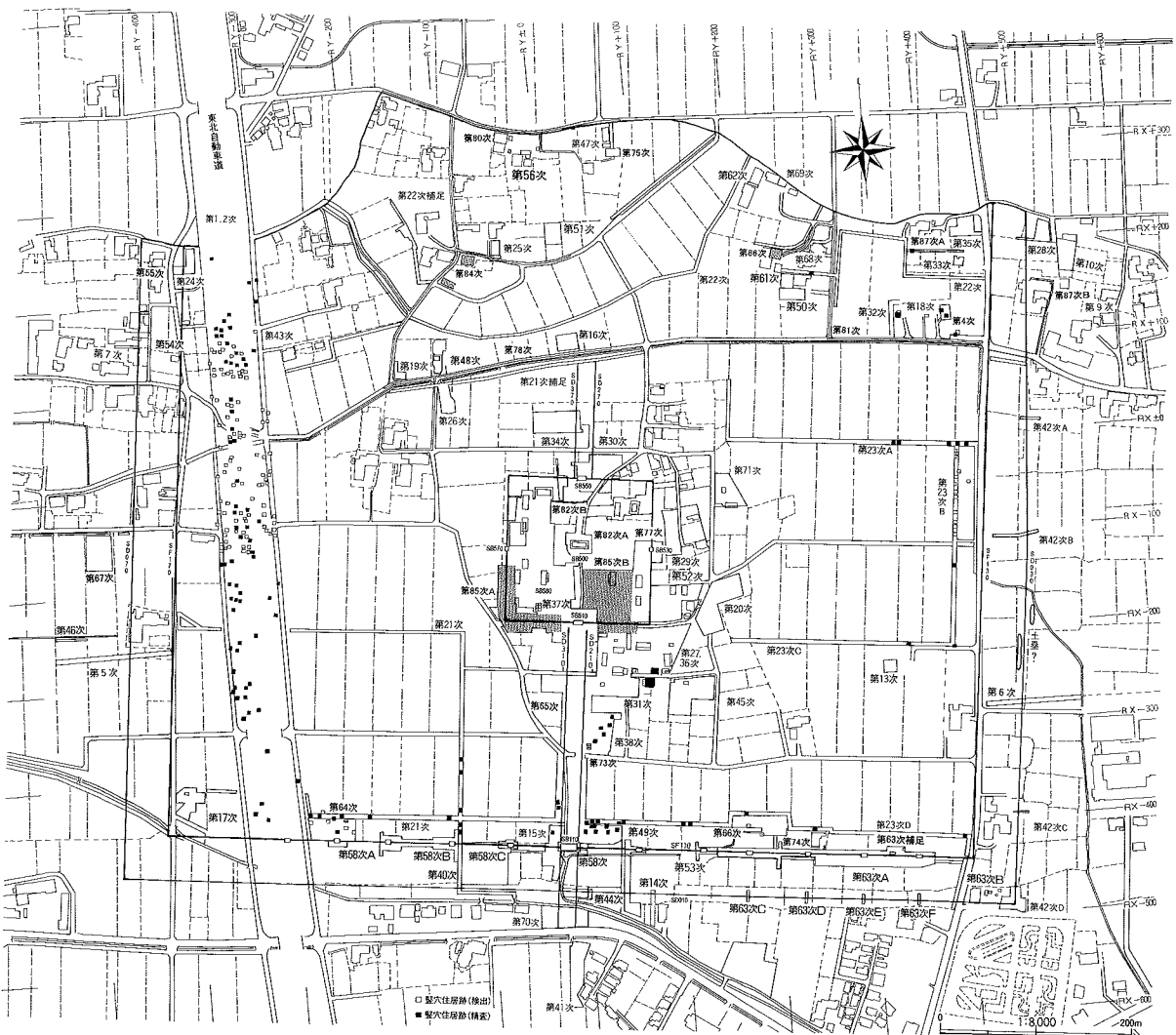
第 87 次調査 (郭内北東部)

所在地 下太田宮田 8,20-2,33-1,下太田林崎 22

調査原因 上水道管敷設 (現状変更、岩泉正三・宮田満喜子・宮田登・岩泉長一)

調査面積 200 m² 調査期間 平成 11 年 12 月 22 日～3 月 30 日

検出遺構 竪穴住居跡 1 棟、掘立柱建物跡 2 棟、溝跡 2 条、土坑 1 基、ピット 12 口



第 29 図 志波城跡全体図 (1 : 8000)

Ⅲ. 町田遺跡第 10 ・ 11 ・ 12 次発掘調査

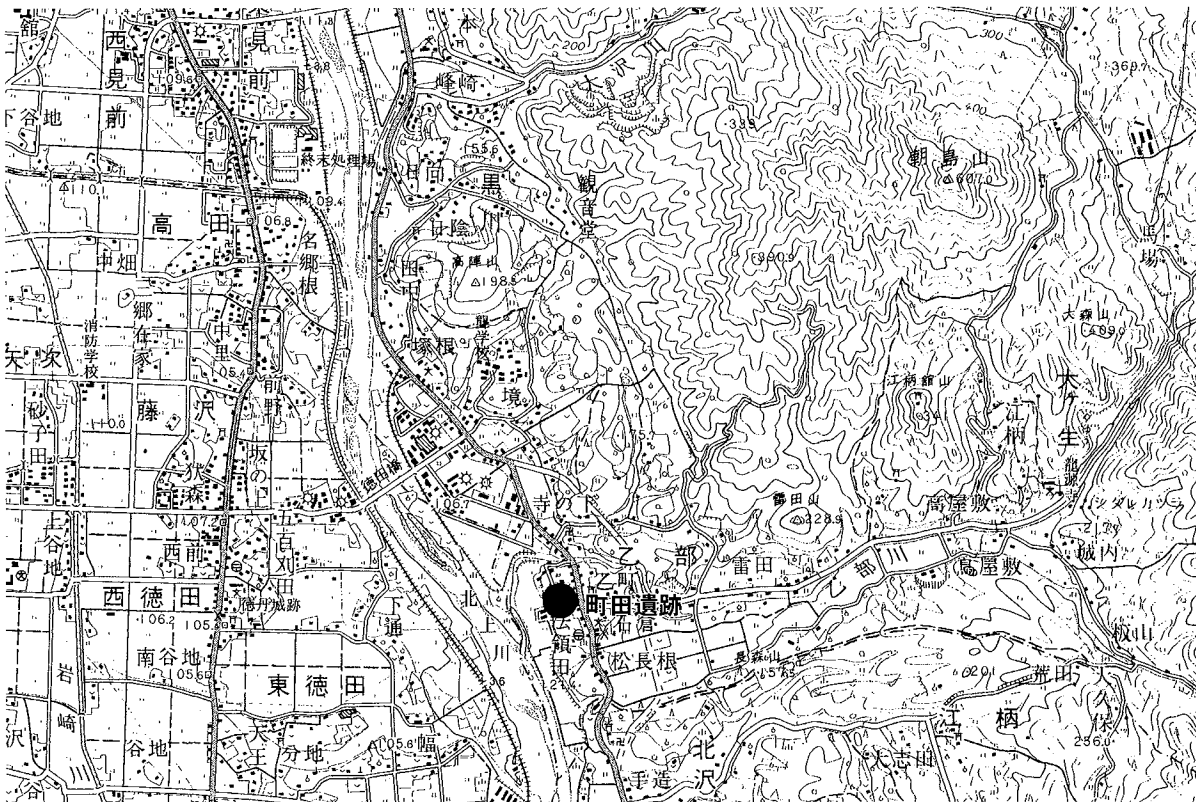
町田遺跡（第10～12次調査）

1. 遺跡の環境

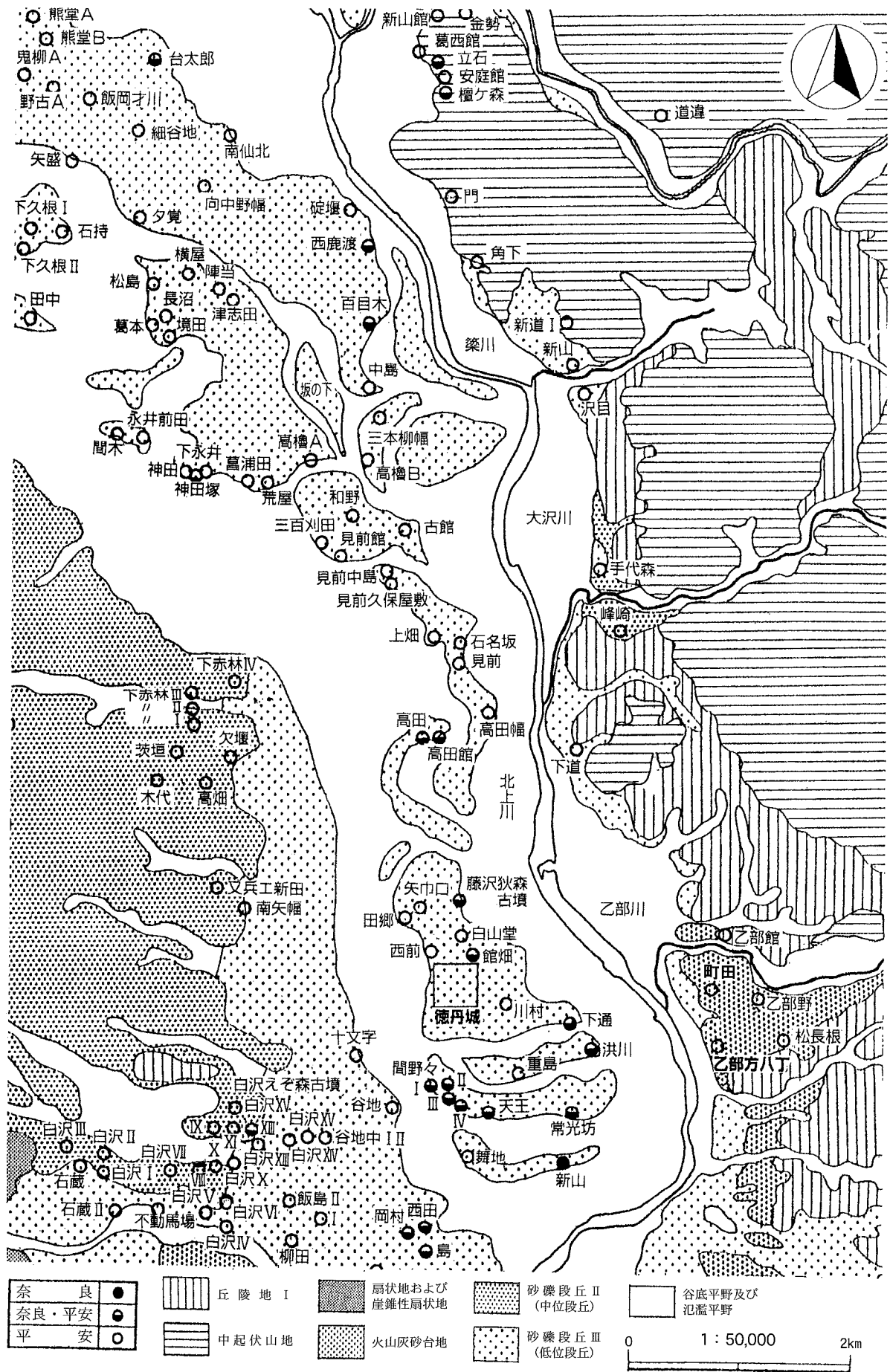
位置 町田遺跡は、盛岡市中心部から約15kmほど南方の乙部30地割町田地内に所在し、北上川の東側に形成された河岸段丘上に立地している（第30図）。

乙部遺跡群 周辺の遺跡として、北側の乙部川を挟んで乙部館遺跡、東側に乙部野遺跡・松長根遺跡、南側の乙部川支流を挟んで乙部方八丁遺跡があり、これら5遺跡を包括して「乙部遺跡群」と総称している。

地形 遺跡の立地する南北約900mをはかる細長い河岸段丘面（砂礫段丘Ⅱ）は、西側を南流する北上川の氾濫原によって画されるほか、東側は乙部川によって開折された低地によって画される。また、北側は西流する乙部川、南側は乙部川から分流する小河川および大地田川によって画されている（第31図）。この河岸段丘は、表土下に礫を多く含む黒色土やスコリア粒と礫を含む黄褐色の火山灰土がみられる。この黒色土層は黄褐色火山灰層の上に堆積していると考えられ、町田遺跡から乙部野遺跡にかけて確認されており、平安時代の遺構検出面および縄文時代後期の遺物包含層となっている。なお、黄褐色土火山灰層内には遺物はみられない。



第30図 町田遺跡の位置（1：50,000）



第31図 地形分類と周辺の遺跡分布

2. 調査内容

これまでの調査 町田遺跡では、平成6年度以降、第1～9次調査が実施され、縄文時代後期の遺物包含層、平安時代の竪穴住居跡・土坑・溝跡などが検出されている(第32図)。

11年度調査 平成11年度の発掘調査は、第10～12次の3地点を対象とし、いずれも市内遺跡群発掘調査事業(国庫補助)として実施した。

第10次調査

所在地 乙部30地割34-7 調査原因 個人住宅新築(北田光志) 調査面積 155㎡

調査期間 平成11年4月7日～4月19日 検出遺構 竪穴住居跡1棟

第11次調査

所在地 乙部30地割36-3 調査原因 個人住宅新築(戸塚幸男) 調査面積 84㎡

調査期間 平成11年4月7日～4月19日 検出遺構 竪穴住居跡1棟

第12次調査

所在地 乙部30地割63-2,84 調査原因 個人住宅新築(北川浩一) 調査面積 198㎡

調査期間 平成11年8月23日～8月30日 検出遺構 土坑2基、ピット1口、遺物包含層2ヶ所

(1) 第10次調査

位置 第10次調査区は、遺跡の南東部に位置し、遺跡の東端を南北に走る県道から70mほど西側の地点である。調査区の北東約30mに平成6年度実施の第1次調査区が位置し、西側約30mの地点には平成9年度実施の第6次調査区が位置している。

調査区は南側に若干傾斜する地形上にあり、遺構検出面は黒色土及び礫の多く混入する黒～暗褐色土である。検出遺構は竪穴住居跡1棟である(第33図)。

R A 113 竪穴住居跡 (第34図)

規模 調査区のほぼ中央に検出し、平面形は、一辺約3mのほぼ方形で、検出面からの深さは0.20～0.26mをはかる。主軸線方向はS45°Eである。

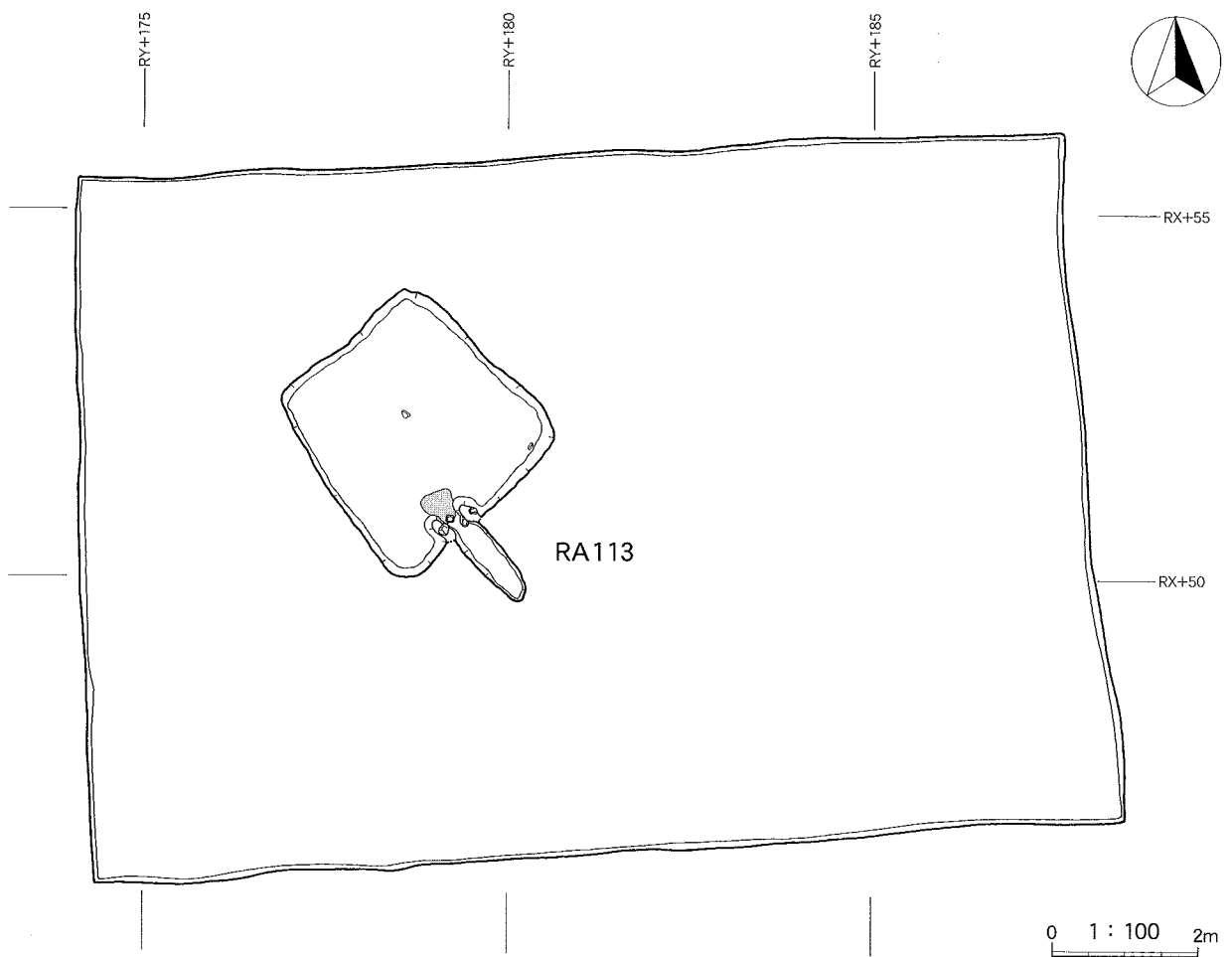
埋土 埋土は自然堆積で、層相の違いによりA～Dの4層に大別される。A層は黒～黒褐色土主体で灰白色火山灰を含み、若干の礫が混じる。B層は黒褐～暗褐色土主体で褐色土を粒状に含む。C層は黒褐～暗褐色土主体で若干の黄褐～褐色土を含み、他の層に比べ軟らかい。D層は黒～黒褐色土主体で褐色土を粒状に含む、C層よりもしまりがなく軟らかい。

床面 床面はほぼ平坦で、構築土(L層)は褐色土と粒状の白色粘土を含む暗褐色土であるが、一部は構築土がなく礫が混じる暗褐色土を床面としている。壁はゆるやかに立ち上がっている。

かまど かまどは、南東壁の南寄りに構築されている。煙道は溝状で、底面は住居床面とほぼ同じレベルで煙出に向かっている。煙道の長さは1.3m、幅は0.35～0.45mをはかる。かまどのでの残存状況は良好で、構築土(K層)は白色粘土を少量含む暗褐色土で、礫が混じっている。火床面は、この両そでに囲まれた内側に径0.45～0.5mの不整形円形に検出し、また火床面の下にはかまど地業土(L'層)がみられた。この地業土は床面構築土を掘り込んでいて、



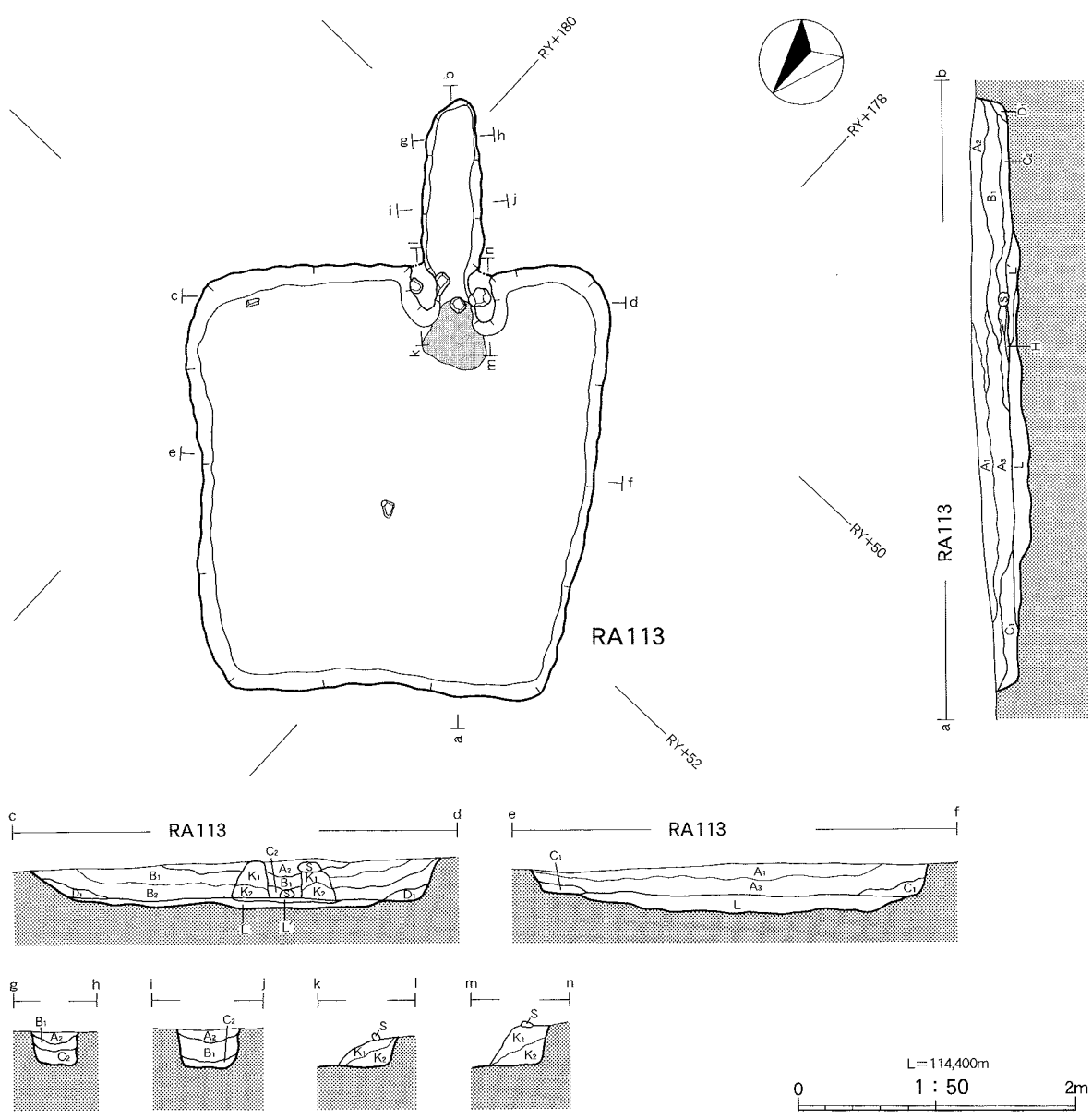
第32図 町田遺跡全体図



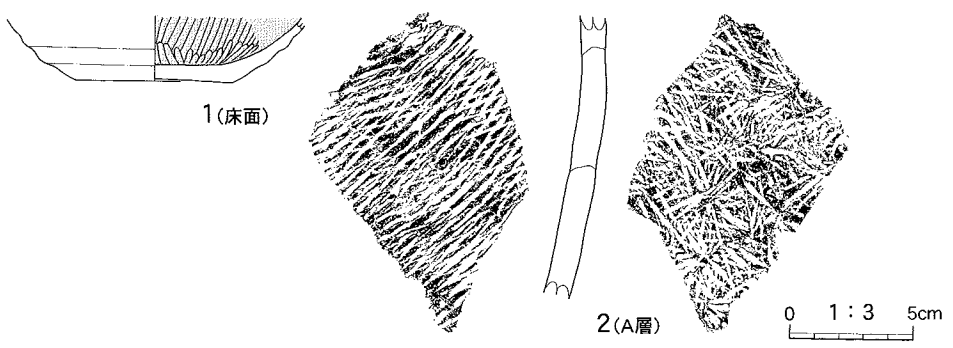
第33図 町田遺跡第10次調査全体図

厚さは0.02～0.09 mをはかる。

出土遺物 遺物は、土師器・須恵器・あかやき土器の坏・甕・大甕・長頸瓶などの破片が出土しているが、全体に小破片が多い。第3図1は内面に黒色処理を施した土師器の坏で、内面がいうミガキ調整され、底部は糸切り無調整である。2は須恵器の大甕の体部破片で、外面に平行タタキ文、内面に当て（蓮藕文）の具痕がみられる。



第34図 RA113竪穴住居跡



第35図 RA113竪穴住居跡出土遺物

(2) 第11次調査

位置 第11次調査区は、遺跡の南東部に位置し、前述した第10次調査区の北東約50m、県道の西側に隣接した地点である。

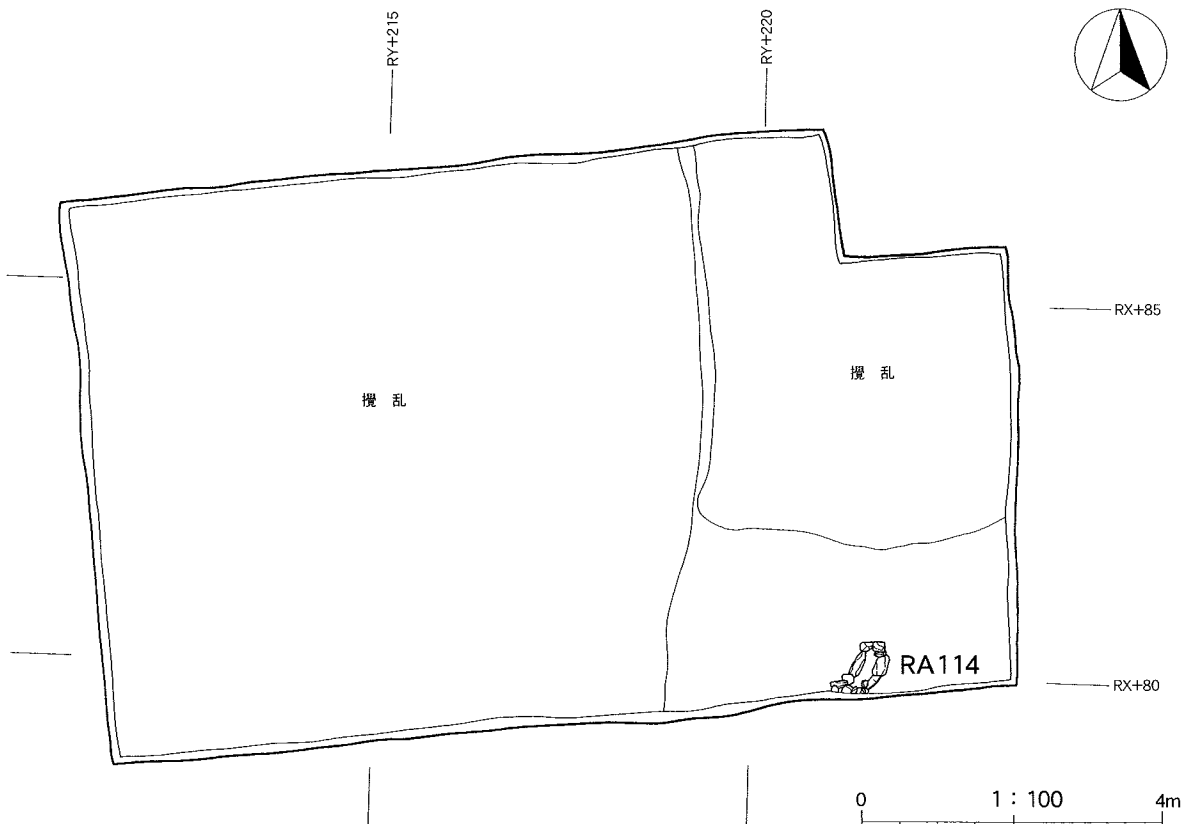
調査区は、南側に若干傾斜する地形上にあり、当遺跡内で標高が最も高く、県道旧国道396号線を挟んで東の松長根遺跡に接している。遺構検出面は黒～黒褐色土であるが、調査区内の大部分が攪乱されており、検出遺構は、竪穴住居跡1棟の煙道だけである(第36図)。

RA114 竪穴住居跡 (第37図)

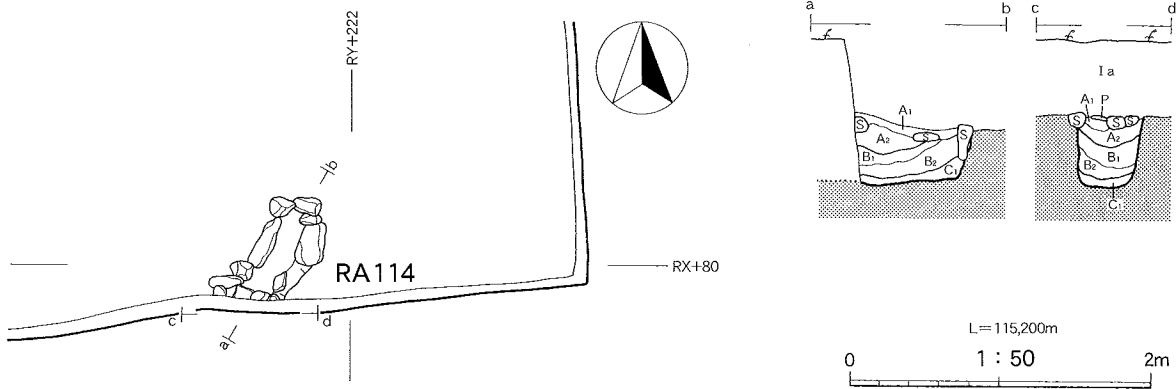
煙道 調査区の南東隅に煙道の一部を検出した。煙道は溝状で、壁面上部に拳～人頭大の礫を列べている。底面は平坦である。調査区内での煙道の長さは0.8m、幅約0.4m、検出面からの深さ約0.35mをはかる。

埋土 埋土は自然堆積で、大きくA～C層に大別される。A層は黒～黒褐色土主体で褐色土を粒状に含み、炭化物・焼土が粒状に混じる。B層は、黒褐～暗褐色土主体で褐色～黄褐色土を塊状に多く含む。C層は黒褐～暗褐色土主体で炭化物・焼土が粒状に混じる。

出土遺物 遺物は、土師器・須恵器・あかやき土器の坏・甕の破片が出土しているが、小破片が多い。第38図1は検出面より出土したあかやき土器の坏で、底部は糸切り無調整である。



第36図 町田遺跡第11次調査全体図



第37図 RA114竪穴住居跡



第38図 RA114竪穴住居跡出土遺物

(3) 第12次調査

位置 第12次調査区は、遺跡の北東部に位置し、県道より西側約50mの地点にある。調査区の南約15mの地点には、平成8年度実施の第5次調査区、平成10年度実施の第9次調査区が位置し、縄文時代後期の遺物包含層や平安時代の竪穴住居跡などが検出されている。

調査区は北西に若干傾斜する地形上にあり、遺構検出面は砂礫及び褐色土である。検出遺構は、土坑2基、ピット1口、遺物包含層2ヶ所である(第39図)。

R D 001 土坑 (第40図)

規模 調査区の南側中央に検出したささえである。、平面形は楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸0.9m、検出面からの深さ0.3mをはかる。壁はゆるやかに立ち上がり、底面はやや丸底ぎみである。

埋土 埋土は自然堆積と考えられ、黒～黒褐色土が主体である。

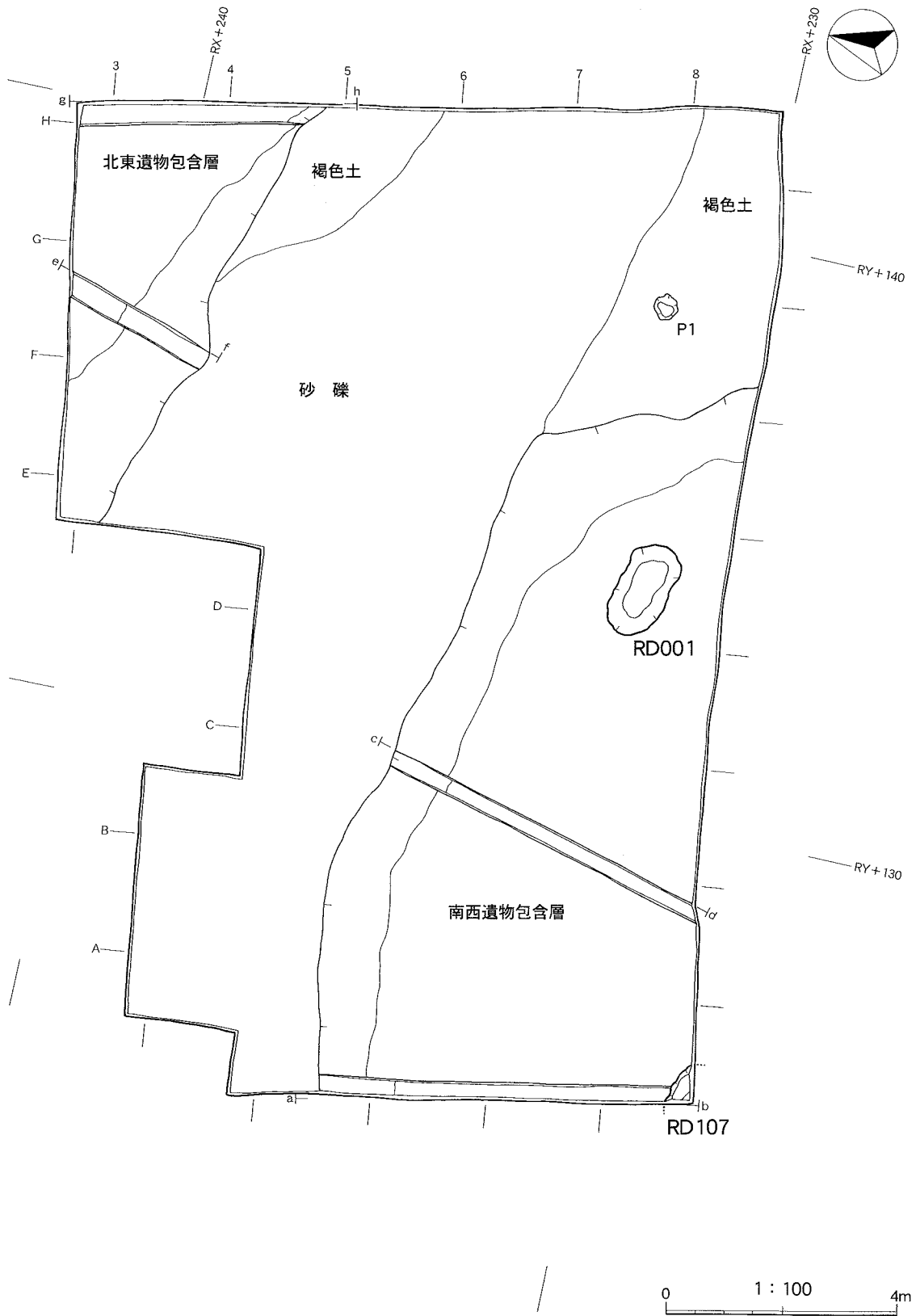
出土遺物 遺物は、埋土から弥生時代後期の土器片と削器・剥片などが出土した。第42図3・4・7は附加条縄文が羽状に施文された体部破片、10は削器で、石材は鉄石英である。

R D 107 土坑 (第40図)

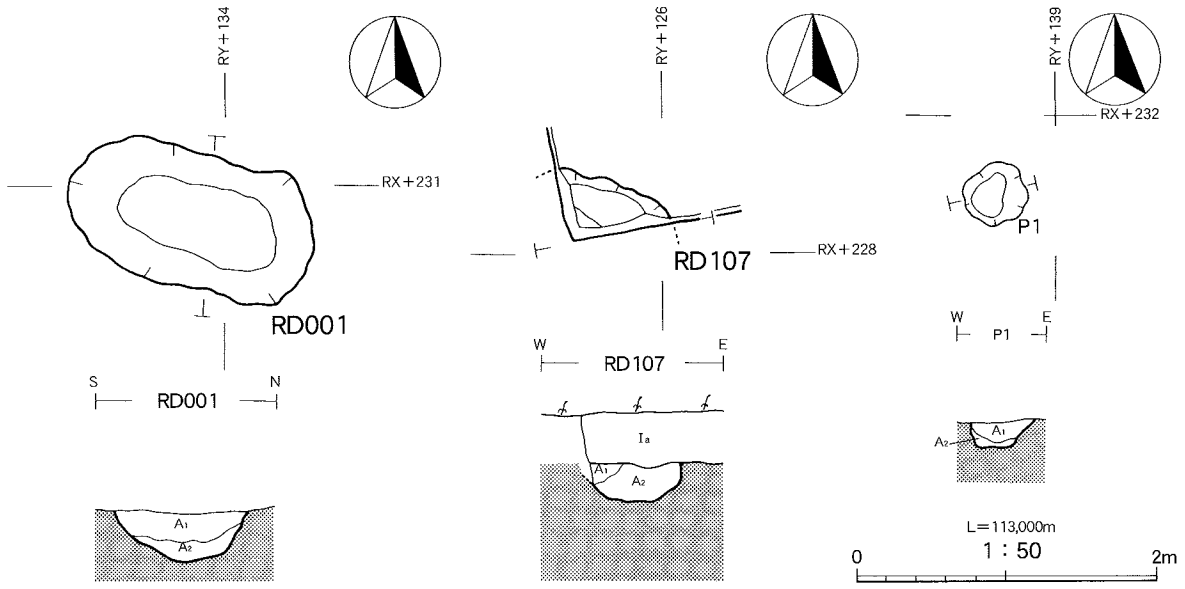
規模 調査区の南西隅に検出し、西側と南側は調査区の外に広がるが、平面形は楕円形または溝状と考えられる。長軸0.8m以上、短軸0.34m以上で検出面からの深さは約0.25mをはかる。

埋土 埋土は自然堆積と考えられ、赤褐色焼土が主体である。

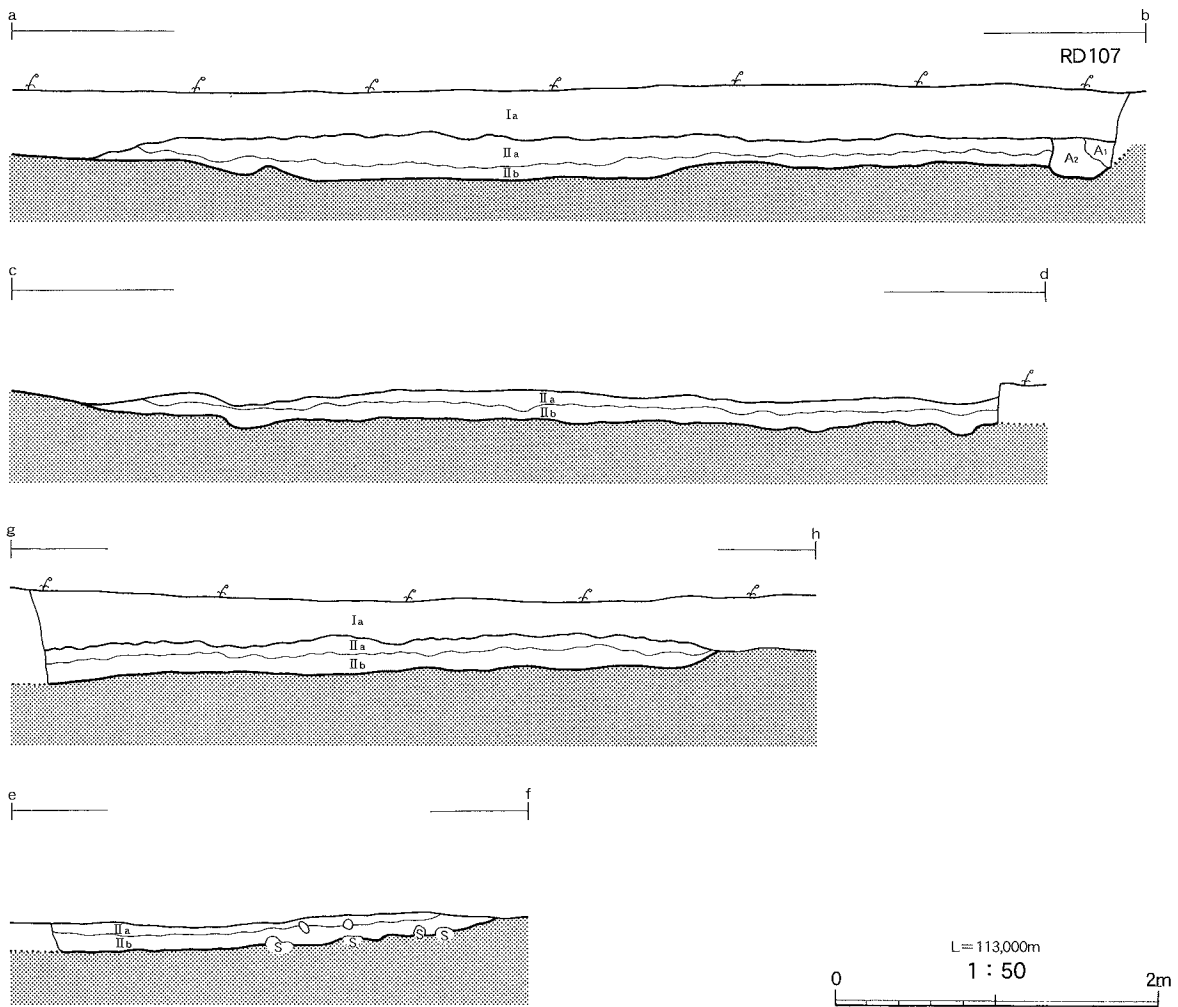
出土遺物 遺物は埋土より土師器・あかやき土器の坏・甕の破片が少量出土している。第42図9はあかやき土器の甕である。



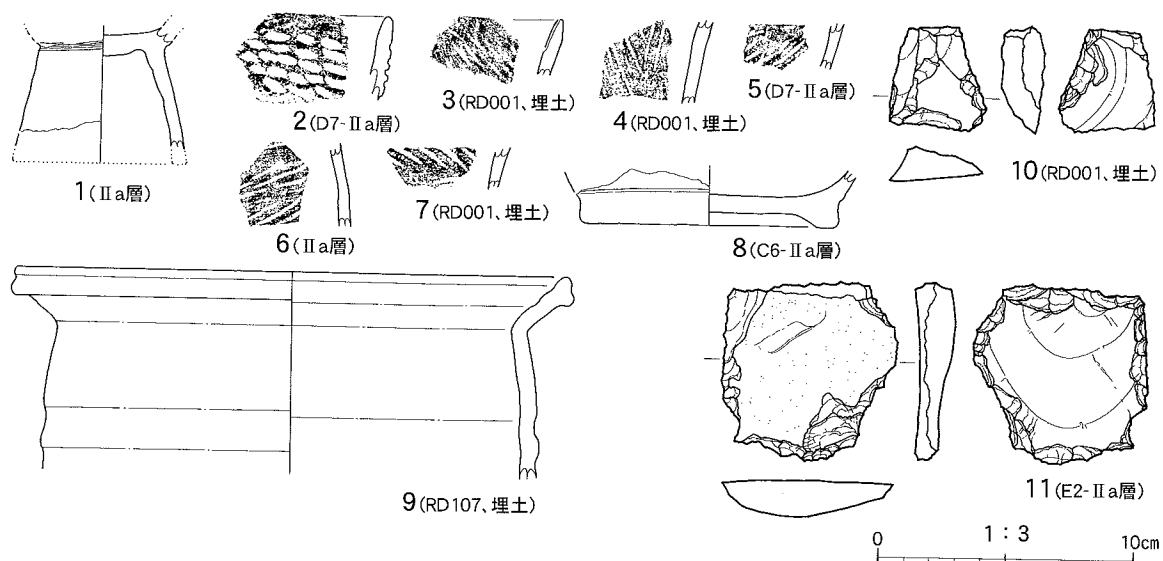
第39図 町田遺跡第12次調査全体図



第40図 RD001・107土坑、ピット



第41図 遺物包含層土層断面



第42図 RD001・107土坑・遺物包含層出土遺物

ピット（第40図）

調査区南東部にピット1口を検出した。径約0.4mで検出面からの深さは0.15mをはかる。出土遺物はない。

遺物包含層（第39・41図）

位置 調査区の北東部と南西部に遺物包含層の広がりを検出した。遺物が出土するのはIIa層上部からのみで、南西包含層からの出土が多く、北東包含層からの出土は少ない。層相は、褐色土を粉～粒状に含む黒～黒褐色土で、小礫が少し混じる。縄文時代晩期初頭と弥生時代後期の土器片、削器、剥片などが出土しているが、第42図1は縄文時代晩期初頭の台付鉢形土器の台部と考えられ、外面はミガキ調整がされている。2・5・6・8は弥生時代後期の土器片と考えられ、2は刺突文が施文された口縁部破片、5・6は附加条縄文が施文された体部破片、8は底部で上げ底となっている。11は削器で、石材は頁岩である。

3. 調査のまとめ

第10～12次調査において、前述のような遺構・遺物が確認された。

平安時代 第10・11次調査で検出されたRA113・114 竪穴住居跡は、出土遺物から平安時代、9世紀後半の年代が与えられる。また第12次調査で検出されたRD107土坑は、埋土が焼土主体であることから、平安時代の竪穴住居跡の煙道の一部である可能性がある。町田遺跡では、平安時代の遺構が最も多く確認されているが、各調査区が狭く散在しているため、集落の全体像の把握には調査例の蓄積が必要である。

弥生時代 第12次調査で検出されたRD001土坑は、赤穴式期の特徴を持つ弥生土器片が出土しており、楕円形の平面プランを持つことから弥生時代後期の土坑墓である可能性が考えられる。市内で該期の遺構例は少なく、貴重な成果といえる。

IV. 竹鼻遺跡第 11 次発掘調査

竹鼻遺跡（第1次調査）

1. 遺跡の環境

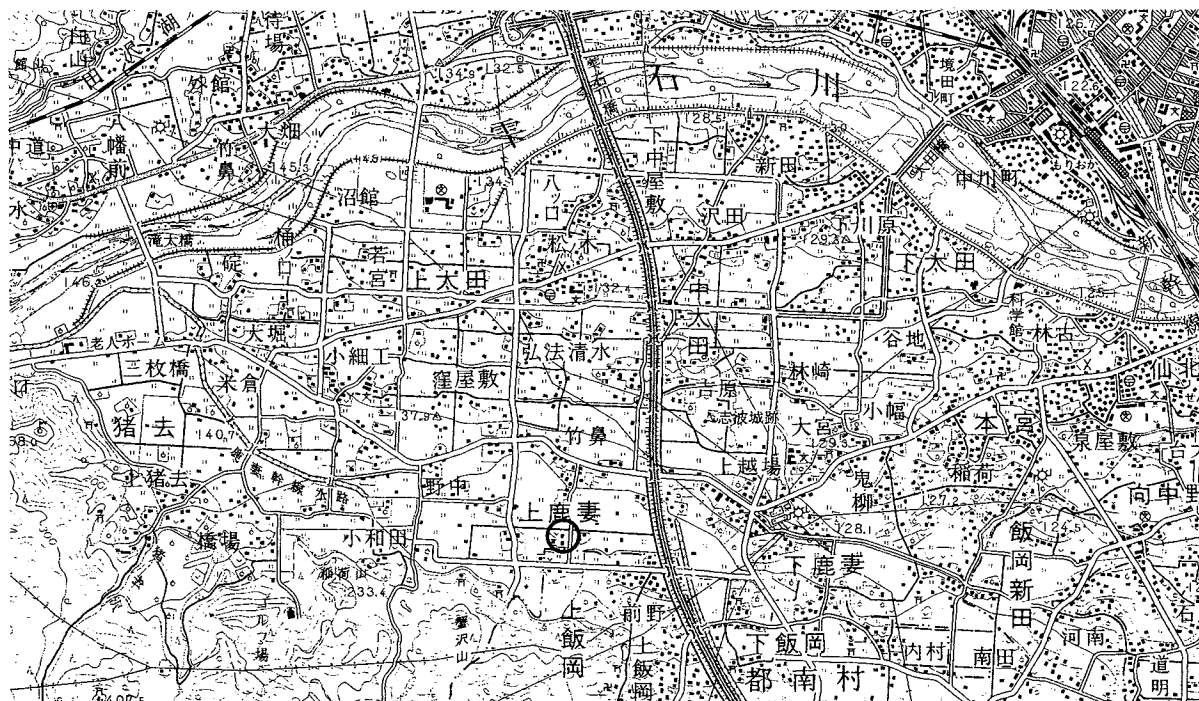
(1) 遺跡の地形と位置

遺跡の位置 竹鼻遺跡は、盛岡市中心部から南西に約4 Km、志波城跡より南西に約1 kmの上鹿妻・上飯岡地内に所在する（第43図）。遺跡の範囲は、東西600m、南北450mほどの規模と推定される。東側と南側は旧河道に画され、北側と西側の遺跡範囲は明確ではない。現況は住宅や水田、畑、果樹園を主体とした農地が広がる。

遺跡の地形 雫石川は奥羽山脈より東流し、雫石盆地を形成する。さらに東進し、烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦付近（北の浦狭窄部）で急激に流路が狭められる。その流れは、雫石川北岸に発達する滝沢台地南縁下の低地に流路が求められ、特に流路の転換が著しい雫石川中・下流域では沖積段丘を形成・浸食を繰り返して現在に至る地形が形成される。

南には南北に連なる東根山山地が控え、岩帯に含まれるオパール・玉髄・頁岩などは沢沿いの露頭などから容易に採集することができる。そのため、繫・猪去・飯岡地区の縄文時代遺跡からは多量の石器（未製品・フレイク・チップを含む）が出土する。

竹鼻遺跡は雫石川南岸の沖積段丘（第44図）に立地し、周囲には雫石川の旧河道が巡る。地形的には志波城跡が立地する段丘と同一面であったのが、雫石川の移動による浸食で中州状の外観を呈するようになったものと考えられる。



第43図 竹鼻遺跡の位置（1：50,000）

(2) 歴史的環境

雫石川によって形成された沖積段丘上には、竹鼻遺跡を含む古墳時代末～平安時代を中心とした遺跡が数多く分布する。志波城跡、新堰端遺跡などで縄文・弥生時代の遺物が確認されているが遺跡の主体を占めるものではない。

奈良時代、8世紀代に入ると志波城跡内の吉原地区、台太郎遺跡、百目木遺跡、竹鼻遺跡など多数の集落が増加する傾向にある。竹鼻遺跡より北西約2km離れた地区には太田蝦夷森古墳群が位置する。

平安時代、9～10世紀代になると志波城（803年）、徳丹城（813年頃）が造営される。志波城・徳丹城の造営は地域社会に与える影響も大きかったと思われ、古墳群の造営の停止、集落数の増加などがみとめられる。9世紀後半になると、耕地の拡大のためか集落の立地はそれまでよりも高位置にも拡大し、住居数も多くなる。

2. 調査経過

(1) これまでの調査

竹鼻遺跡は、旧都南村教育委員会では中村遺跡。盛岡市教育委員会では竹鼻遺跡の名称とともに別個の古代の集落遺跡としていた。しかしながら、合併に伴う調査の進展により同一遺跡として扱うこととした。

第1次調査 本格的な発掘調査は平成8年度の防火水槽設置に伴う事前調査にはじまっている。調査区は遺跡の北部に位置しており、奈良時代の竪穴住居跡5棟、土坑2基、溝跡1条、柱穴4口、平安時代以降の溝跡1条を検出した。

第2次調査 第2次調査区は遺跡の南端に位置しており、砂利採取に伴う遺構確認の試掘調査を実施した。遺構は検出されず、土師器小片が2点出土したほか、旧河道が確認されている。

第3次調査 第3次調査区は、第2次調査区の北側に位置し個人住宅新築に伴う遺構確認の試掘調査を実施し、竪穴住居跡1棟を検出し、引き続き遺構の精査を行っている。

第4次調査 第4次調査区は遺跡の西部に位置しており、個人住宅と農作業小屋の新築に伴う事前調査を実施し、奈良時代の竪穴住居跡5棟、溝跡4条、土坑12基を検出した。竪穴住居跡の1棟については、大半が調査区外に広がるため現状保存措置をとった。土坑は小判形を呈し、土坑内からは甕口縁部、頸部に鋸歯文を描き、さらに朱彩する土師器甕が出土している。また調査区の北西端からは円形周溝が検出されている。

第5次調査 第5次調査区は遺跡の東部に位置し、砂利採取に伴う遺構確認の事前調査を実施した。その結果、竪穴住居跡4棟、土坑2基、溝跡1条を検出し、調査区内は現状保存措置とした。

第6次調査 砂利採取に伴う遺構確認調査を実施した。第5次調査同様に竪穴住居跡等を検出し、現状保存措置とした。

第7次調査 第7次調査区は、遺跡中央に位置し、個人住宅改築に伴う事前調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。



第45図 竹鼻遺跡全体図

第8次調査 第8次調査区は遺跡の東端に位置しており、砂利採取に伴う遺構確認調査を実施したが、旧河道や礫層を検出し、土師器の小破片数点が出土したのみで、遺構は確認されなかった。

第9次調査 第9次調査区は遺跡の中央南半部に位置し、砂利採取に伴う遺構確認調査を実施し、竪穴住居跡8棟、溝跡2条、遺物包含層を検出した。調査区南端は旧河道になる。

第10次調査 第10次調査区は遺跡の南東端に位置し、砂利採取に伴う事前の遺構確認調査を実施したが、調査区の北端で礫層、中央で旧河道を検出し、遺構・遺物は検出されなかった。

これまでの調査の結果、奈良時代の遺構は遺跡の中央から西部と東端付近に多く見つかっており、遺跡の南端部は旧河道が入る低い地形であった。しかし遺跡の北端と西端については、遺跡の範囲が明確でなく調査の蓄積が必要である。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	上鹿妻字寺地6番43	防火水槽	140	96.10.8 96.10.14	奈良時代の竪穴住居跡5棟、土坑2基、溝跡1条、柱穴4口、平安時代以降の溝跡1条
試2	上飯岡22地割79、80	砂利採取	374	96.12.20	遺構なし、土師器2点
試3	上飯岡	住宅新築	160	96.01.14	奈良時代の竪穴住居跡を検出。翌年度本調査実施
3	上飯岡	住宅新築	160	97.4.6 97.4.8	奈良時代の竪穴住居跡1棟
試4	上飯岡23地割15-1	住宅、農作業小屋新築	392	97.4.9 97.4.10	奈良時代の竪穴住居跡を検出。本調査実施
4	上飯岡23地割15-1	住宅増築	392	97.5.23 97.6.6	奈良時代の竪穴住居跡5棟、土坑12基、溝跡4条
試5	上鹿妻字夜鷹11番13	砂利採取	580	97.1.14	竪穴住居跡4棟、土坑2基、溝跡1条 開発取りやめ
試6	上鹿妻字夜鷹14番18	砂利採取	394	98.1.23	竪穴住居跡を検出。開発取りやめ。
試7	上鹿妻字寺地41番1	住宅、農作業小屋新築	94	98.4.13	遺構・遺物なし
試8	上鹿妻字夜鷹22番	砂利採取	440	98.7.3	遺構なし、土師器数点
試9	上飯岡字中村 22番、82番	砂利採取	360	98.11.9	竪穴住居跡8棟、溝跡2条、旧河道（遺物包含層）を検出。開発取りやめ。
試10	上飯岡51、52、53	砂利採取	250	98.11.20	遺構・遺物なし
11	上飯岡23-13-2 13-1、13-3	住宅改築	138	99.7.12 99.7.28	奈良時代の竪穴住居跡2棟 平安時代の竪穴住居跡2棟

竹鼻遺跡調査成果

(2) 平成 11 年度の調査

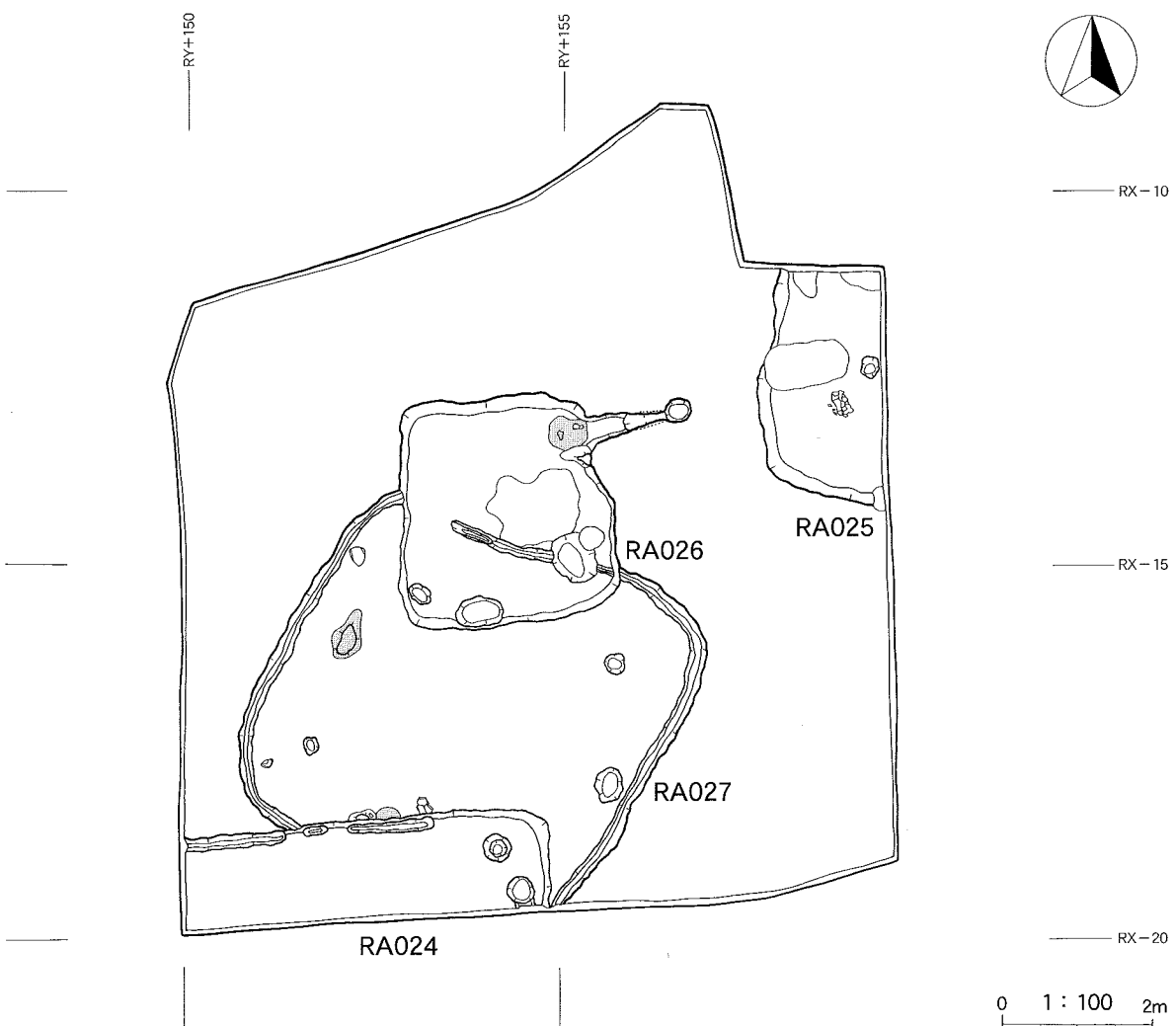
調査区の位置 第 11 次調査は、個人住宅改築に伴う事前調査である。調査区は平成 9 年に実施した第 4 次調査区の西に位置する。

事前の試掘調査を実施した結果、表土下約 40cm より褐色のシルト層が確認され、シルト層上面より竪穴住居跡・土師器破片が検出されたことから、建築申請範囲全域の発掘調査に切り替え、精査を行ったものである。

検出された遺構は、古墳～奈良時代の竪穴住居跡 2 棟、平安時代の竪穴住居跡 2 棟である。また、表土および検出面より奈良時代・平安時代の土師器、須恵器などが出土している。

遺構検出作業は褐色シルト層上面で行われた。漸移層となる暗褐色土層は耕作や現代の建物などの攪乱が激しく、僅かに確認されたのみである。

低地との境となる調査区北側は、水田耕作などで削平されており、褐色シルト層上面は水浸けの状態であったためか粘質化していた。表土除去作業の際、遺構検出面となる褐色シルト層を一部掘削してしまっている。調査区内はほぼ平坦な地形で、標高は 132.00 m 前後である。

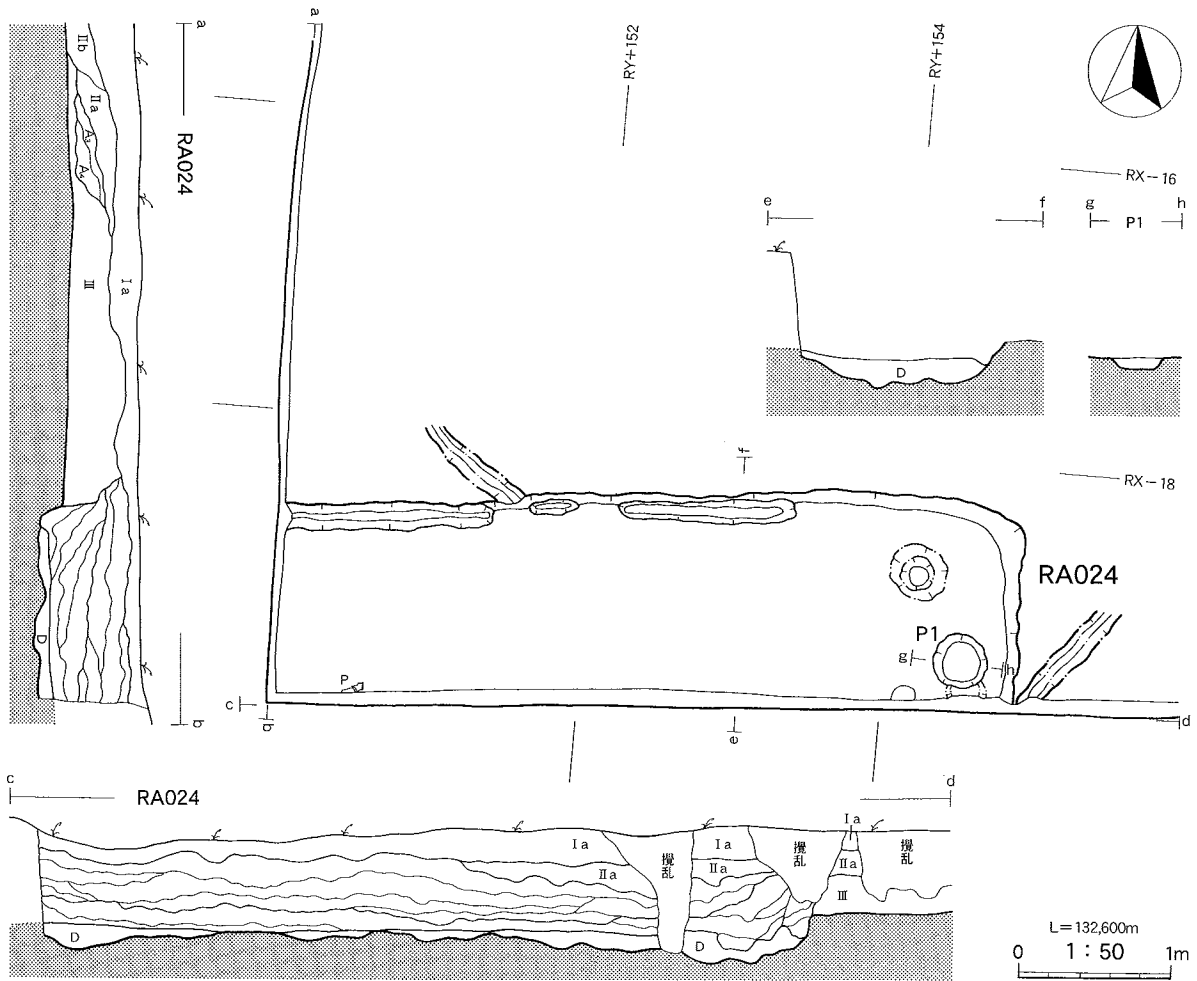


第46図 竹鼻遺跡第11次調査全体図

3. 古代の遺構、遺物

RA 024 竪穴住居跡 (第 47 図)

位置 調査区南端部 平面形 方形 規模 東西 4.85 m以上・南北 1.3 m以上
 重複関係 RA 027 竪穴住居跡を切る。 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 埋土 自然堆積で、層相の違いによりA～Dの4層に大別される。A層は、黒色土を主体とする。B層は褐～暗褐色土を主体に、褐色土を粉状に含む。C層は褐色土を主体とする。床面構築土D層は暗褐色～褐色土を主体に、褐色土を粉状に含む。
 壁の状態 検出面から床面までの深さは0.07～0.13 mで、ほぼ直壁である。



第47図 RA024竪穴住居跡



第48図 RA024竪穴住居跡出土遺物

床の状態 床面はほぼ平坦である。北壁際の一部には幅が0.1～0.15 m、床面からの深さが0.01～0.05 mの周溝がめぐる。床面のほとんどには褐色土に暗褐色土を粉状に含む構築土が確認される。なお、構築面の底面は褐色土である。構築土の厚さは0.1 m前後である。 **かまど** 不明

ピット 床面上より1口（P 1）検出されている。直径は0.32m、床面からの深さは0.08mをはかる。

出土遺物（第48図1～2） 1は回転糸切り無調整のあかやき土器坏で、2は回転糸切り後に体部下半にヘラケズリ調整を施す土師器坏である。内面には黒色処理され、ヘラミガキ調整が施される。

RA 025 竪穴住居跡（第49図）

位置 調査区北東端 **平面形** 方形 **規模** 東西1.55 m以上・南北3.09 m以上。

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** 褐色シルト層上面

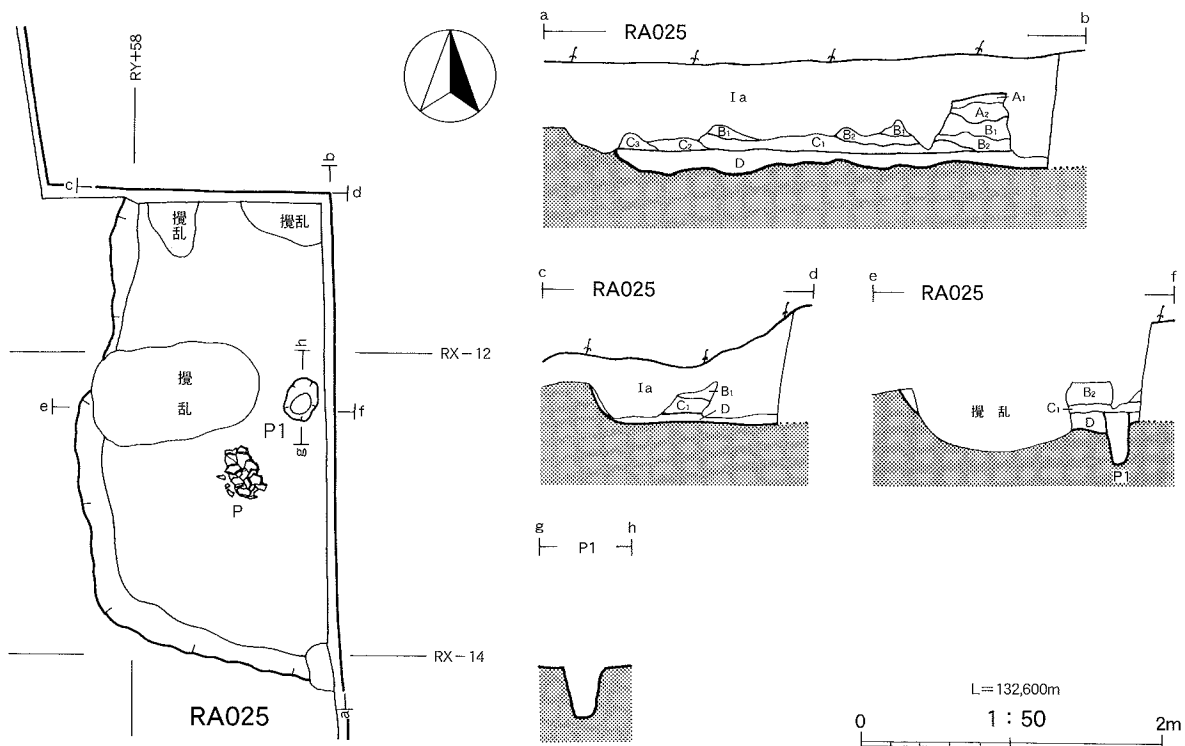
埋土 自然堆積で、層相の違いによりA～Dの4層に大別される。A層は、黒色土を主体とする。B層は褐～暗褐色土を主体に褐色土を粒状に含む。C層は褐色土を主体とする。床面構築土D層は黒褐色～褐色土を主体に、褐色土を粒状に含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.08～0.24 mで、やや外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で、構築土は暗褐色土に褐色土を含む土である。構築土の厚さは0.05～0.14 mをはかる。

かまど 不明 **ピット** 床面上に1口（P 1）検出した。住居南西側の支柱穴と思われる。平面形は楕円形で、長径0.27 m、短径0.2 m、床面からの深さは0.35mをはかる。

出土遺物（第51図1） 1は土師器甕である。器高29.0cm、口径21.4cm、体部最大径19.2cm、底部径7.3cmをはかり、最大径が口縁部にある。体部から底部にかけて緩やかな膨らみを持ち、底面付近で窄まる。頸部にわずかに段が見られ、底面は外方に若干張り出す。口縁部は内外面ともにヨコナデ、内面はハケメ調整、外面は粗いハケメによる調整が施されるものである。



第49図 RA025竪穴住居跡

RA 026 竪穴住居跡 (第 50 図)

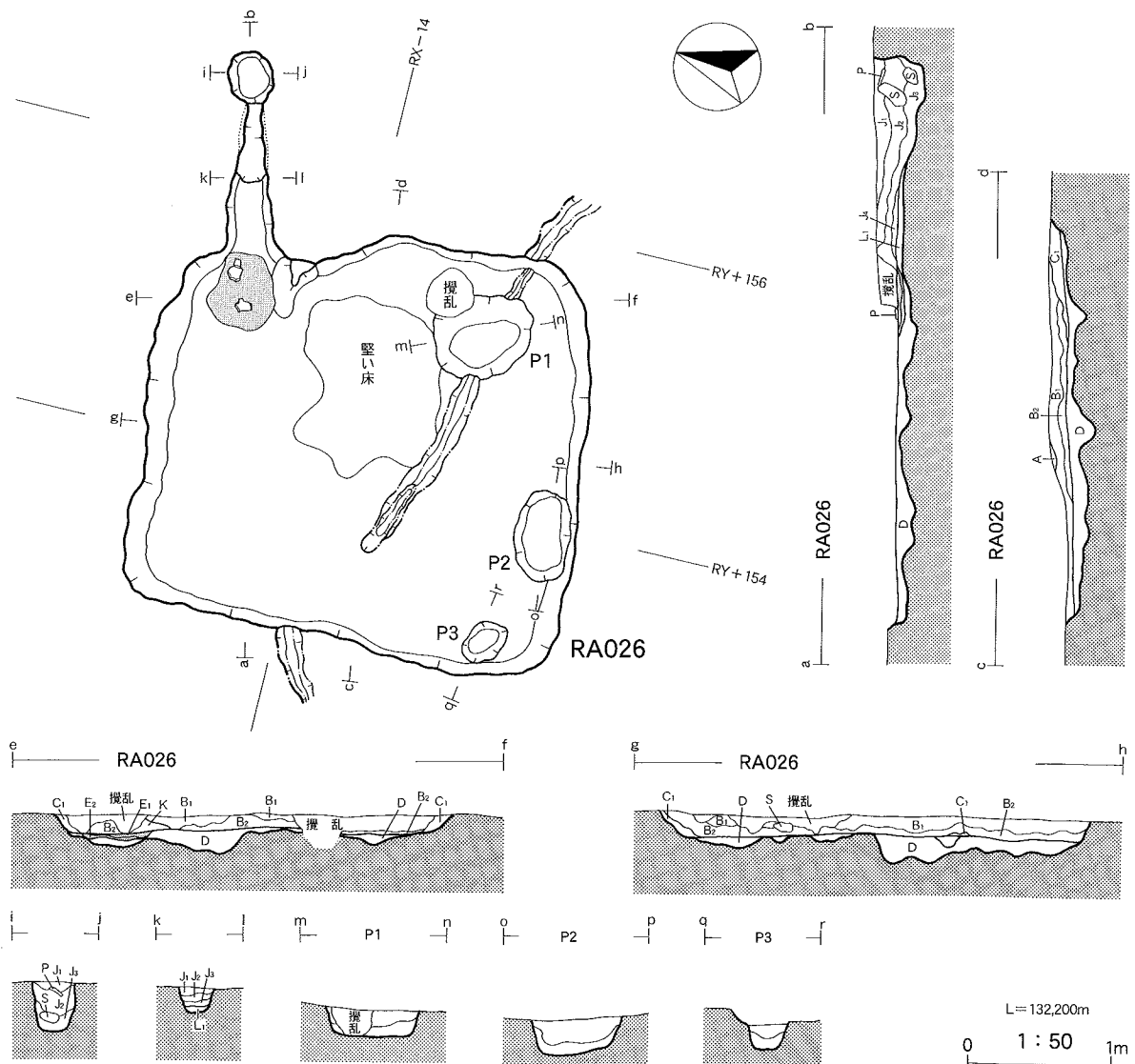
位置 調査区中央 平面形 方形 主軸方向 E 13° N 規模 東西 2.85 m、南北 3.0 m

重複関係 RA 024 竪穴住居跡を切る。 掘込面 削平 検出面 削平

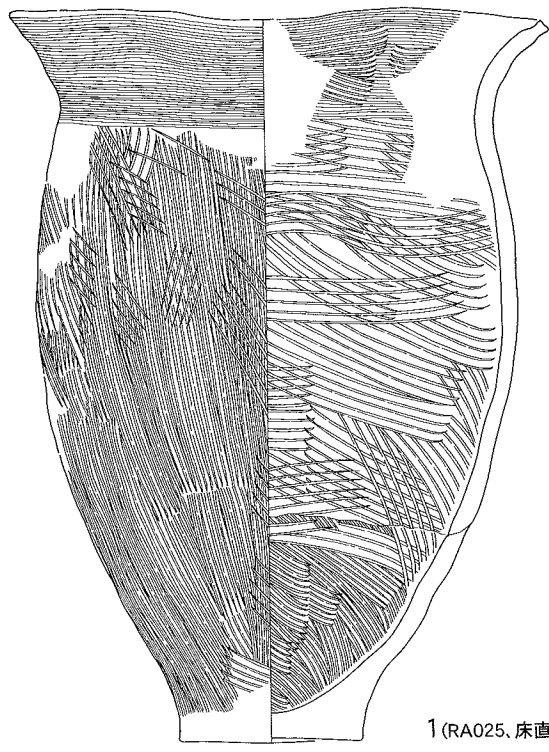
埋土 自然堆積で、層相の違いによりA～Dの4層に大別される。A層は、黒色土を主体としている。B層は褐～暗褐色土を主体に、褐色土を粒状に含む。C層は褐色土を主体とする。床面構築土D層は褐色土を主体に、暗褐色土を粉状に含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.09～0.25 mで、壁は外傾して立ち上がる。

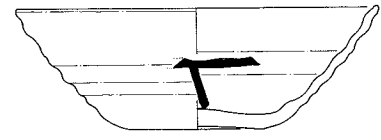
床の状態 床面はほぼ平坦である。構築土は暗褐色土を主体に褐色土を粒状に含むものである。床面中央東寄りに堅い面がある。



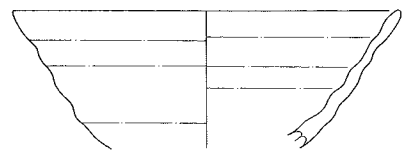
第50図 RA026竪穴住居跡



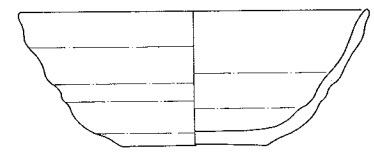
1 (RA025, 床直)



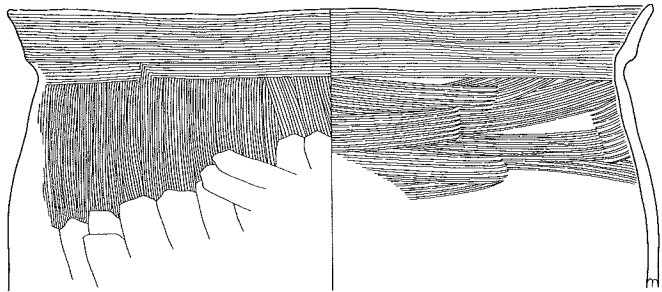
2 (RA026, B~C層)



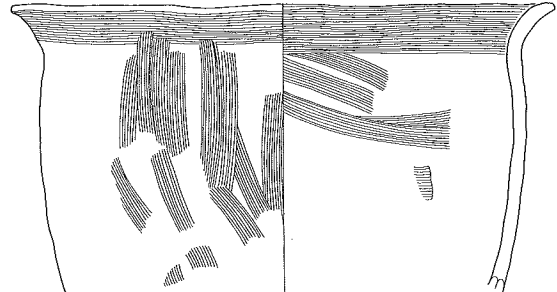
3 (RA026, B₂層)



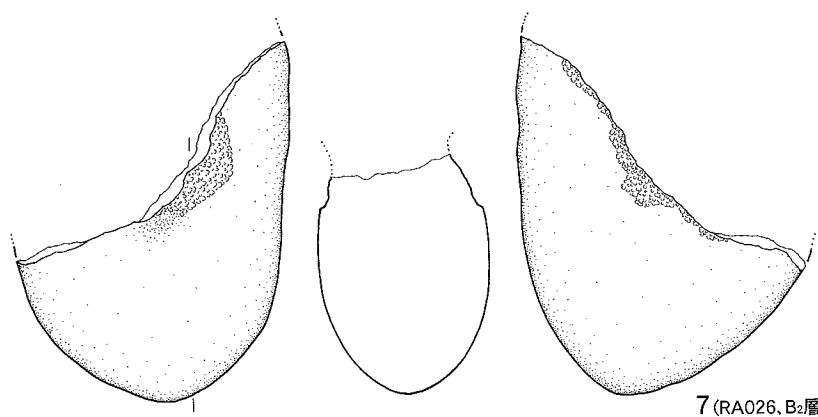
4 (RA026, 攪乱)



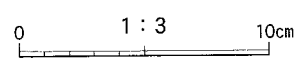
5 (RA026, かまどJ層)



6 (RA026, 火床面)



7 (RA026, B₂層)



第51図 RA025、026竪穴住居跡出土遺物

かまど 東辺北寄りに検出。煙道の平面形は溝状を呈し、底面は火床面から徐々に深くなり、煙出し底面が最も深くなる。規模は、東壁から煙出し先端までの長さ 1.4 m、幅 0.1 ~ 0.46 m、検出面から平坦面までの深さは 0.09 ~ 0.34 m である。かまどそでは攪乱を受け、僅かに基部が残るのみである。

火床面は長径 0.55 m、短径 0.5 m の不整楕円形で焼けている。浸透層の厚さは約 0.1 m である。かまど地業（L 層）は煙道中程にのみ見られ、褐色土に暗褐色土が混入しており、0.05 m ほどの厚さである。かまど崩壊土（J 層）は褐色土を主体に炭化物粒や暗褐色土を含む。煙出し内堆積土には部材として使われていたと思われる石が混入している。煙出しの平面形は楕円形で、長径 0.45 m、短径 0.3 m、煙出しの検出面からの深さは 0.38 m ほどで、中央部がもっとも深くなる。

ピット 床面より 3 口（P₁ ~ P₃）検出されている。P₁ は長径が 0.7 m、短径が 0.55 m、深さ 0.25 m。P₂ は南壁中央直下に検出され、長径 0.60 m、短径 0.30 m、深さ 0.25 m をはかる。P₃ は直径 0.27 m、深さ 0.19 m をはかる。

出土遺物（第 51 図 2 ~ 8） 2 は須恵器坏でおおよそ 2/3 残存している。底面は回転糸切り後ヘラケズリを施し、坏体部には墨書が認められる。墨書部分の大半は欠損しており、判読はできない。3 はあかやき土器坏で、埋土中から出土している。口縁から体部まで 1/4 ほど残存している。4 もあかやき土器坏で、ほぼ完形である。内面には煤が付着する。

甕 5 はかまど堆積土層内から出土した土師器の甕である。口縁から体部中央まで 1/4 残存している。口縁部は内外面ヨコナデ、外面は口縁から下にヘラナデ後にヘラケズリ、内面はハケメの調整が施されている。胎土には直径 2 ~ 5 mm ほどの砂粒を多く含む。6 はかまど火床面から出土した土師器の甕である。口縁部から体部下半まで約 1/4 残存している。口縁は内外面ともにヨコナデ、口縁部から下の内面はヘラナデ、外面はハケメが施されている。胎土には直径 2 ~ 5 mm ほどの砂粒を多く含む。7 は凹み石である。中央付近に殴打痕がみとめられる。

R A 027 竪穴住居跡（第 52 図）

位置 調査区中央部 **平面形** 方形と思われる。 **主軸方向** S 30° E

規模 東西 5.14 m ・ 南北 4.7 m 以上。 **重複関係** R A 024 ・ 026 竪穴住居跡に切られる。

掘込面 削平 **検出面** 褐色土層上面

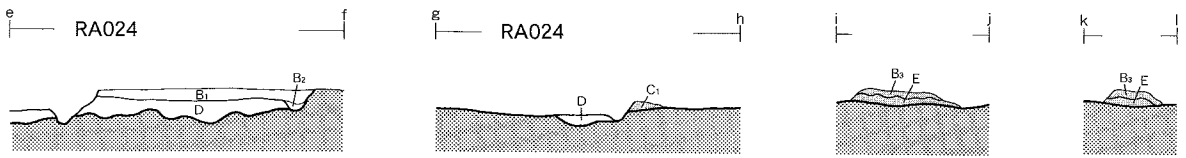
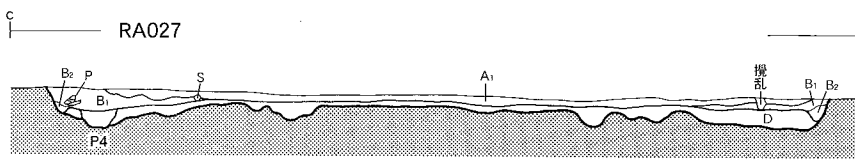
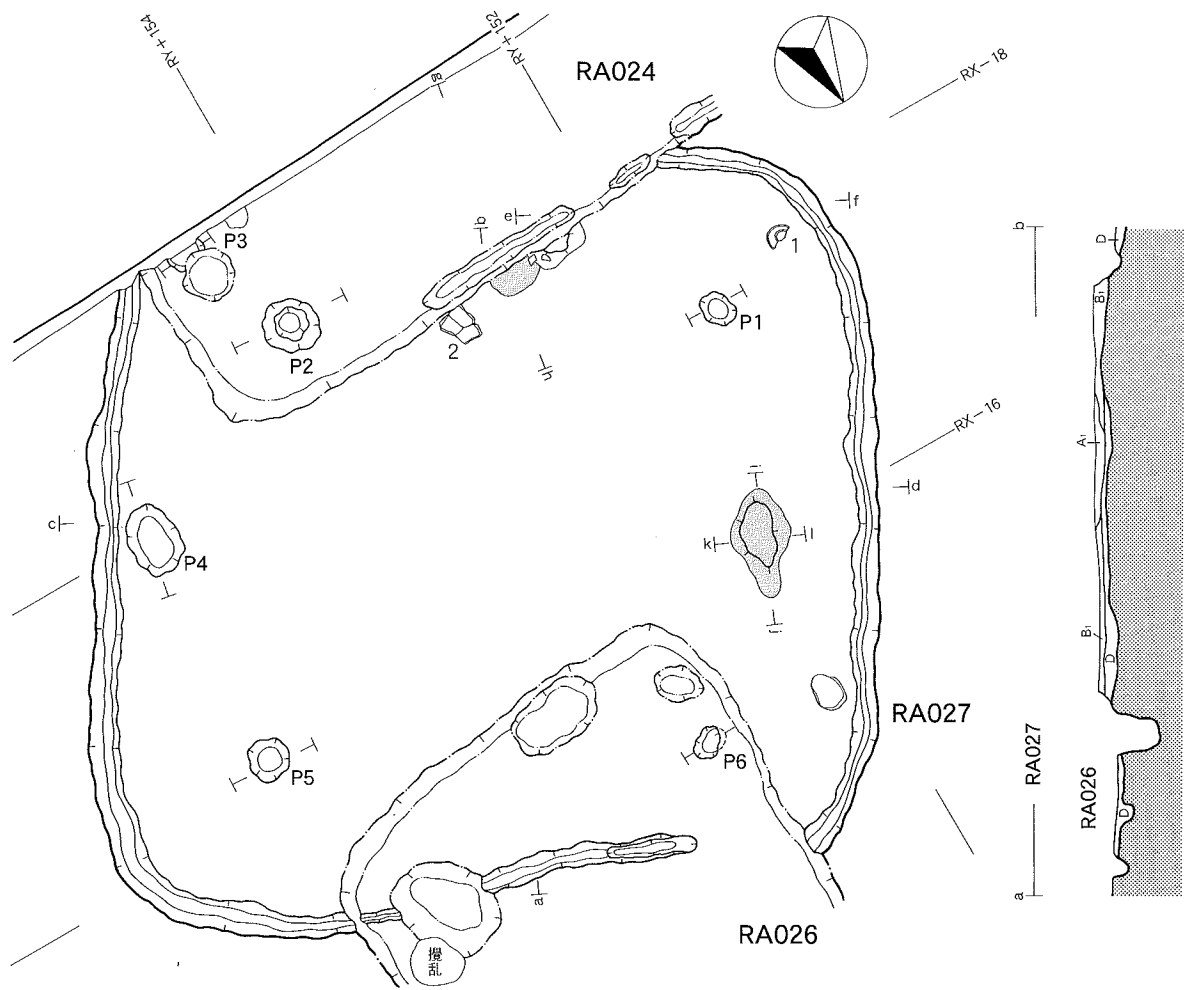
埋土 自然堆積で、層相の違いにより A ~ E の 5 層に大別される。A 層は、黒褐 ~ 黒色土を主体としている。B 層は褐 ~ 暗褐色土を主体に、褐色土を粒状に含む。C 層は暗褐 ~ 褐色土を主体とする。D 層は褐色土を主体に、暗褐色土を粉状に含む。E 層は焼土の層で、床面の一部に確認されている。

壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.01 ~ 0.15 m で、壁は外傾して立ち上がる。

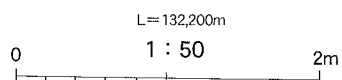
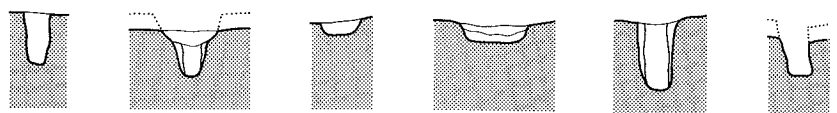
床の状態 床面はほぼ平坦である。壁際には幅 0.1 ~ 0.22 m、床面からの深さ 0.02 ~ 0.09 m の周溝が巡る。床は褐色土に暗褐色土を粉状に含む構築土上である。構築土の厚さは 0.02 ~ 0.12 m をはかる。

かまど 不明 **ピット** 床面より 5 口（P 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6）検出した。P 1 ・ 2 ・ 5 ・ 6 はその位置、規模などから支柱穴を構成するものと思われる。

出土遺物（第 53 図 1 ~ 9） 1 は、ロクロ未使用の土師器坏で体部下半から底部が残存している。内外面と坏もヘラミガキ調整され、内面は黒色処理が施される。なお外面体部下半に緩やかな稜が認められる。2 は土師器坏で、体部下半から底部まで約 1/3 が残存する。丸底と思われ、体部に緩やかな段を持ち、外面はヘラミガキ、内面は黒色処理の後、ヘラミガキが施されている。



— P1 — — P2 — — P3 — — P4 — — P5 — — P6 —



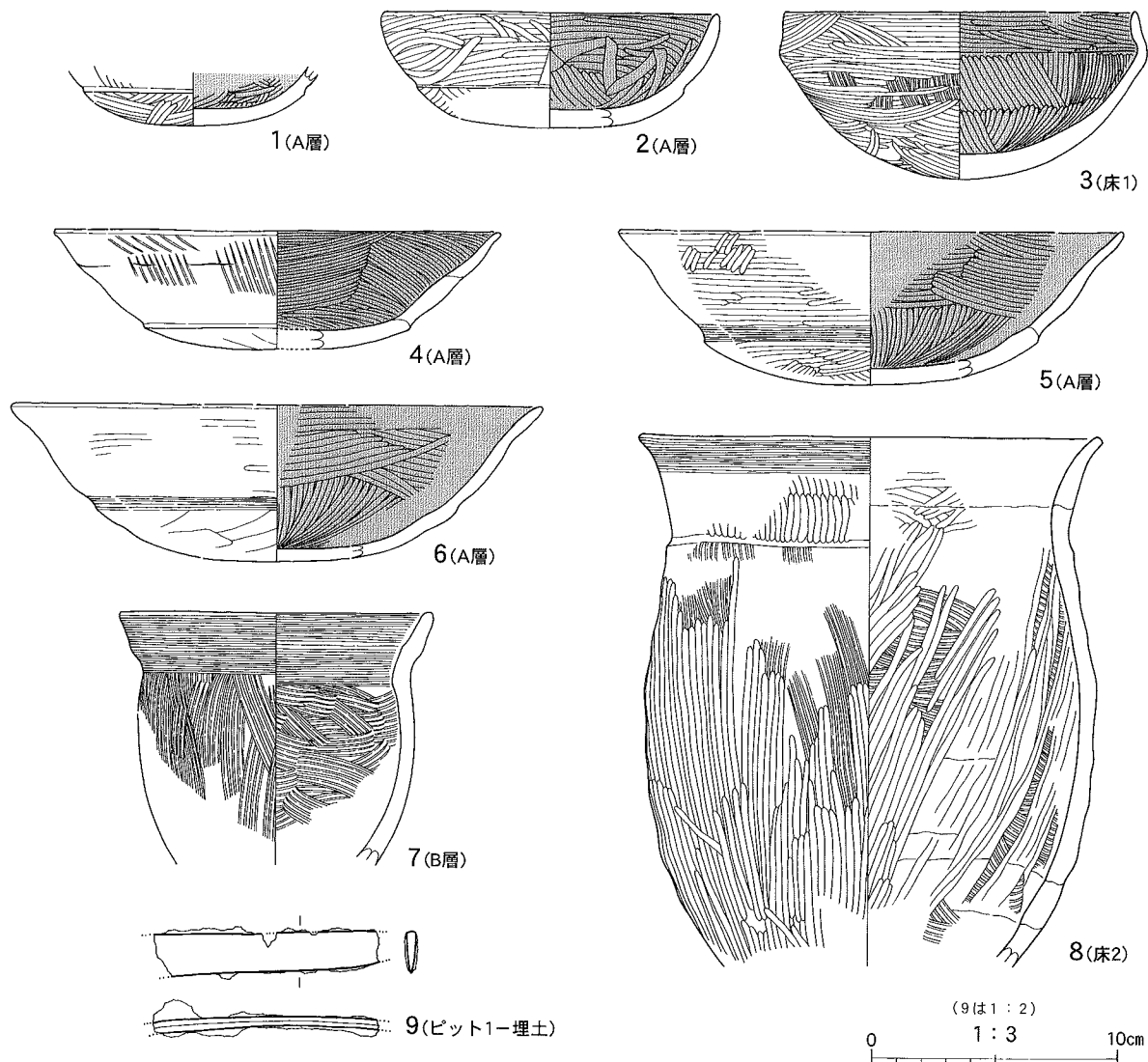
第52図 RA027竪穴住居跡

3は土師器坏?である。底部から体部までの約2/3までが残存する。外面は丸底で口縁部はすどく内傾する。ハケメ調整後ミガキ、内面には黒色処理、ヘラミガキが施される。4~6は土師器坏である。4はP1から出土し、約1/3が残存する。丸底で体部に段を持ち、外面はハケメ調整後ヘラミガキ、内面は黒色処理の後、ヘラミガキが施されている。5は約1/4が残存し、丸底で体部に段を持つ。内外面ともミガキ処理、内面は黒色処理が施される。6は1/4ほど残存し、外面に段を持つ。外面の体部上半はヘラミガキ、下半はヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている、

小形甕 7は土師器小形甕である。内外面とも口縁部はヨコナデ、体部はハケメ調整である。8は土師器甕である。口縁から体部まで口縁部外面はヨコナデ、体部は内外面ともハケメの後ミガキが施されている。

鉄製品 9は刀子である。長さ9cm、幅7cm、厚さ0.8cmが残存する。

その他 図示されていないが、床面より粘土塊が検出されている。粘土塊は灰白色をしており、集落の南側の段丘から運ばれたものと考えられ、住居の構築の際に使われた可能性がある。



第53図 RA027竪穴住居跡出土遺物

4. 調査のまとめ

今回の第11次調査において、検出した遺構は古墳時代末～奈良時代の竪穴住居跡2棟（R A 025・027 竪穴住居跡）と平安時代の竪穴住居跡2棟（R A 024・026 竪穴住居跡）である。

古墳時代～ R A 025・027 竪穴住居跡より出土した土器群は、甕・坏で構成される。R A 025 竪穴住居
奈良時代 跡からは、第51 図1 の甕が1 個体出土したものである。器形は長胴形を呈し、内外面にハケメによる調整が施され、底部内面が丸く、外面底部付近が突出するように造り出される特徴が見られる。

R A 027 竪穴住居跡からは甕2 個体・坏6 個体が出土している。床面直上およびB層より出土した第53 図3・7・8 以外の土器については埋土上位からの出土である。

R A 027 竪穴住居跡出土の坏は形状などから、大きく3 形態に分けられる。1・2 のように口縁～底部の中間に段が設けられ、口縁が内湾ぎみに外傾し、底部が平底に近い丸底を呈するもの。

3 のように底部が丸底を呈し、口縁が直角に立ち上がり、内外面にはミガキが施され、内面は黒色処理されるもの。4～6 は内外面に明瞭な段を有し、口縁部が直線的に外傾する坏である。

7 は小形甕で、口縁部が外反し、体部に緩やかな膨らみを持つ。体部内外面はハケメによる調整が施される。8 は体部下半に最大径を持つ甕である。内外面にハケメによる調整後に縦位方向のミガキが施されるものである。

上記した土器群について、1・2・4・5・6 は、7 世紀末～8 世紀初頭に特徴的な段を持つ坏であるが、3 については6 世紀の住社式の影響下にある坏である可能性が残る。一方、甕類は7 世紀に特徴的な甕が多い。妥当的ではあるが、6 世紀の手法が残る7 世紀前葉～中葉にかけての土器群として考えたい。

竹鼻遺跡におけるこれまでの調査では、主に奈良時代の遺構・遺物が検出されてきた。今回の調査によって古墳時代末から平安時代にかけての集落遺跡であることが確認された。古墳時代末～奈良時代の遺構は主に、遺跡の北東側と南西側に多く検出されている。さらに南西側には墓域と思われる地点も確認されている（第4次調査）。

これまでの調査件数・面積が少ないため、竹鼻遺跡の全体像を掴むまでに至らないが、広範囲に竪穴住居跡が分布していることが試掘調査で確認されている。

V. 百目木遺跡第 14 次発掘調査

百目木遺跡（第14次調査）

1. 遺跡の環境

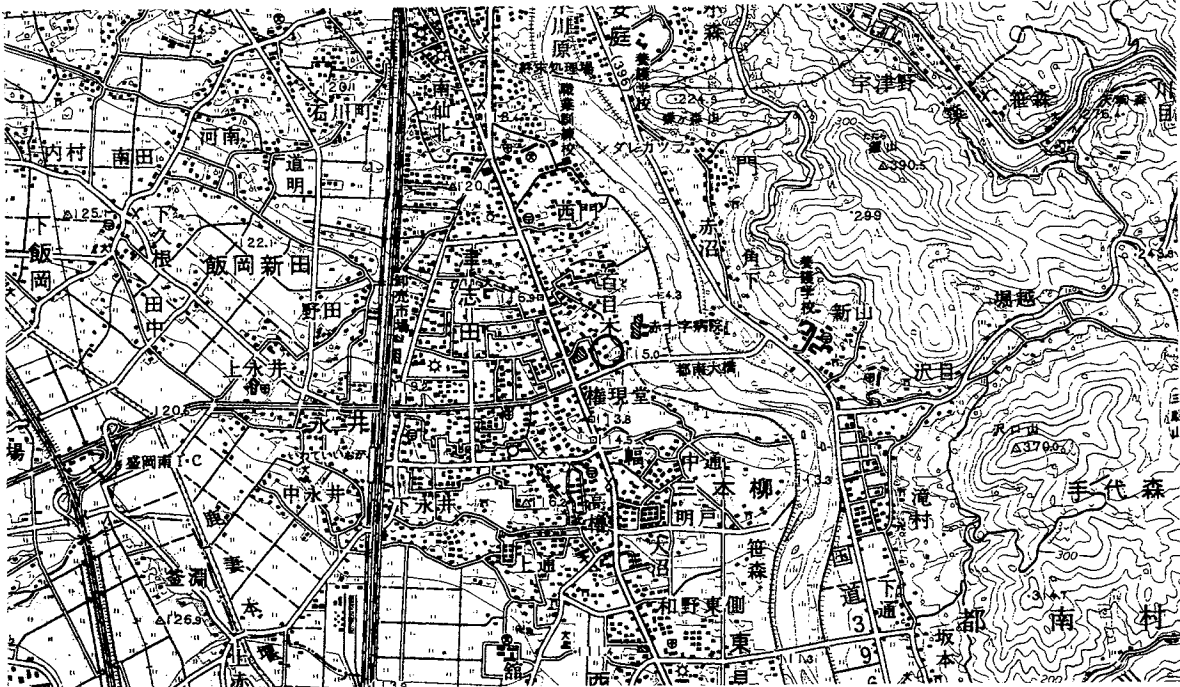
(1) 遺跡の位置と地形

遺跡の位置 百目木遺跡は、盛岡市街地から南南東に約4 Kmの段丘上に位置し、遺跡の東側は北上川が流れており、盛岡市三本柳5地割百目木地内に所在している。本遺跡は北上川の西岸に形成された河岸段丘上に立地しており、現況は住宅地および畑を主体とした農地が広がっている。

遺跡の地形 東の北上山地と西の奥羽脊梁山脈の間に南に流れる北上川は、盛岡市街で雫石川・中津川・梁川と合流し、水量を増し北上盆地を形成する。北上川西岸と雫石川南岸の沖積面は、流路の転換が著しく、旧河道が網状に確認される。河道の変遷に伴って、自然堤防が馬蹄状に残り、北上川氾濫原との間に砂礫段丘Ⅲ（低位段丘）が形成されている。本遺跡もこの段丘上に立地する。

本遺跡と周囲を区画する旧河道との比高差は約2 mである。周辺の遺跡は、北側に碓堰遺跡・西鹿渡遺跡があり、南側には旧河道を挟んで中島遺跡・坂の下遺跡・三本柳幅遺跡ほか数多くの奈良・平安時代の遺跡が位置する。

百目木遺跡の規模は、東西約320 m・南北約670 mと推定され、標高は約115 m前後であるが、北上川沿いにやや低くなり、遺跡南東端で最も低くなる。



第54図 百目木遺跡の位置（1：50,000）

(2) 歴史的環境

縄文時代 平坦地の三本柳・西見前・下飯岡地区のごく一部に縄文時代の遺物が見られるが、北上川東岸に面する中位段丘縁辺や丘陵地に比べると非常に少なく、遺構の存在は不明である。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、今のところ明確ではなく、湿地帯のような低平地に縄文土器片や土師器片と共に確認される程度である。

古 代 奈良時代には、低位段丘面に終末期古墳群（太田蝦夷森古墳群・高館古墳群）が築造され、西鹿渡遺跡や百目木遺跡、矢巾町の館畑遺跡など奈良時代から平安時代にかけての遺跡が広がっている。

平安時代に入ると、志波城跡（803）、徳丹城跡（813年頃）が造営される。これ以降、沖積面では急激に集落数が増加し、さらに上位の中位段丘や扇状地に集落が拡散するようになる。稲作を営み、生活の本拠地を低地に移行した結果であると思われる。平安時代の集落のほとんどが8～10世紀代のものであり、この地域の大きな特徴の一つである。

中 世 中世の城館跡として北上川東岸沿いには、新山館、手代森館があり、北上川西岸の低位段丘や微高地には、見前古館、見前館（見前城）が所在する。

2. 調査経過

(1) これまでの調査

第1次調査 百目木遺跡は古くから土師器・須恵器が表面採集される遺跡として知られていた。第1次調査は昭和53年に、旧都南村教育委員会により大型ショッピングセンター建設に伴う事前の発掘調査が実施され、縄文時代の土坑6基、奈良・平安時代の竪穴住居跡80棟などを検出し、本遺跡が奈良・平安時代の大規模な集落跡であることが明らかになった。平成4年度に盛岡市との合併以後は個人住宅新築や各種開発行為の事前調査を実施している。

第2次調査 第2次調査は、個人住宅新築に伴うもので、試掘トレンチによる調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

第3次調査 第3次調査は住宅新築に伴う調査で、奈良時代の竪穴住居跡3棟、土坑5基が検出された。

第4次調査 第4次調査は店舗新築に伴う調査であり、調査区は国道4号線に東隣する地点である。試掘トレンチにより遺構の有無を確認したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

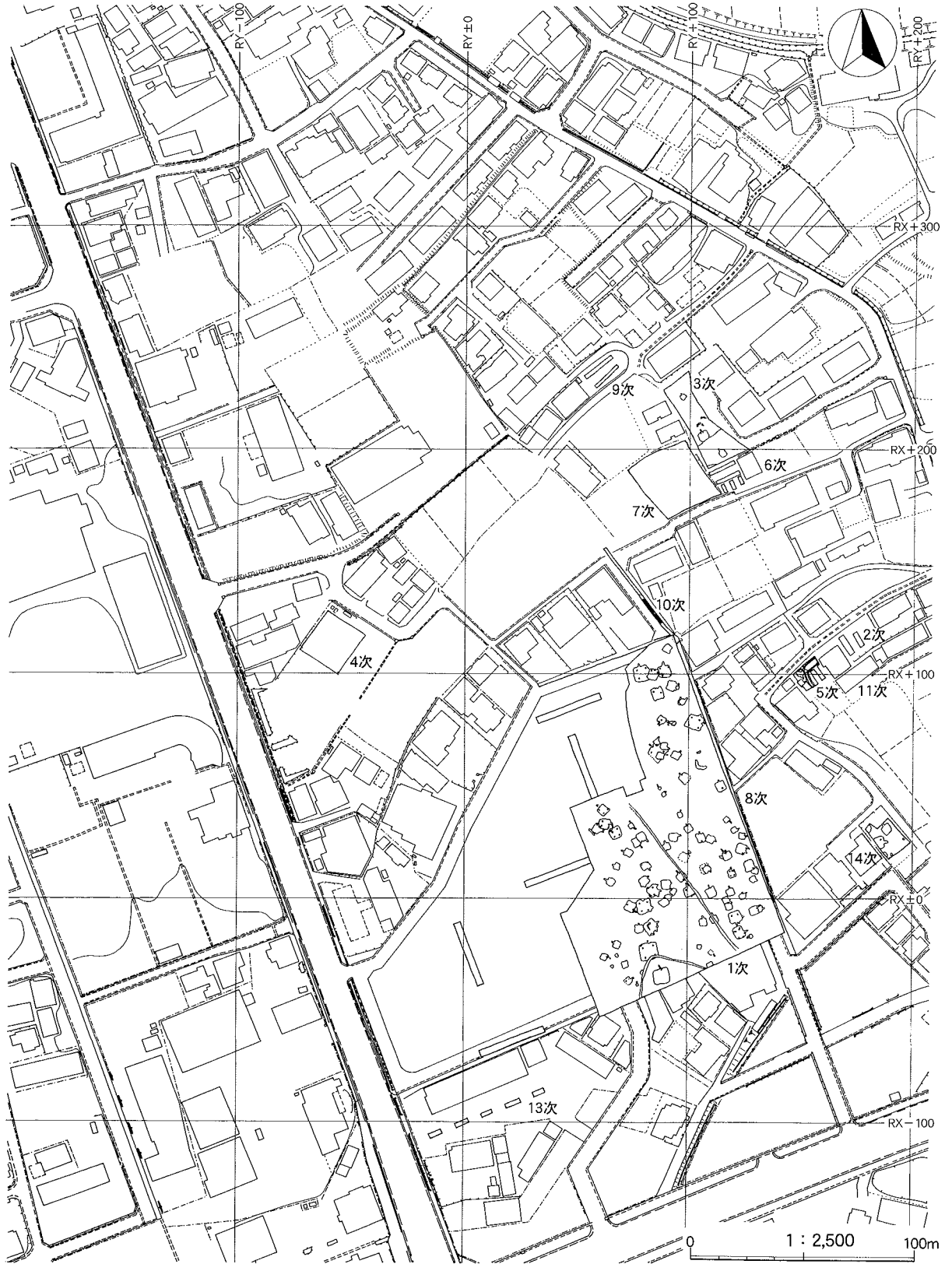
第5次調査 個人住宅新築に伴う第5次調査では、平安時代の竪穴住居跡1棟・溝跡3条を検出している。

第6次調査 第6次調査は、個人住宅新築に伴う調査で、第3次調査区の南側に隣接している。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

第7次調査 第7次調査は個人住宅新築によるもので、第3・6次調査に隣接する地点である。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

第8次調査 下水道管敷設に伴う第8次調査は、第1次調査区に東隣する地点で、竪穴住居跡2棟、土坑1基を検出した。

第9次調査 個人住宅新築に伴う第9次調査は第1次調査区から北に約130mに位置する。試掘トレンチ



第56図 百目木遺跡全体図

により、遺構の有無を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第10次調査 第10次調査は下水道管敷設に伴う事前調査で、第1次調査区北東に隣接している。調査の結果、畝状の遺構が検出された。

第11次調査 個人住宅新築に伴う第11次調査は、第2・5次調査区に挟まれた地点を調査しているが、遺構・遺物は確認されなかった。

第12次調査 第12次調査区は個人住宅新築に伴うもので、第1次調査区の北東約130mに位置する。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡8棟、掘立柱建物跡1棟、土坑3基が検出された。

第13次調査 第13次調査は店舗新築に伴う事前調査で、調査地点は国道4号線と主要地方道上米内湯沢線との交差点付近である。調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

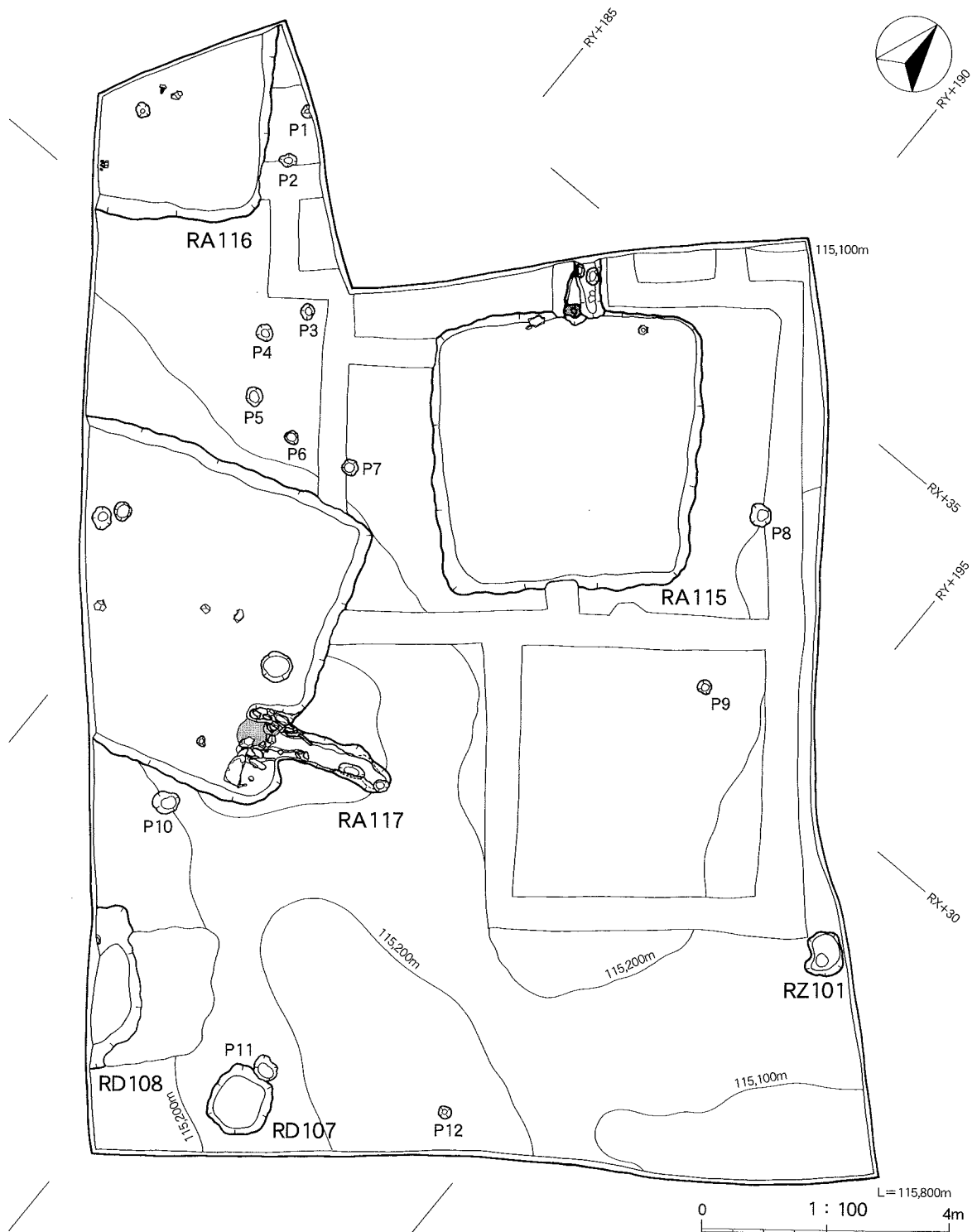
回数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期間	検出遺構・遺物
1	三本柳5地割21ほか	店舗新築	9,000	78.3.10 78.10.12	縄文時代の土坑6基 奈良・平安時代の竪穴住居跡80棟
2	三本柳5地割35-7	住宅新築	34	93.9.8	なし
3	三本柳5地割13-2	住宅新築	652	94.9.22 94.10.12	奈良・平安時代の竪穴住居跡3棟、土坑5基
4	三本柳5地割2-1	店舗新築	399	95.2.23	なし
5	三本柳5地割35-9	住宅新築	119	95.7.12 95.7.17	平安時代の竪穴住居跡1棟、溝跡3条
6	三本柳5地割13-4	住宅新築	56	95.12.7	なし
7	三本柳5地割6-1	住宅新築	100	96.5.13	なし
8	三本柳5地割57,60, 61	下水道管敷設	200	96.9.4 96.9.7	平安時代の竪穴住居跡2棟、土坑1基
9	三本柳4地割14-18	住宅新築	43	96.11.21	なし
10	三本柳5地割6-1	下水道管敷設	56	96.11.25 96.11.27	畝状遺構
11	三本柳5地割35-8	住宅新築	150	97.4.20	なし
12	三本柳5地割35-8	住宅新築	288	98.10.5 98.11.5	奈良時代の竪穴住居跡2棟、平安時代の竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡1棟、土坑3基
13	三本柳5地割25-15	店舗新築	38	99.1.26	遺構・遺物なし
14	三本柳5地割33-9	住宅新築	332.82	99.7.26 99.8.30	奈良時代の竪穴住居跡2棟、平安時代の竪穴住居跡1棟、土坑2基、焼土遺構1棟

調査成果一覧

(2) 平成 11 年度の調査

位置 第 14 次調査は個人住宅新築に伴う事前調査である。調査区は昭和 53 年に実施した第 1 次調査区の北東約 50 m に位置し、遺跡の南東部の段丘端部にあたる。

調査区内の標高値は、115.1 m～115.2 m で、調査区の北西から南東にかけて緩やかに傾斜する地形上に位置している。



第57図 百目木遺跡第14次調査全体図

検出遺構 奈良時代の検出遺構は竪穴住居跡2棟、土坑1基である。調査区北側で検出したR A 115 竪穴住居跡は、旧家屋の基礎により大半が攪乱を受けていた。調査区北西側で検出したR A 116 竪穴住居跡は、全体形の大半が調査区外に拡がっており、かまどは未検出である。

調査区南側にかかるR D 108 土坑は東半部に攪乱を受け、埋土より土師器小形甕が出土している。

平安時代の遺構は竪穴住居跡1棟、土坑1基を検出した。調査区西側で検出したR A 117 竪穴住居跡は、一部が調査区外に拡がるため全体形は不明だが、床面・埋土より多量の遺物が出土している。調査区南側で確認されたR D 107 土坑からは、土師器片が少量出土した。調査区東側でR Z 101 焼土遺構が検出されているが、出土遺物がなく時期は不明である。

3. 調査内容

(1) 奈良時代の遺構・遺物

R A 115 竪穴住居跡 (第 58・59 図)

位置 調査区北側 **平面形** 方形 **主軸方向** N 43° W
規模 東西 4.00 ~ 4.40 m・南北 4.32 ~ 4.50 mをはかる **重複関係** なし **掘込面** 削平
検出面 黄褐色シルト層上面 **埋土** 自然堆積で、4層に細分される。

A 1層-褐色シルト粒~塊状を少し含む黒褐色土。A 2・3層-褐色シルト粒を僅かに含む黒色土。

A 4層-褐色シルト塊を多量に含む黒褐色土。

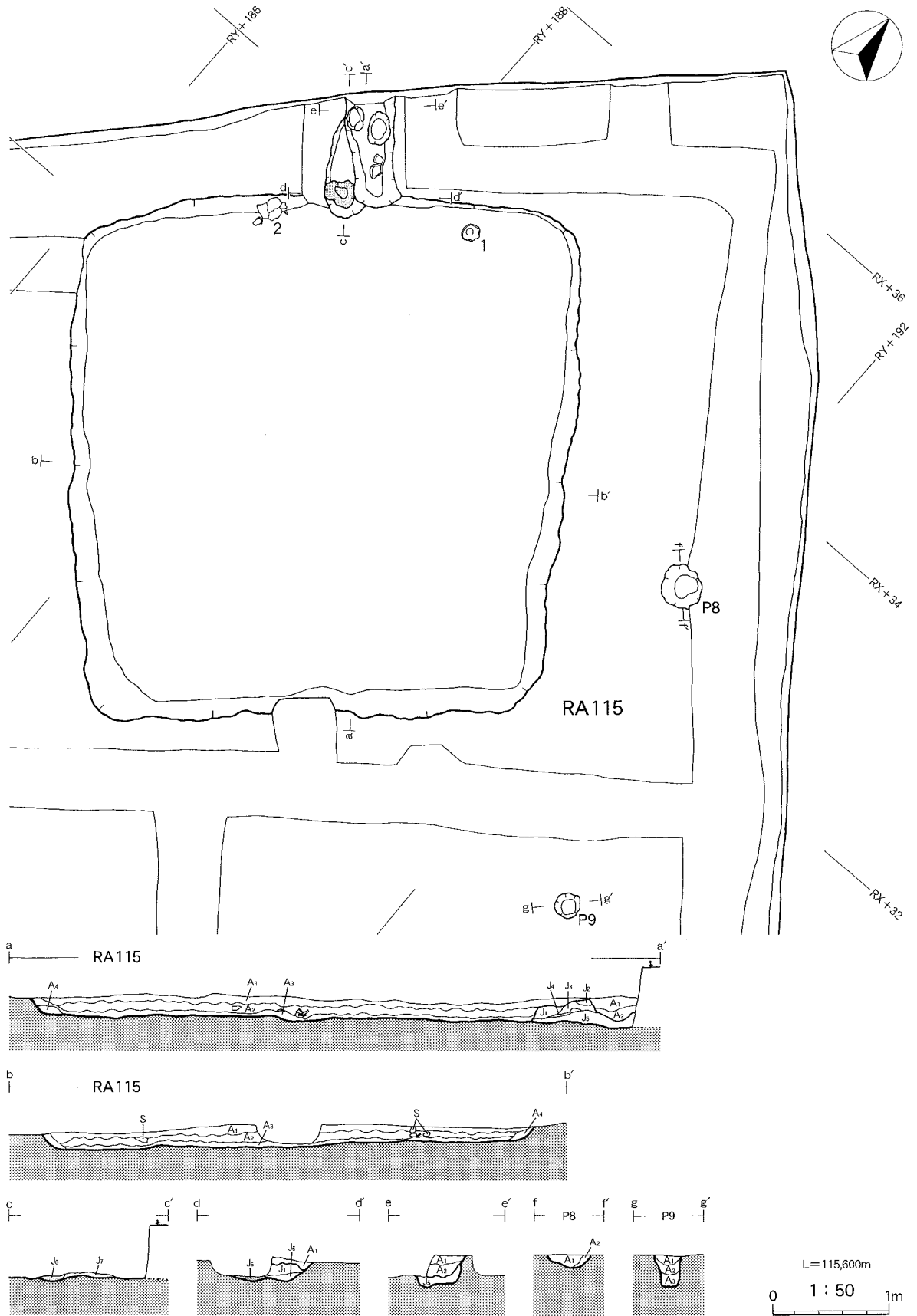
壁の状態 検出面から床面までの深さは0.11 ~ 0.21 mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 床面はほぼ平坦であるが、僅かに起伏があり、全体的に北西側に0.02 ~ 0.05 mほど傾斜している。床構築土は確認されず、シルト層上面と砂礫層の一部を直接床面としている。

かまど かまどは新旧2時期あり、新期のかまどは旧期のかまどを掘削し、北壁中央に位置する。煙道の一部及び煙出しは、調査区外に拡がっているため平面形は不明であるが、確認できる範囲では、平面形は不整な溝状で、煙出しに向かって深くなっている。かまど構築材と火床面は、攪乱のため残存していない。かまど崩壊土(J 1 ~ 5層)は、焼土・カーボンを僅かに混入し、にぶい黄褐色シルトを粒~塊状に含む黒褐色土である。

旧期のかまどは、一部が残存するのみである。火床面は0.20 ~ 0.25 mの不整形な楕円形を呈し、焼けており、浸透層の厚さは0.05 mをはかる。かまど崩壊土(J 6・7層)は、焼土を混入し、褐色シルトを粒状にやや多く含む黒褐色土である。

出土遺物 (第 59 図 1 ~ 6) 1 ~ 4は土師器甕である。1は体部下半~底部にかけて欠損しており、残存高 12.9cm・口径 16.3cmをはかり、最大径を口縁部にもつ。器面調整は口縁部の内外にヨコナデを施し、口縁部下内外面にヘラナデを施す。2は口縁部を欠損するもので、残存高 17.3cmをはかる。器面調整は口縁部外面にヨコナデ、外面の上半がハケメの後ヘラナデを施す。内面の口縁部下からハケメ、下半がハケメの後、ヘラナデを施す。3は口縁部~体部上半が欠損し、内面に巻き上げ痕が観察される。器面調整は外面がハケメの後、縦方向のヘラミガキを施す。内面はハケメを施す。4は体部下半から底部にかけての破片で、底部には木葉痕が残る。器面調整は内外面にヘラナデが施される。



第58図 RA115竖穴住居跡

壺 5・6は土師器壺で、体部下半部を欠損している。口径22.8cm、最大径32.2cm、底径8.0cmをはかり、最大径を体部上半にもつ。器面調整は口縁部内外にヨコナデ、体部の内外面にハケメを施す。

R A 116 竪穴住居跡 (第60・61図)

位置 調査区北西隅 **平面形** 方形 **規模** 東西2.65 m以上、南北3.23 m以上

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** 黄褐色シルト層上面

埋土 埋土(A層)は自然堆積で、5層に細分される。A1～3層は褐色シルト粒をやや多く含む黒褐色土。A4・5層は褐色シルト粒～塊状を多く含む黒褐色土。床構築土B層は、粒～塊状の黄褐色シルトをやや多く含む黒褐色土である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.24～0.38 mで、外傾して立ち上がる。 **床の状態** ほぼ平坦

構築面 平坦で、床面からの深さ0.04～0.10 mをはかり、砂礫層を掘込む。 **かまど** 不明

ピット 平面形西寄りにピットを検出。平面形は不整な楕円形。直径は0.20～0.25 m、床面からの深さは0.06～0.07 mをはかり、柱痕跡は認められない。埋土は暗褐色シルト粒を多く含む黒色土である。

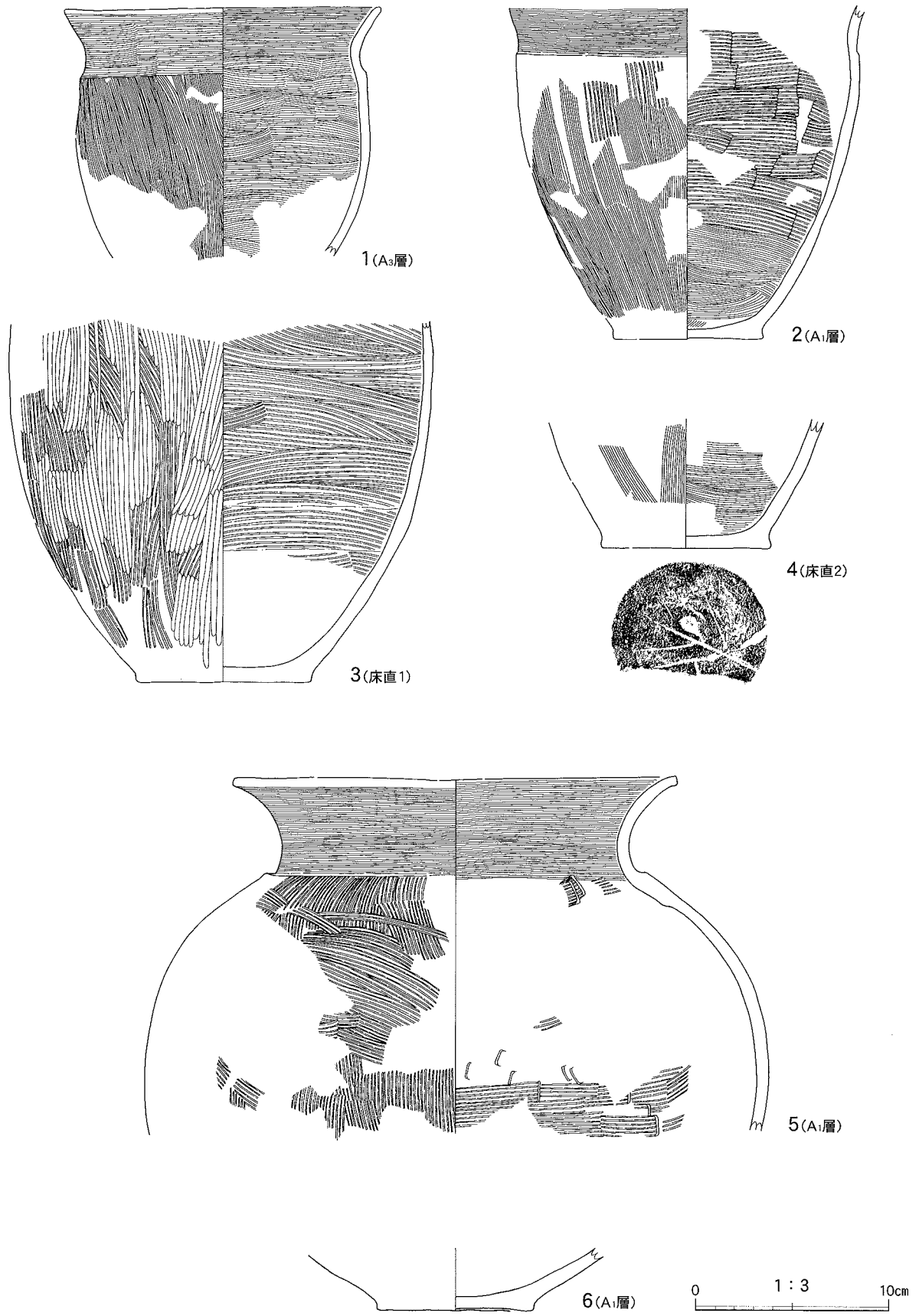
出土遺物 (第61図1～10) 1～5は土師器の坏である。1は床面から出土し、1/4を欠損している。底部は丸底、口縁部と体部との境に1条の沈線が施される。内面は黒色処理され、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリの後、粗いヘラミガキ、内面全面にヘラミガキが施される。底部に浅く細い沈線が数多く施される。2は底部を欠損しており、口縁部と体部との境に1条の沈線が施される。内面及び口縁部外面の一部は黒色処理され、口縁部外面にヨコナデの後、ヘラミガキ、体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面全面にヘラミガキを施す。3は口縁部と体部との境に1条の沈線を施し、底部は平底に近い。内面は黒色処理され、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面全面にヘラミガキが施される。4は底部は丸底、口縁部と体部との境に1条の沈線が施される。内面及び口縁部外面の一部は黒色処理されるが、内面は摩滅が激しい。口縁部外面上半に横方向のヘラナデ、下半にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面全面にヘラミガキが施される。4は底部を欠損しており、口縁部と体部外面との境に1条の沈線が施される。内面及び口縁部外面の一部は黒色処理され、口縁部外面はヨコナデの後、ヘラミガキ、体部外面は横方向のヘラケズリ、内面全面にヘラミガキが施される。

高坏 6は土師器高坏で、脚部を欠損している。口径15.7cmをはかる。口縁部と体部外面との境に1条の沈線が施される。内面は黒色処理され、器面調整は内外面ともにヘラミガキを施す。

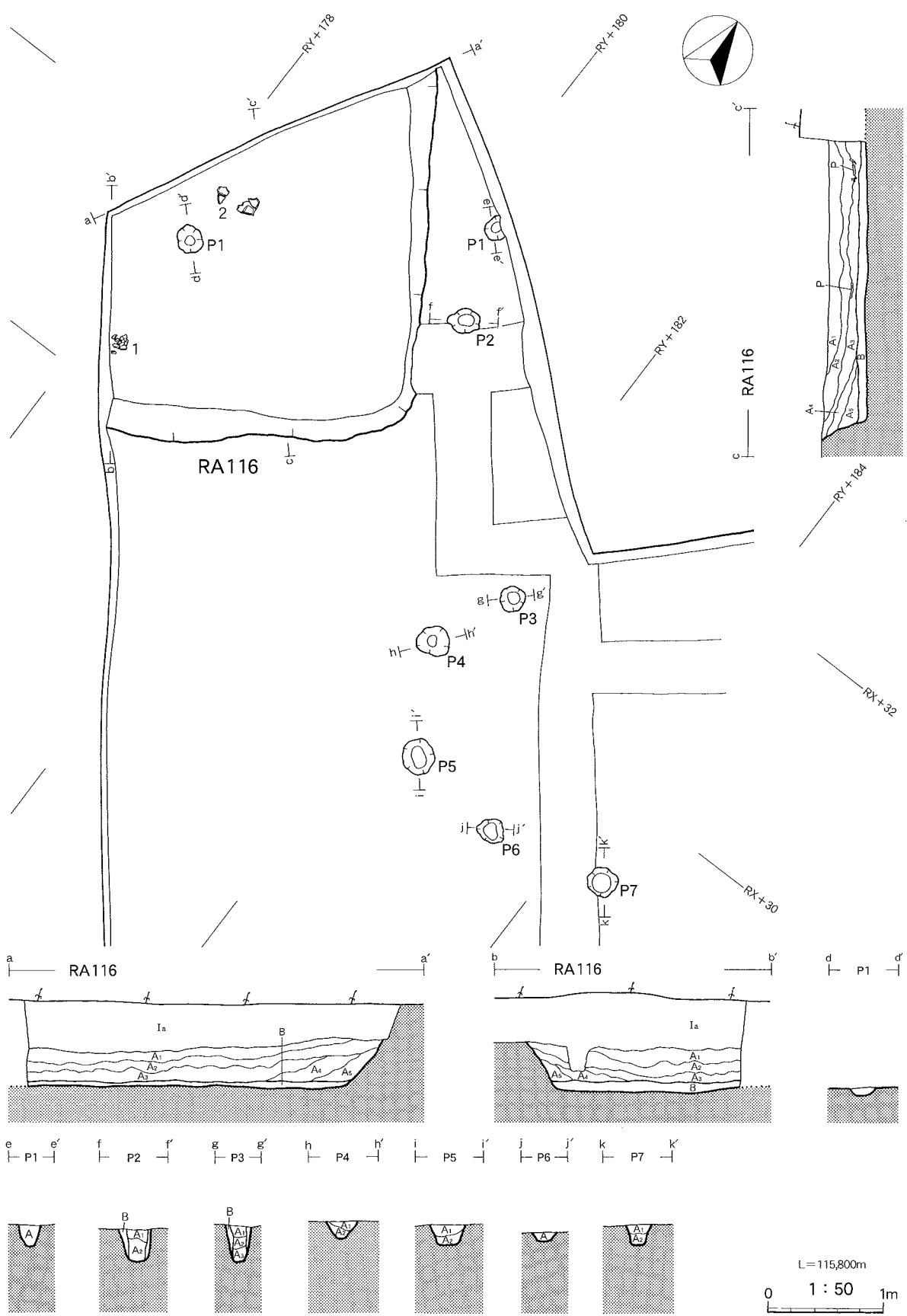
鉢 7は土師器鉢で、底部を欠損している。口縁部と体部外面との境に1条の沈線が施される。内面は黒色処理され、口縁部外面はヨコナデの後、ヘラミガキ、体部外面に横方向のヘラケズリ、内面全面にヘラミガキが施される。

甕 8・9は土師器甕である。8は体部下半～底部を欠損している。口径17.3cmをはかる。器面調整は口縁部の内外にヨコナデを施し、体部の内外面にヘラナデを施す。口縁口唇部に浅く細い沈線が1条施される。9は体部下半～底部を欠損している。口径19.3cmをはかる。器面調整は口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面に縦方向のヘラナデ、内面にハケメが施される。

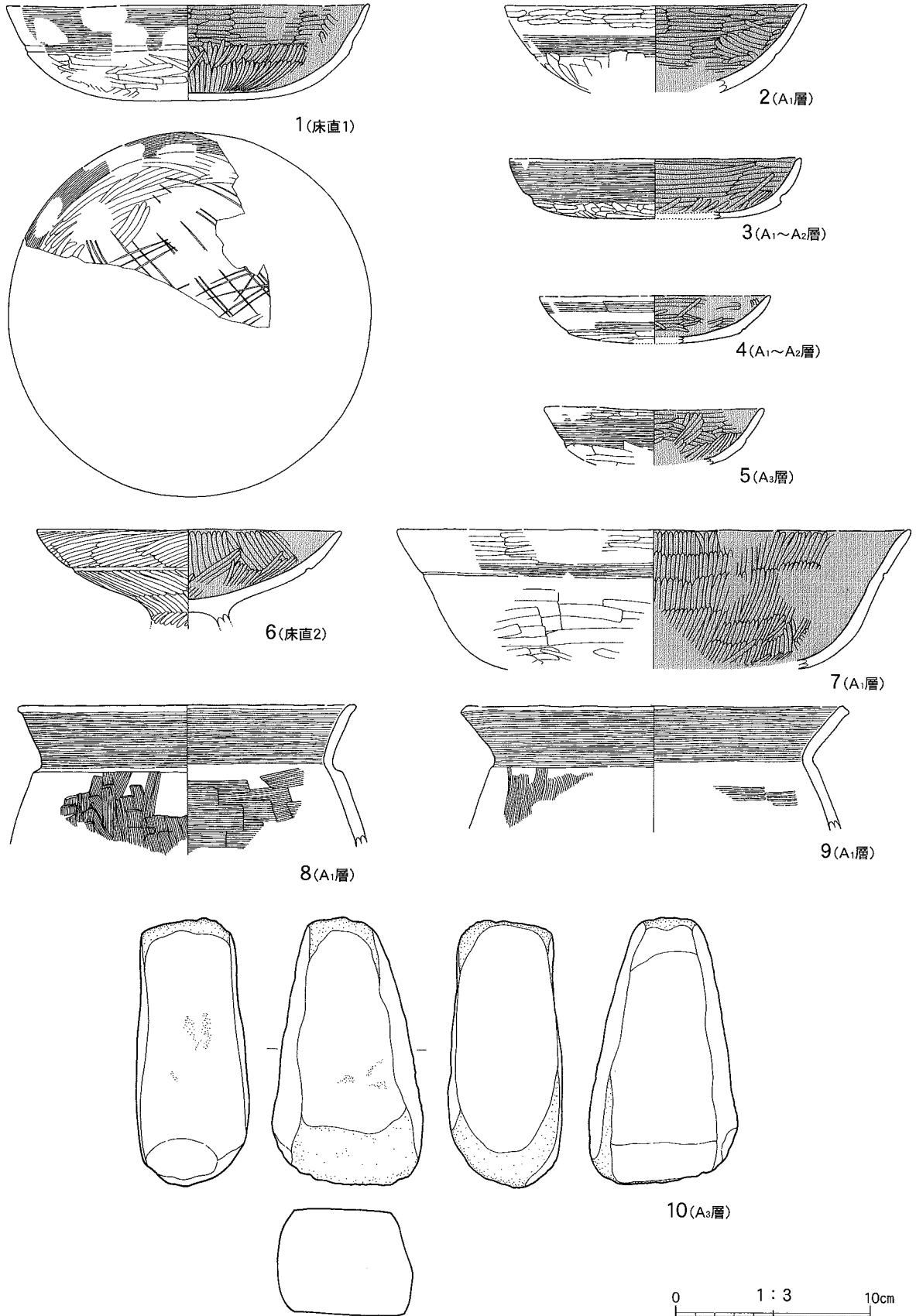
砥石 10は安山岩製の砥石で、四角柱状の短冊形を呈し、4面に磨面が観察される。



第59図 RA115豎穴住居跡出土遺物



第60図 RA116竪穴住居跡、ピット



第61図 RA116竪穴住居跡出土遺物

R D 108 土坑 (第 67・68 図)

位置 調査区南側 **平面形** 不明 **規模** 上端 2.56 ～ 2.61 m、下端 1.39 ～ 1.60 mをはかる。
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** 黄褐色シルト層上面
埋土 埋土は自然堆積で2層に細分される。A₁層－褐色シルト粒を僅かに含む黒褐色土。A₂層－褐色シルト粒をやや多く含む黒褐色土。カーボンを多量に含む。
壁の状態 壁高は 0.18 ～ 0.26 mで、緩やかに立ち上がるが、東側は攪乱により不明である。
出土遺物 (第 68 図 1) 1は土師器小形甕でA層から出土している。体部下半～底部の一部を欠損している。器高 10.4cm、口径 13.2cm、体部最大径 14.6cm、底径 8.0cmをはかり、体部中央に最大径をもつ。器面調整は口縁部内外面にヨコナデを施した後、外面は縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラナデを施す。体部は内外面ともにヘラミガキを施す。

(2) 平安時代の遺構・遺物

R A 117 竪穴住居跡 (第 62 ～ 66 図)

位置 調査区北西 **平面形** 方形 **主軸方向** N 72° W
規模 東西 4.80 m、南北 4.95 m以上 **重複関係** なし **掘込面** 削平 **検出面** 褐色シルト層
埋土 A層は自然堆積で、5層に細分される。A₁層－褐色シルト粒～塊状に多く含む黒褐色土。A₂・A₃層－全般に褐色シルト粒を僅かに含む黒褐色土で、礫を多く混入する。A₄層－褐色シルト粒を僅かに含む黒褐色土。A₅層－黄褐色シルト粒～塊状を多量に含む黒褐色土。床構築土B層－黄褐色シルト粒～塊状をやや多く含む黒褐色土。
壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.25 ～ 0.43 mで、検出面から壁中位までは外傾するが、その下半はほぼ直壁となっている。
床の状態 ほぼ平坦。床面下ほぼ全面に構築土を確認。構築面は平坦で、構築土の厚さは 0.04 ～ 0.10 mであり、砂礫層を掘り込んでいる。
かまど かまどは新旧2時期あり、新期のかまどは旧期のかまどを掘削して構築しており、東壁南寄りに位置する。煙道平面形は不整な溝状で、床面は火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し、深くなっている。規模は東壁から煙出しの先端までの長さは 1.90 m、幅 0.45 ～ 0.56 m、検出面から火床面までの深さは 0.34 mをはかる。
かまどは、黄褐色シルトに黒褐色土・自然円礫～角礫を含む混合土 (K層) で構築し、北残存部は旧期の支脚を補強材として使用している。規模は北残存部が長さ 0.65 m・幅 0.28 ～ 0.40 m・高さ 0.40 ～ 0.75 mをはかり、南残存部が長さ 0.70 m・幅 0.22 ～ 0.34 m・高さ 0.20 mをはかる。
火床面の熱浸透層は深さ 0.06 ～ 0.10 mをはかる。支脚は火床面北東端に土師器坏と土師器甕の体部下半～底部を重ね、伏せて用いている。
かまど崩壊土 (J層) は、暗褐色シルト粒～塊状をやや多く含む黒褐色土に多量の焼土粒と炭化物を含む。なお、この崩壊土は煙出しから煙道、さらに火床面と床面の一部の範囲を覆っている。煙出しは焼土・炭化物を多く含み、土器の破片の混入も見られる。煙出しの平面形は楕円形で長軸 0.33 m・短軸 0.30 mをはかる。検出面からの深さは 0.45 mをはかる。

旧期のかまどは、支脚と火床面およびかまど崩壊土（J' 1層）の一部が残存するのみである。火床面は0.23～0.25 mの円形を呈し、北側が新期のかまど北残存部の下に拡がる。浸透層は0.05 mをはかる。

支脚は火床面中央部にあかやき土器坏と土師器甕の体部下半～底部を重ね、伏せて用いている。かまど崩壊土（J' 1層）は、暗褐色シルト粒を多く含む黒褐色土で、多量の焼土を含む。

柱 穴 ピットは床面上に4口を検出しており、本住居に伴うと考えられるのはP 3である。平面形は不整円形を呈し、埋土は2層（D・E層）に大別される。柱痕跡部分（D層）は暗褐色シルト粒をやや多く含む黒褐色土で、カーボンを多く含み、しまりがよい。掘方埋土（E層）は暗褐色シルト粒～塊状をやや多く含む黒褐色土でしまりがよい。また、貯蔵穴とみられるP 1は、かまど左側に位置し、不整円形を呈する。規模は長軸0.50 m・短軸0.46 m、深さ0.10～0.11 mをはかる。

埋土（C層）は暗褐色シルト粒～塊状をやや多く含む黒褐色土で、多くの土師器破片とカーボンが混入する。

その他の各ピットの規模・深さは、P 2－径0.12～0.16 m、深さ0.04 m。P 3－径0.28～0.30 m、深さ0.35 m。P 4－径0.31～0.41 m、深さ0.15 mをはかる。

出土遺物（第63～66図1～37） 1～4は回転糸切無調整の須恵器坏である。3・4は口縁部外面に重ね焼きによる痕跡が認められる。

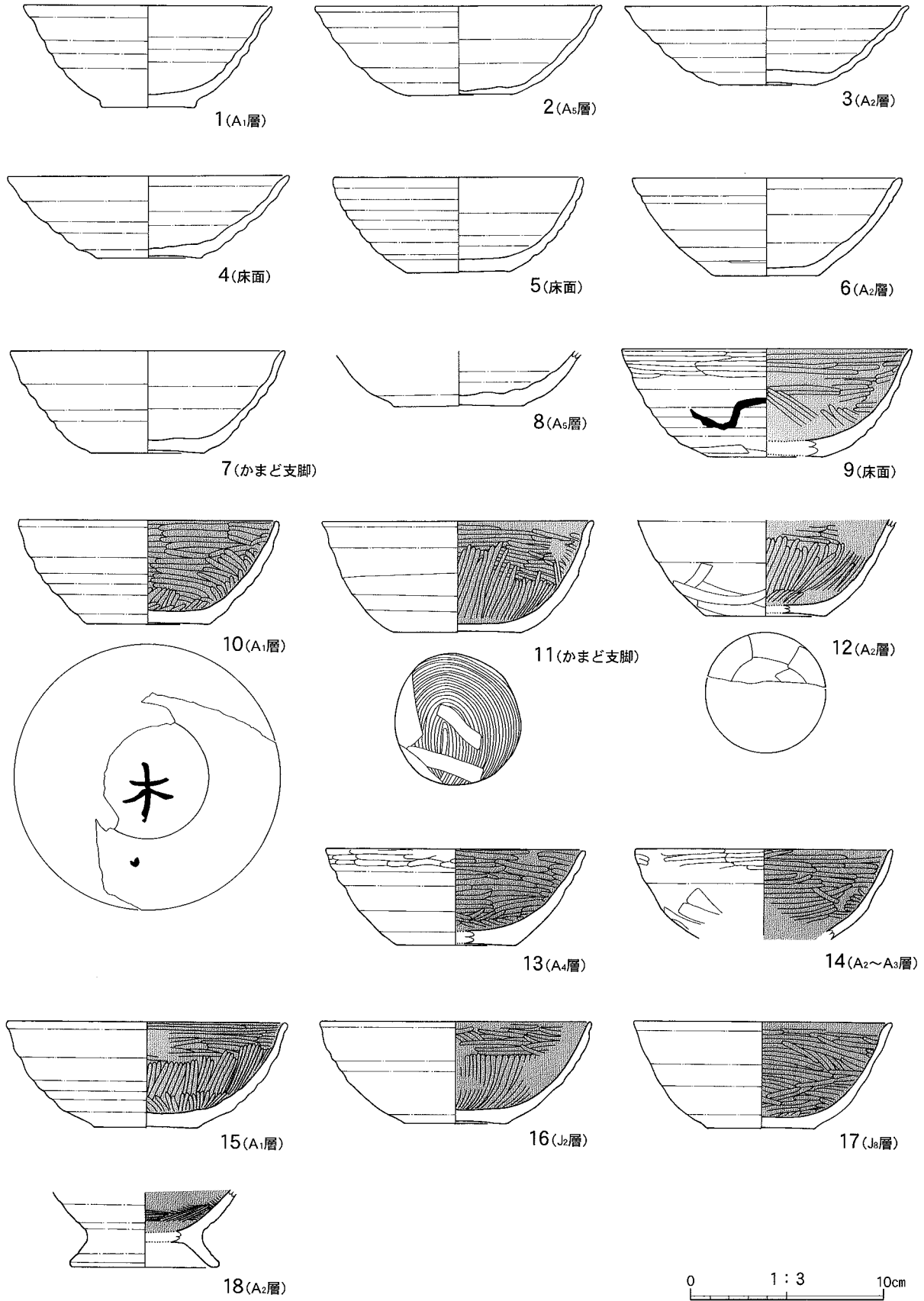
5～8は回転糸切無調整のあかやき土器坏である。5は底部回転糸切後に体部下端のみに回転ヘラケズリ調整を施す。6は底部回転糸切後に体部中央から体部下端にかけて回転ヘラケズリを施す。7は新期かまどの支脚に転用されたもので、火熱により器面が一部剥落している。

9～17は土師器坏である。9・10・13～17は回転糸切無調整である。9は内面及び口縁部外面の一部が黒色処理され、口縁部外面と内面全面にヘラミガキ、体部下端に手持ちヘラケズリが施され、体部外面には墨書痕が認められる。10は体部外面と底面に墨書文字が認められ、体部は判読不明であるが、底面は「木」と判読できる。

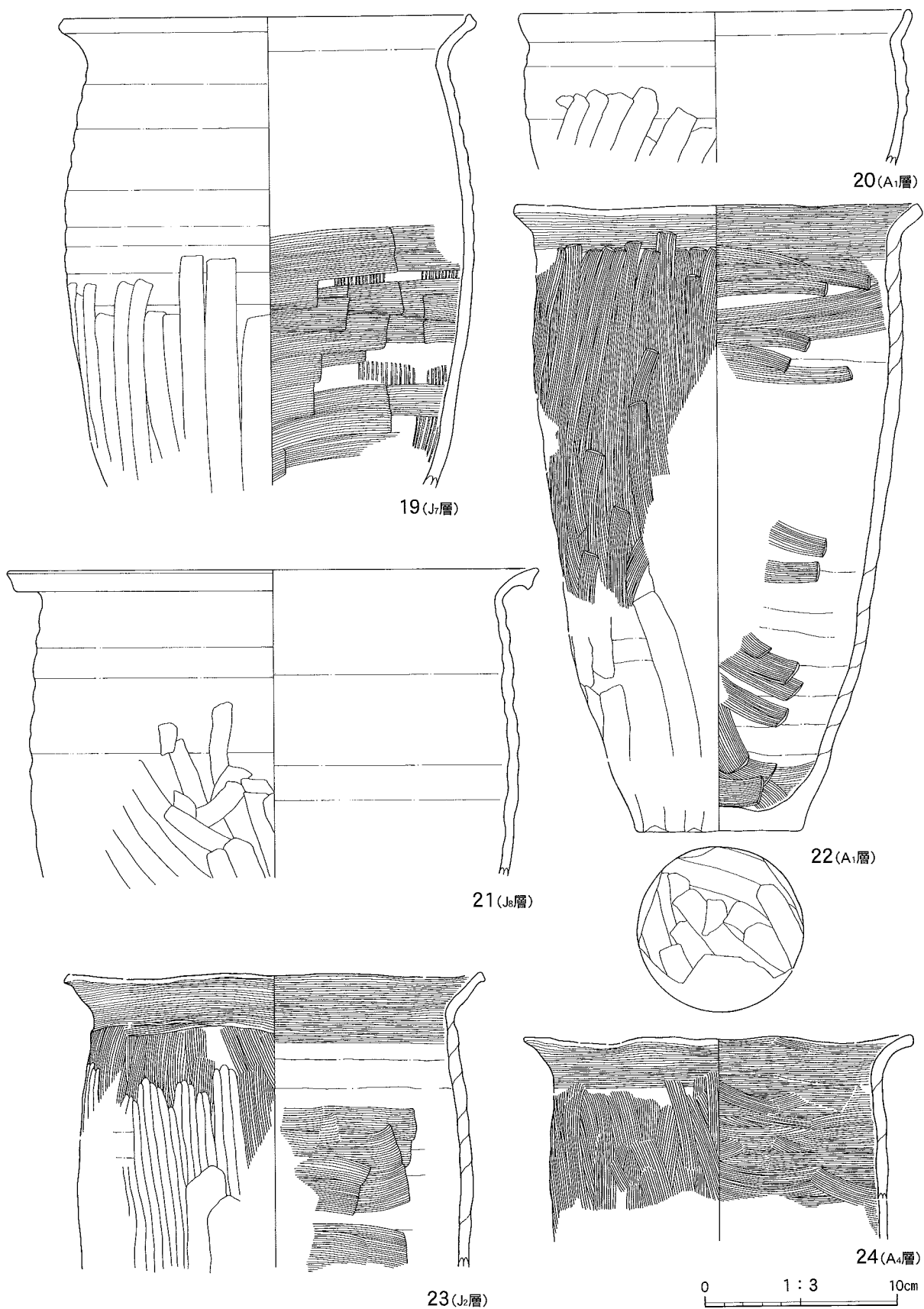
11は旧期かまどの支脚に転用されたもので、底部回転糸切後に底部の一部に手持ちのヘラケズリ、体部中央から底部下端にかけて回転ヘラケズリを施す。12は口縁部を欠損しており、底部回転糸切後に体部下半から底部周縁にかけて手持ちのヘラケズリを施す。13は口縁部外面と内面全面にヘラミガキ、体部下半から底部下端にかけて回転ヘラケズリを施す。14は底部を欠損しており、口縁部外面と内面全面にヘラミガキ、体部下半にヘラケズリを施す。15～17は内面が黒色処理され、内面全面にヘラミガキが施される。18は高台付坏で体部を欠損している。内面は黒色処理され、体部内面は細かいヘラミガキが施される。

甕 19～21はあかやき土器甕である。19は体部下半～底部にかけて欠損しており、残存高24.5cm、口径22.0cmをはかる。器面調整は外面が体部中央から縦方向のヘラケズリ、内面がハケメの後にヘラナデを施す。また外面の一部に煤が付着する。20は体部下半～底部を欠損しており、残存高7.8cm、口径20.0cmをはかる。器面調整は体部の外面にヘラケズリを施す。21は体部下半～底部を欠損しており、残存高16.0cm、口径27.1cmをはかる。器面調整は体部外面にヘラケズリ調整を施す。また内面には煤が付着する。

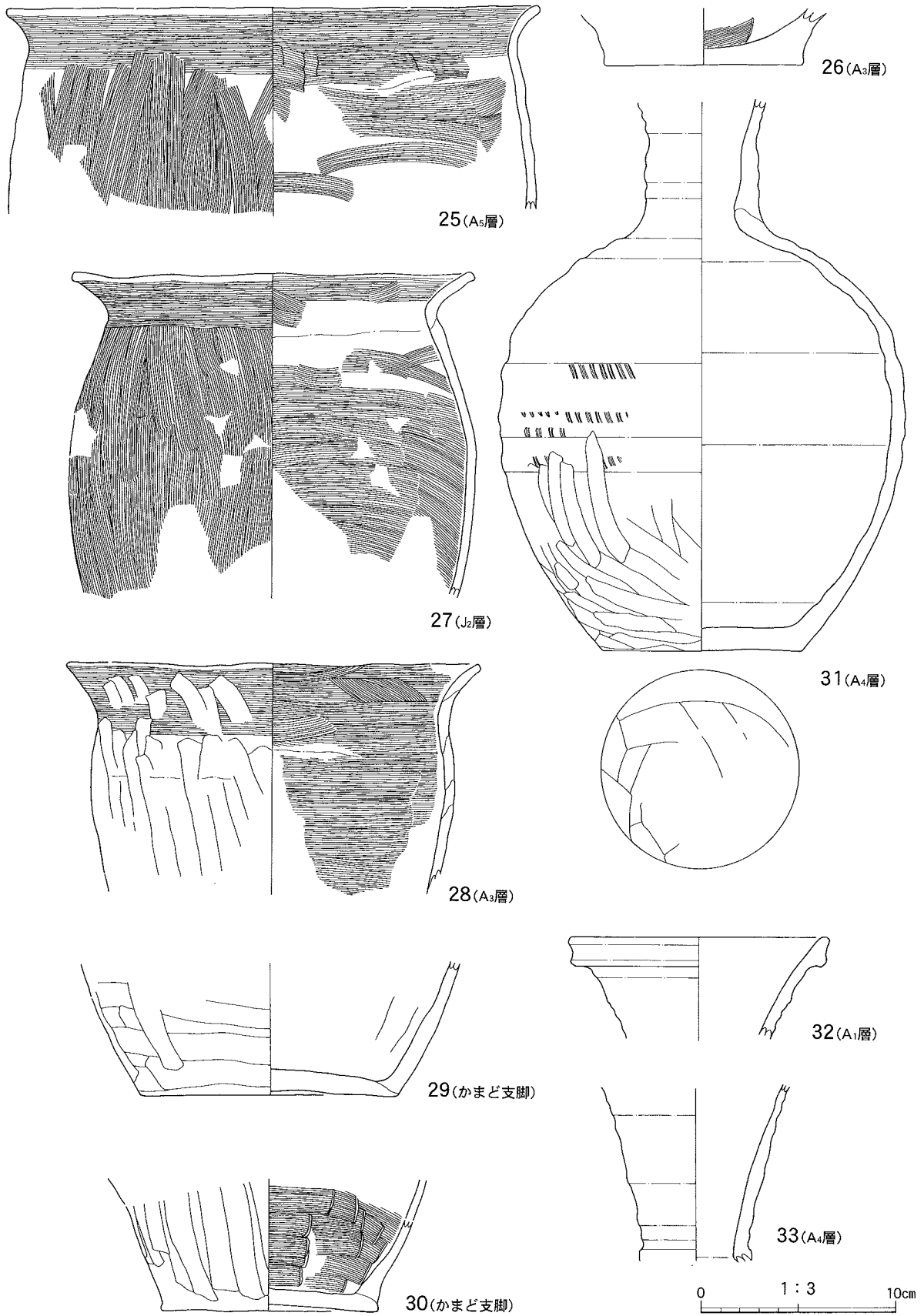
22～26は土師器甕である。22はほぼ完形で、器高32.5cm、口径21.0cm、底径8.6cmを



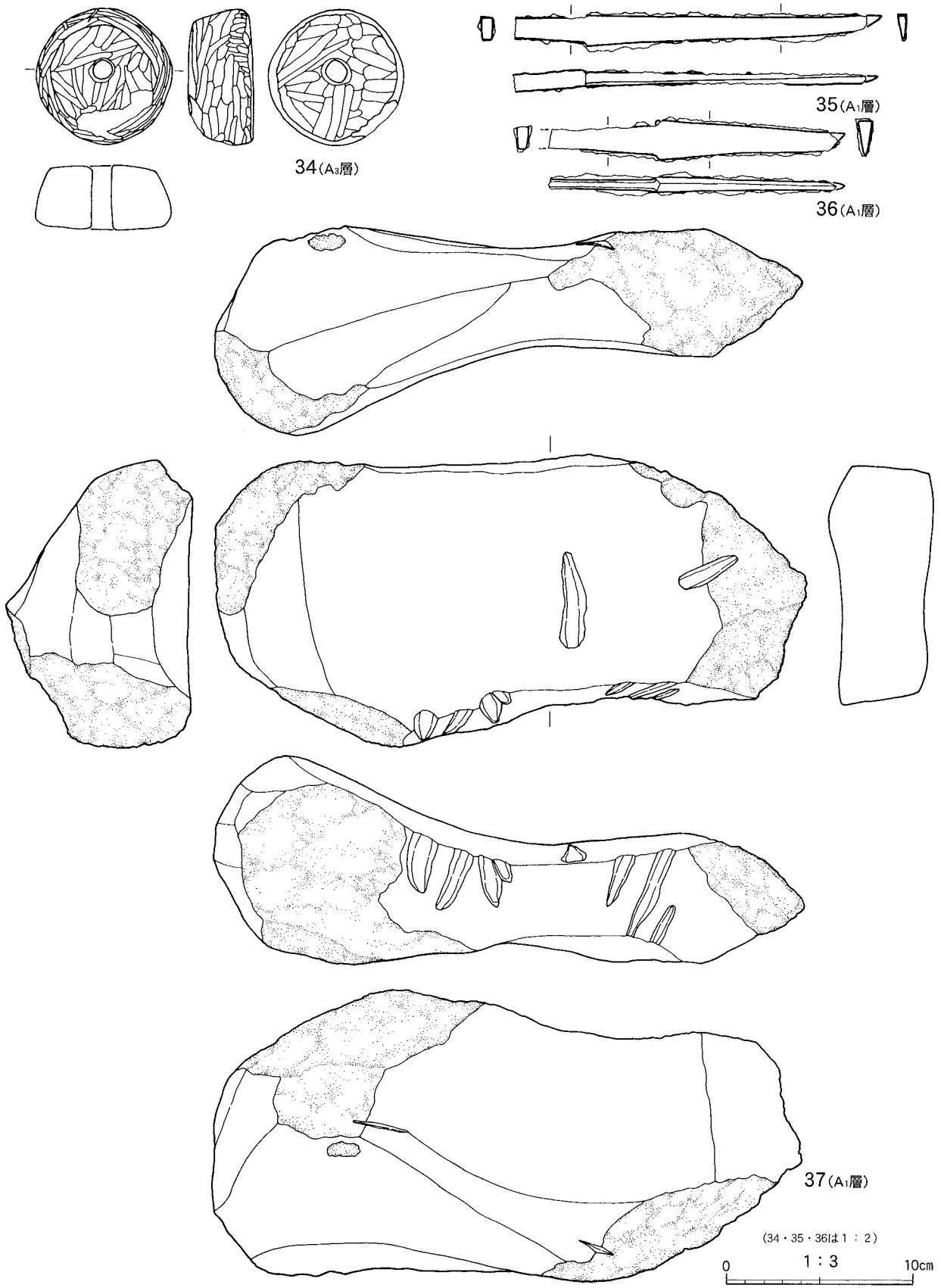
第63図 RA117竪穴住居跡出土遺物 (1)



第64図 RA117豎穴住居跡出土遺物 (2)



第65図 RA117竪穴住居跡出土遺物（3）



第66図 RA117竪穴住居跡出土遺物(4)

はかる。器面調整は口縁部の内外面にヨコナデ、外面上半にヘラナデ、下半がヘラナデの後にヘラケズリ、内面はヘラナデ調整を施す。底部にはヘラケズリを施す。

23は体部下半から欠損し、残存高15.3cm、口径21.2cmをはかり、体部内外面に巻上げ痕が残る。器面調整は口縁部の内外面にヨコナデ、口縁部と体部の境に1条の沈線が施され、外面の口縁部下～体部下半にかけてヘラナデの後、ヘラミガキ、内面はヘラナデ調整を施す。24は体部下半から欠損しており、残存高10.5cm、口径20.0cmをはかる。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、口縁部下の内外面にヘラナデを施す。25は体部下半から欠損しており、全体的に摩滅している。残存高10.8cm、口径27.2cmをはかり、内面に巻上げ痕が残る。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、口縁部下の内外面にヘラナデを施す。27は体部下半～底部を欠損しており、残存高16.9cm、口径20.4cmをはかり、体部内面に巻上げ痕が残る。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、口縁部下の内外面にヘラナデを施す。28は体部下半から欠損している。残存高12.0cm、口径11.0cmをはかり、体部の内外面に巻上げ痕が残る。器面調整は口縁部の外面がヨコナデの後、ヘラケズリ、口縁部内面がヨコナデ、体部外面が縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。

26・29・30は底部破片である。26は底部に木葉痕が残り、全体的に摩滅している。器面調整は内面がヘラナデを施す。29は新期かまどの支脚に転用されたもので、2次の加熱を受け、器面が脆くなっている。底径13.2cmをはかり、器面調整は外面がヘラケズリ、内面が単位不明のナデを施す。30は旧期のかまど支脚に転用されたもので、底径11.0cmをはかる。器面調整は外面が縦方向のヘラケズリ、内面がヘラナデ調整を施す。

長頸瓶 31～33は須恵器長頸瓶である。31は口縁部と体部の一部を欠損している。残存高28.3cm、底径10.2cm、最大径21.0cmをはかり、最大径を体部上半にもつ。器面調整は体部上半に平行タタキの後にロクロナデ、体部下半はタタキ痕を消すようにナデツケを施し、底部はヘラケズリ調整を施す。また、外面のほぼ半分に自然釉が認められる。32は口縁部～頸部上半にかけての破片である。口径13.0cmをはかり、内面に自然釉が認められる。33は頸部の破片である。

土製品 34は土製の紡錘車である。最大径4.8cm、最小径3.6cm、器厚2.2～2.3cm、穿孔径0.6～0.7cmをはかる。器面調整はほぼ全面にヘラミガキを施す。

鉄製品 35・36は刀子である。35は切先と茎の一部を欠損している。残存する長さは12.4cm、厚さ0.2～0.4cmをはかる。また、茎には目釘穴はなく、刀身の中央部から茎にかけて僅かではあるが、湾曲している。36は切先と茎の一部を欠損している。残存する長さは10.3cm、厚さ0.2～0.5cmをはかる。また、茎には目釘穴はない。

石製品 37は安山岩製の砥石である。ほぼ全面に使用痕が見られ、部分的に深い切削を残す。

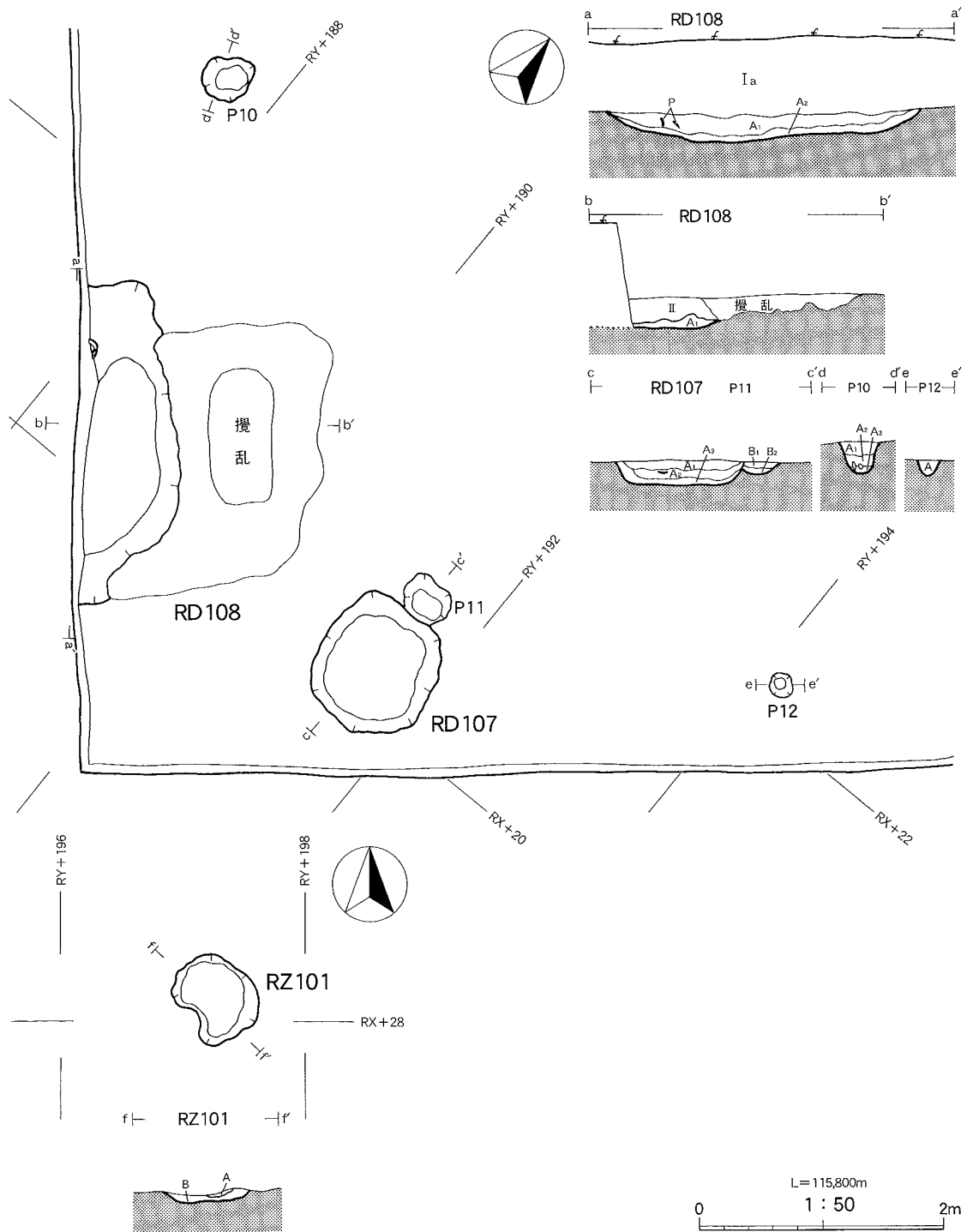
R D 107 土坑 (第 67 図)

位置 調査区南側 **平面形** 不整楕円形 **長軸方向** N 3° E

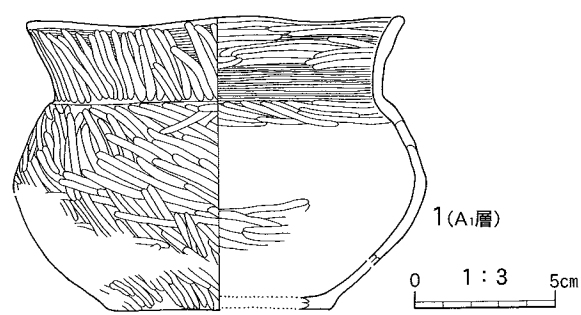
規模 長軸上端 1.07 m・短軸上端 1.00 m、長軸下端 0.86 m・短軸下端 0.78 mをはかる。

重複関係 北端でP 11を切る。 **掘込面** 削平 **検出面** 黄褐色シルト層上面

埋土 埋土は自然堆積で3層に細分される。A_{1・2}層－褐色シルト粒～塊状を僅かに含む黒褐色土。A₃層－褐色シルト塊を多く含む黒褐色土。



第67図 RD107・108土坑、RZ101焼土遺構、ピット



第68図 RD108土坑出土遺物

壁の状態 壁高は 0.18 ～ 0.21 m で、床面から緩やかに立ち上がる。 **床の状態** ほぼ平坦
出土遺物 A₂層から土師器甕の体部片が 2 点、A 3 層から土師器甕の口縁部・体部片が各 1 点出土した。

R Z 101 焼土遺構 (第 67 図)

位置 調査区東側 **平面形** 不整楕円形 **長軸方向** N 46° W
規模 南北上端 0.74 m・東西上端 0.62 m、南北下端 0.57 m・東西下端 0.45 m をはかる。
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** 黄褐色シルト層上面
埋土 埋土は層相の違いにより、A・B 層の 2 層にわかれる。A 層- にぶい黄褐色シルトに多量の焼土粒・カーボンを含む。B 層- 暗褐色シルト粒を多く含む黒褐色土。
壁の状態 壁高は 0.05 ～ 0.09 m で、外傾して立ち上がる。
床の状態 ほぼ平坦 **出土遺物** なし。

ピット群 (第 58・60・62・67 図)

14 次調査で検出した総計 12 口を数える。個々のピットの平面形は円形・不整円形・楕円形を呈し、規模は、径が約 0.30 m 以下のものが P 1～4・6・7・9・12、径が 0.30 m 以上のものが P 5・8・10・11 である。柱痕跡が確認できるものは、P 2・3 の計 2 口である。

4. 調査のまとめ

奈良時代 第 14 次調査において、検出された奈良時代の遺構は、竪穴住居跡 2 棟、土坑 1 基である。竪穴住居跡の規模をみると、R A 115 竪穴住居跡が一辺 4 m 以上、一部のみ検出している R A 116 竪穴住居跡は 3 m 以上である。平面形は、R A 116 竪穴住居跡が一部検出しているのみだが、いずれも方形を呈するものと思われる。かまどが確認されたのは、R A 115 竪穴住居跡で住居北壁に構築され、中央からやや東寄りである。床構築土が確認されたのは、R A 116 竪穴住居跡のみで、R A 115 竪穴住居跡はシルト上面または砂礫層を床面としている。このような違いは、地山であるシルト層下面の砂礫層が調査区の西側では深くなるが、東側では浅くなっており、このような地形的要因に左右されたことも考えられる。

R A 115・116 竪穴住居跡は、いずれも出土土器から 8 世紀前葉の時期と想定され、同時期の集落を構成する竪穴住居群として捉えられる。

R D 108 土坑は調査区外に拡がり、北東側が攪乱を受けており、平面形・規模は不明である。出土土器から、R A 115・116 竪穴住居跡とほぼ同時期であると想定される。

平安時代 検出された平安時代の遺構は、竪穴住居跡 1 棟、土坑 1 基である。規模が、R A 117 竪穴住居跡は一辺が 5 m 前後であり、平面形は調査区外に一部が拡がるが方形を呈する。かまどの位置は、奈良時代のものと異なり、住居東壁に構築される。R A 117 竪穴住居の時期は、出土遺物から 9 世紀中葉前後と考えられる。

写真図版



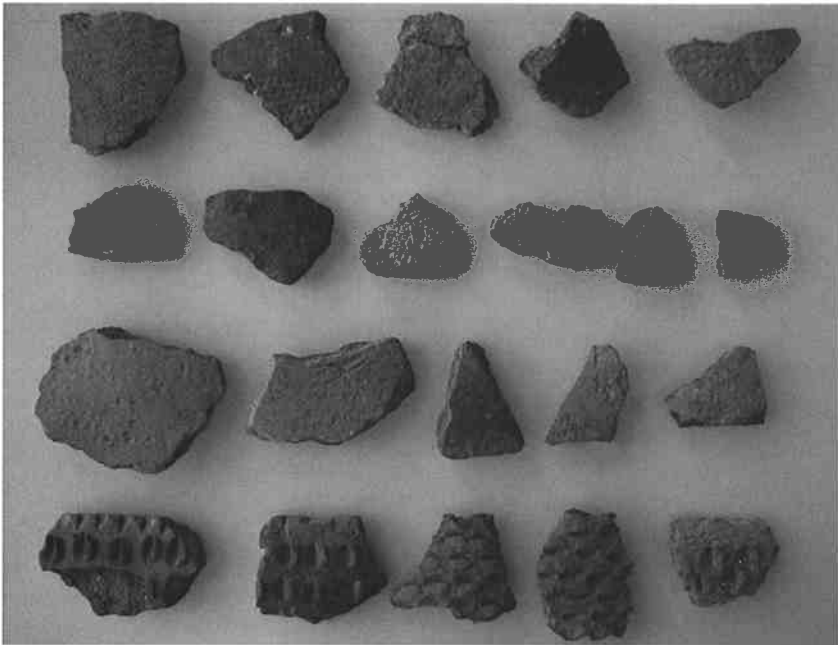
屠牛場遺跡第 1 次
調査区全景



屠牛場遺跡
第IV層出土土器



屠牛場遺跡
第Ⅲ層出土土器(1)



屠牛場遺跡
第Ⅲ層出土土器(2)



屠牛場遺跡
第Ⅲ層出土土器(3)



志波城全景



志波城跡第84次調査区全景



町田遺跡全景



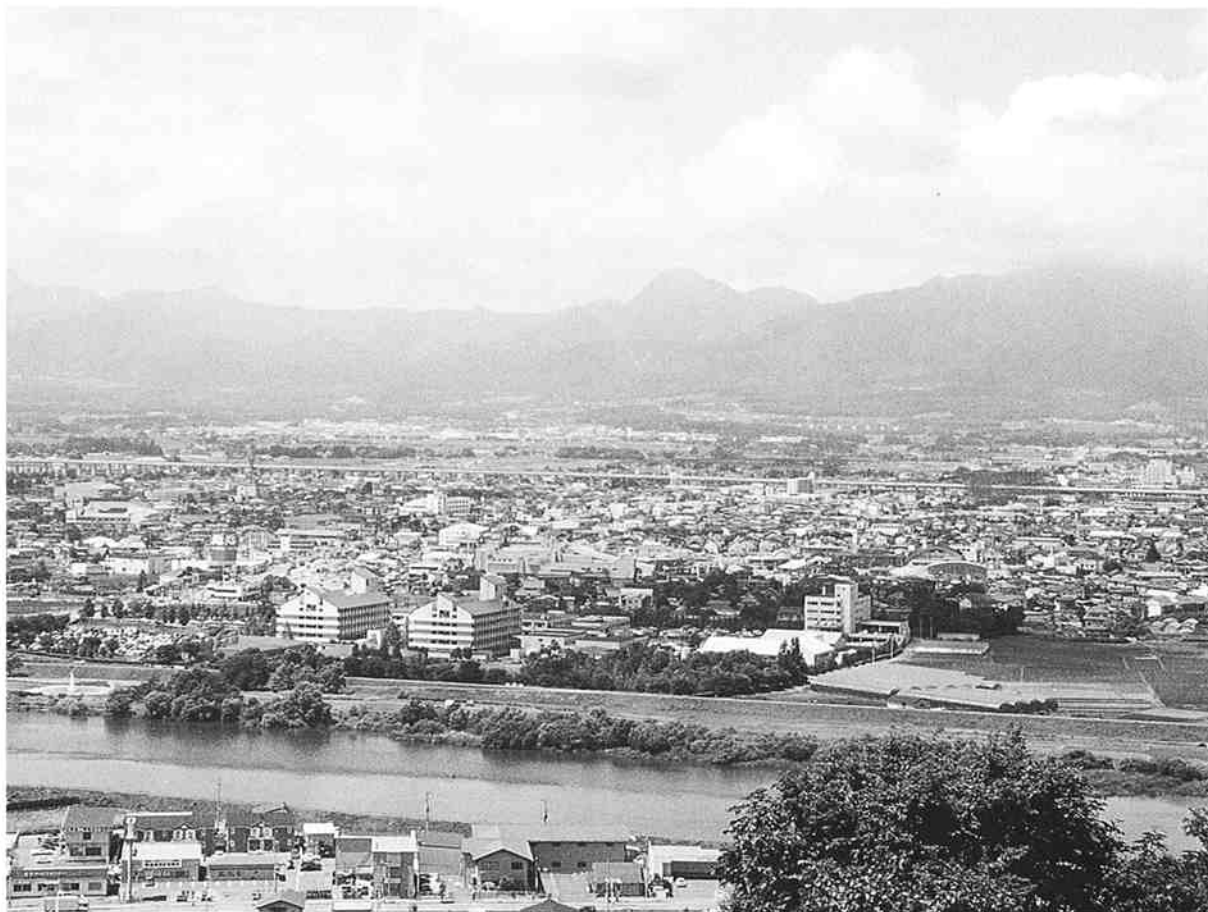
町田遺跡第10次
調査区全景



町田遺跡第12次
調査区全景



竹鼻遺跡第11次
調査区全景



百目木遺跡全景



百目木遺跡第14次
調査区全景

報告書抄録

ふりがな	モリオカシナイイセキゲン							
書名	「盛岡市内遺跡群」							
副書名	平成11年度発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	神原雄一郎・花井正香・今野公顕・三浦陽一・津嶋知弘 他							
編集機関	盛岡市教育委員会							
所在地	〒020-8532 岩手県盛岡市津志田14地割37-2 TEL019-651-4111 (内7353)							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とぎゅうばいせき 屠牛場遺跡	岩手県盛岡市 山岸3丁目 10-23	03201		39度 42分 52秒	441度 10分 24秒	第1次 19990907～ 19990928	125	個人住宅建設
しわじょうあと 志波城跡	岩手県盛岡市 下太田方 八丁 他	03201		39度 41分 02秒	141度 06分 47秒	第84次 19990901～ 19990930 第86次 19991019～ 19991029	200 80	現状変更 (個人住宅建設)
まちだいせき 町田遺跡	岩手県盛岡市 乙部30地割 地内	03201		39度 36分 12秒	141度 12分 03秒	第10次 19990407～ 19990419 第11次 19990407～ 19990419 第12次 19990823～ 19990830	155 84 198	個人住宅建設
たけはないせき 竹鼻遺跡	岩手県盛岡市 上飯岡 23-13-2	03201 03201		39度 40分 31秒	141度 05分 02秒	第11次 19990712～ 19990728	138	個人住宅建設
どめきいせき 百目木遺跡	岩手県盛岡市 三本柳 5地割33-9			39度 39分 27秒	141度 10分 15秒	第14次 19990726～ 19990830	332,82	個人住宅建設
屠牛場遺跡	集落?	縄文時代	竪穴状遺構 土坑 ピット 遺物包含層	1 8 72	縄文時代早期の沈線 ・貝殻文土器群			沈線文・縄文・撚糸文を 主体とした土器群が多量 に出土。
志波城跡	城柵官衙	平安時代	なし		なし			
町田遺跡	集落	平安時代	竪穴住居跡 土坑 ピット	2 2 1	弥生土器 須恵器 土師器			
竹鼻遺跡	集落	古墳～ 平安時代	竪穴住居跡	4	土師器 あかやき土器 鉄製品			7世紀と考えられる竪穴 住居跡を検出。
百目木遺跡	集落	奈良～ 平安時代	竪穴住居跡 土坑 焼土遺構	3 2 1	須恵器 あかやき土器 土師器			

盛岡市内遺跡群

—平成 11 年度調査概報—

2000 年 3 月 31 日発行

発行 盛岡市教育委員会

〒 020-0835 盛岡市津志田 14 地割 37 番 2

TEL019-651-4111 内線 7353 文化課

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒 020-0122 岩手県盛岡市みたけ 2 - 22 - 50

TEL019-641-8000